



昭和十九年一月二十日 編輯
昭和十九年二月十日 發行

國際月報

（自昭和十八年十二月一日
至昭和十八年十二月末日）

第三十七號

319
323

情 報 局

内閣文庫
八五〇四号
和書



319
323

國際月報 第三十七號 目次

—(1)—

大東亞戰爭二周年記念日に於ける東條内閣總理大臣放送	一頁
日獨伊間協定成立二周年に關する獨逸國ヒトラー總統宛東條内閣總理大臣祝電	五
日獨伊間協定成立二周年に關する東條内閣總理大臣宛獨逸國ヒトラー總統祝電	五
日獨伊間協定成立二周年に關する伊太利國ムッソリーニ統帥宛東條内閣總理大臣祝電	六
日獨伊間協定成立二周年に關する東條内閣總理大臣宛伊太利國ムッソリーニ統帥祝電	六
日獨伊間協定成立二周年に關する獨逸國リッペントロップ外相宛重光外務大臣祝電	七
日獨伊間協定成立二周年に關する伊太利國ムッソリーニ外相宛重光外務大臣祝電	七
日獨伊間協定成立二周年記念日に於ける重光外務大臣放送	八
日タイ同盟條約締結二周年記念日に於ける青木大東亞大臣放送	一四
大東亞青少年總蹶起運動に於ける天羽情報局總裁放送	一七
カイロ會談に關する井口情報局第三部長談	二五
戰時外交一年の回顧と展望——井口情報局第三部長放送講演——	三〇
病院船ブエノスアイレス丸不法擧沈に對する帝國政府の米國政府宛抗議に關する外務當局談	三七

戦争の眞因を歪曲せる米國の白書——來栖大使講演……………四〇

第八十四回帝國議會に於ける東條陸軍大臣戰況報告……………五六

第八十四回帝國議會に於ける島田海軍大臣戰況報告……………六一

聯合艦隊司令長官に對し賜りたる勅語に關する大本營發表……………六七

第四次ギルバート諸島沖航空戰に關する大本營發表……………六七

帝國陸軍航空部隊の各方面敵航空部隊に對する戰果に關する大本營發表……………六八

常德縣城完全占領並に重慶軍第六戰區進攻戰戰果に關する大本營發表……………六九

第六次ブーゲンビル島沖航空戰に關する大本營發表……………七〇

華北討伐肅正作戰の戰果に關する大本營發表……………七一

帝國陸軍航空部隊のカルカッタ協同進攻戰果に關する大本營發表……………七一

マーシャル諸島沖航空戰戰果に關する大本營發表……………七二

帝國陸軍の一箇年間に收めたる綜合戰果に關する大本營發表……………七三

大東亞戰爭開始以來敵米英軍に與へたる人的損害に關する大本營發表……………七四

常德附近戰果に關する大本營發表……………七五

支那方面帝國陸軍航空部隊の戰果に關する大本營發表……………七六

ビルマ方面帝國陸軍航空部隊の戰果に關する大本營發表……………七六

ニューブリテン島マーカス岬附近戰況並にマーカス岬沖及ラバウルに於ける戰果に關する大本營發表……………七七

タラワ島及マキン島守備帝國海軍陸戰隊の全員玉碎に關する大本營發表……………七九

帝國陸軍航空部隊の昆明並に雲南驛攻撃戰果に關する大本營發表……………八〇

帝國海軍航空部隊のマーカス岬附近攻撃戰果に關する大本營發表(一)……………八一

帝國陸軍航空部隊の昆明飛行場攻撃戰果に關する大本營發表……………八二

帝國海軍航空部隊のマーカス岬附近攻撃戰果に關する大本營發表(二)……………八三

帝國海軍航空部隊のマーカス岬附近及アラウエ島並にラバウル方面戰果に關する大本營發表……………八四

帝國海軍航空部隊のマーカス岬及ビレロ島並にラバウル方面戰果に關する大本營發表……………八四

帝國海軍航空部隊のカビエング、ラバウル並にマーカス岬附近等に於ける戰果に關する大本營發表……………八五

ニューブリテン島グロースター岬戰況並にボルゲン灣、マーカス岬附近及ラバウルに於ける戰果に關する大本營發表……………八六

帝國陸軍部隊の重慶第六、第九戰區敵主力撃滅綜合戰果に關する大本營發表……………八八

帝國海軍航空部隊のラバウルに於ける戰果に關する大本營發表……………八九

帝國海軍艦艇並に陸海軍航空部隊の敵潜水艦十四隻撃沈其他の戰果に關する大本營發表……………八九

國際時報

テヘラン會談の實情とその後の歐洲情勢……………九一
 ナトー赤色政權の樹立と舊ユーゴスラヴィア領の現状……………一〇四
 一九四三年度米國主要軍需生産一覽表……………一一〇

十二月中の世界戦況概観……………一一五
 十二月中の世界政治日誌……………一二二

各國動向

【米國】

—軍事—
 「幾多の苦難と犠牲とを覚悟せよ」……………一三一
 ルーズヴェルト前線將兵に放送……………一三一
 「困難はむしろ今後在り」……………一三三
 —スチムソン陸軍長官警告—……………一三四
 ノックス海軍長官空母増強を誇る……………一三四
 新歐洲進攻反樞軸軍總司令官……………一三五
 アイゼンハワー戰局を語る……………一三五

マインヤル陸軍參謀總長歸國……………一三六
 陸海軍人事異動……………一三六
 開戦以來の兵力損害拾三萬三千餘……………一三六
 陸軍航空部隊強化……………一三七
 —全附屬部隊を本部隊に編入—……………一三七
 總兵力を一千百三十萬に擴充……………一三七
 海軍婦人部隊員四萬七千名……………一三七
 「對潜水艦戰成功」……………一三七
 —米英共同聲明發表—……………一三八
 東亞戰線補給に米印間定期空輸開始……………一三八
 大西洋空輸施設の擴大整備……………一三八
 —外 交—
 ルーズヴェルト大統領歸國……………一三九
 「スターリン及び蔣介石に満足」……………一三九
 —ルーズヴェルト記者團に言明—……………一三九
 ハル國務長官伯軍の戦線參加發表……………一四〇
 對バラグアイ軍事協定締結……………一四〇
 ハル新ボリヴィア政府不承認を示唆……………一四一
 對英武器貸與總額八十四億五千萬弗……………一四一
 對ソ武器貸與總額三十五億弗餘……………一四一
 反樞軸救済復興會議東亞委員會開催……………一四一
 — 般 —
 大統領選挙前哨戰漸次高潮……………一四二
 —マツクアーサー擔出し運動も進捗—……………一四二
 上陸用舟艇建造法案成立……………一四三
 父親召集案成立……………一四三
 —徴兵局の軍隊召集權限復活—……………一四三
 上院財政委員會新增稅案を修正……………一四四
 支那移民禁止法撤廢案成立……………一四四
 眞珠灣軍法會議延期法案成立……………一四四
 議會休會……………一四五
 新戰時人的資源委員會設立……………一四五

十一月中の造船高百六十四隻	一四五
ランド海軍委員長造船海運計畫閣明	一四六
炭坑労働賃金基準協定成立	一四七
鐵鋼罷業解決	一四七
鐵道罷業解決	一四八
「開闢以來の燃料危機」	
——イツキーズ燃料局長官言明	一四九
紙不足深刻	一四九
流行性感冒蔓延	一五〇
ウイルキー對ソ危惧の論説發表	一五〇

【英國】

——軍事——	
國王ジョージ六世戦局の多難を説く	一五一
地中海並にイタリヤ方面	
反樞軸軍總司令官任命	一五一

東部戦線視察を要望	一五一
アゾーレス群島を使用	一五二
ワイアート軍事代表重慶着任	一五二
レスブリッチ軍事補給の重大性指摘	一五二
——外——	
チャーチル首相歸國途次病臥	一五二
ソ聯及び重慶との協力を宣傳	
——イデーデン外相下院報告演説	一五三
イデーデン外相ソ波調停に奔走	一五四
歐洲諮問委員會開催	一五四
——般——	
悪性インフル全土に蔓延	
——國王ジョージ六世も罹患	一五五
感冒で鐵道輸送等停頓	
——ペーカー運輸省次官言明	一五五

一週間に一千百四十八名死亡	
——保健省發表	一五六
空襲被害者著増	一五六
軍需輸送輻輳	一五六
炭坑業危機	一五六
ケーシーをベンゴール州知事に任命	一五七

【ドイツ】

「敵側の企圖悉く失敗」	
——リ外相三國協定締結記念放送	一五七
ゲッベルス宣傳相テヘラン宣言を論駁	一五九
「國民の意氣益々軒昂」	
——宣傳相降誕祭に際しメッセーヂ發表	一五九
「報復の時機を待つのみ」	
——ベルリン官爆に關し軍當局言明	一六〇
デイトトリツヒ新聞長官思想戰強調	一六一

【イタリヤ】

シユミット情報部長戦局回顧	一六二
パーベン大使ブルガリヤ外相等訪問	一六四
對ブルガリヤ經濟協定締結	一六四
オスロー大學生事件に關し公報發表	一六四
ハリコフ事件に對する政府當局の見解	
——報復として米英捕虜處置	一六五
ライン第一公使駐伊獨大使任命さる	一六六
テヘラン會談に關する新聞論調	一六六
「日本の大戦果は敵側會談への明答」	
——ブーゲンビル海戦に關する各紙論調	一六七
「東亞の盟主日本に滿腔の信頼」	
——大東亞戰爭二周年記念論調	一六八
「日獨友軍と共に再び戦はん」	
——ムツソリーニ統帥三國同盟記念放送	一六九

共同戦争遂行に關する外務省公表……………一七〇
 リツチ大將國防軍總司令官に任命さる……………一七一
 特別裁判所開設……………一七一
 大東亞戰爭二周年記念論調……………一七一
 三國同盟二周年記念論調……………一七一

【ソ聯邦】

スターリン議長歸國……………一七二
 ソチ條約成立……………一七二
 チトー共產政權に軍事使節派遣……………一七三
 ノヴィコフ駐埃公使信任狀捧呈……………一七三
 最高會議議員選舉延期……………一七三
 新國歌制定……………一七三
 マグニドブルスタ熔鑄爐操業開始……………一七五

【フランス】

ベタン國家主席國民の自肅要望……………一七五
 ベタン國家主席獨大使等引見……………一七五
 人事異動……………一七五
 情報省國內治安維持の強化言明……………一七六
 一九四三年度豫算實績……………一七六
 歐洲反攻作戰に叛軍參加……………一七七
 シリア、レバノン委任統治權の一部放棄……………一七七

【滿洲國】

國軍武官令改正……………一七八
 軍事部發表……………一七八
 第三次増稅斷行……………一七八
 平年度二億四千萬圓……………一七八
 増産推進本部設置……………一七八

【中華民國】

汪主席日滿華共同宣言の意義強調……………一七八
 汪主席の流彈擲出成功……………一八〇
 國府宣傳部發表……………一八〇
 行政院會議八議案可決……………一八一
 人事異動……………一八一
 在華北米英敵産移管完了……………一八二

【重慶政權】

蔣介石カイロ會談に失望……………一八二
 ニューヨーク・タイムズ紙指摘……………一八二
 重慶代辯者テヘラン會談に不満表明……………一八三
 蔣介石ガンヂーに協力要請……………一八三
 マツチ九片、靴一足一千五百弗……………一八四
 物價益、暴騰……………一八四

【タイ】

日タイ同盟締結二周年記念式典舉行……………一八六

議會閉會……………一八六
 金輸出禁止令公布……………一八六
 新年度豫算決定……………一八七
 人事異動……………一八七

【フィリピン】

政府と國民の親和期待……………一八八
 ラウレル大統領放送……………一八八
 議會諸法案可決……………一八九

【ビルマ】

シヤン地方の軍政撤廢……………一九〇
 ビルマ方面最高指揮官布告……………一九〇
 「シヤン・カレンニとの結合再現」……………一九〇
 パー・モウ國家代表聲明……………一九〇
 ウイン内相シヤン總督を兼任……………一九一

【インド】

「アイルランドの激動に感謝」

——ボース首相聲明——……………一九一

「國境進發の日近し」

——ボース首相民衆大會演説——……………一九二

ベンゴール州飢饉に悪疫の慘狀……………一九三

ケーシーのベンゴール州知事任命不評……………一九四

ジンナー完全獨立を要求……………一九四

【濠洲】

カーチン首相戦局を語る……………一九四

ニュージールランドと共同の政策協議……………一九五

飛行士海外派遣狀況……………一九五

【南阿聯邦】

スマッツ首相戦局の困難強調……………一九六

【カナダ】

空軍死傷者數……………一九六

軍艦建造高……………一九七

【アルゼンチン】

全政黨解散……………一九七

佛國民解放委員會事務所に閉鎖命令……………一九七

米國より金塊引上……………一九七

バゴ公共相辭職……………一九七

【チリ】

國內擾亂分子に嚴罰警告……………一九八

リオウエラ上院議長辭職……………一九九

【ブラジル】

軍事使節團北阿到着……………一九九

【ポリウエア】

軍部革命勃發……………一九九

新内閣成立……………二〇〇

「國際的立場に變更を加へず」

——ヴィリヤロエル大統領聲明——……………二〇〇

「祖國を愛する以外餘念なし」

——エステンソロー新蔵相聲明——……………二〇一

「民主主義と對米協調に基底を置く」

——タマヨ新外相聲明——……………二〇一

【ハラグアイ】

對亞通商條約其他諸協定締結……………二〇二

五ヶ年建設計畫發表……………二〇二

【パナマ】

ファブレール外相對米抗議

——米國兵の暴行沙汰頻發——……………二〇二

【スペイン】

フランコ統領國內戦線の強化を強調……………二〇二

フアランへ黨各地區指導者大會開催……………二〇三

フランコ統領軍解散を發表……………二〇三

フアランへ黨員對米英不滿爆發……………二〇三

政治犯人一千三百名釋放……………二〇四

ホルダナ外相イベリアブロック謳歌……………二〇四

【スエーデン】

ハンソン首相中立堅持を強調……………二〇四

外交官異動……………二〇五

オスロ大學生逮捕問題に關し對獨抗議……………二〇五

【フィンランド】

リチ大統領抗戰決意強調……………二〇六

豫備將校團大會を開催……………二〇七

——抗戰の決意闡明——……………二〇七

對米戰債辨濟……………二〇七

【ハンガリア】

女子登録實施……………二〇七

【スエス】

議會開會……………二〇七

シユテムブリ大統領に當選……………二〇七

【ヴァチカン】

共和人民黨政府の不參戰政策維持……………二二二

メネメンジョグル外相不參戰政策言明……………二二一

イノニュー大統領米英兩國首腦と會見……………二二一

【トルコ】

パシヤ法相サウデイ・アラビア訪問……………二二〇

【エジプト】

對日親善關係益々増進……………二二〇

【ブルガリア】

ローマ法王降誕祭放送要旨……………二〇八

シシユマノフ外相外交方針闡明……………二〇九

ウアツソフ貿易相國民の團結要請……………二二〇

【クロアチア】

アナトリア震災被害……………二二二

【イラン】

ツヘイリ首相辭表提出……………二二三

新内閣成立……………二二三

【イラク】

新内閣成立……………二二四

大東亞戰爭二周年記念日に於ける

東條内閣總理大臣放送

昭和十八年十二月八日

昭和十六年十二月八日、畏くも、宣戦の大詔を拜し奉り、我等一億同胞、齊しく醜の御楯とならんことを誓ひ奉つてより、正に二箇年を経過致したのであります。

顧みますれば、皇軍は、開戦以來、御稜威の下、善謀勇戦、特に最近に至つては、敵の大規模反攻の好機を捉へて、相次いで、比類なき大戦果を挙げ、究極の勝利に向つて、力強き歩みを進めて居るのであります。私は、茲に、諸君と共に、皇軍將兵の健闘に對し、滿腔の謝意を表すると共に、忠烈なる戦没勇士に對しまして、謹んで敬弔の誠を捧げ、且、此の間戦ひ抜く國民諸君の並々ならぬ御勞苦に對しまして、深甚なる敬意を表するものであります。

正に二年前の今日、帝國は、米英の經濟的、軍事的壓迫に依る帝國存亡の危局を打開し、自存自衛を全うする爲、驟然干戈を執つて起ち上るの已むなきに至つたのであります。正義の帥、一度進むや、米英の侵略勢力は忽ちにして、東亞の全地域より驅逐掃蕩せられ、大東亞諸民族の自覺と熱情とは、澎湃として、大東亞の天地に漲るに至つたのであります。今や、大東亞諸國家諸民族は、眞に兄弟の關係に立ち、愈々、提携を密にし、豊富なる資源を日に増

し戦力化しつつ、道義に基く大東亞を建設し、萬邦共榮の樂を偕にすべき、共同の目的達成に向つて、一路邁進致して居るのであります。而して大東亞十億民族の牢固たる共同の決意は、過般の大東亞會議に依つて、彌が上にも鞏固にせられたのであります。之を開戦前の狀況に比すれば、大東亞の様相は全く一變し、今や、我等の前途は、豁然として拓け、自信と希望とに満ちて居るのであります。

一方歐洲に於ける盟邦は戰意益々旺盛に、あらゆる困難に打ち克つて勇戦敢闘を續けて居るのであります。而して帝國と此等盟邦との提携は、日に日に、緊密の度を加へ、東西相呼應して、米英の野望を粉碎し、世界新秩序を建設すべき共同目標に向つて、勇躍前進を續けて居るのであります。

翻つて敵米英の指導者は口に正義人道、博愛仁義を叫びつつ、其の爲す所は、表裏全く相反するものがあるのであります。重なる我病院船に對する暴戾極まりなき行爲の如きは、正に言語同斷であります。彼等は、自己本位の繁榮追及の爲には、他國家他民族の犠牲の如きは、恬として之を顧みないのであります。特に、東亞に對しては門戸開放、機會均等を唱へ乍ら、自國の領土内に於ては、東亞の諸民族に對し、常に門戸を閉鎖し、不平等の待遇を與へ、結局彼等の東亞民族に求むるものは其の永久の隸屬化であつたのであります。最近カイロ會議に於て、彼等米英の指導者は擅に東亞の處置を論じ、帝國を三流國たらしめんと高言して居るのであります。是れ正に戦ひに疲れ、前途の不安に襲はれ、焦躁する彼等指導者が、當面の失敗を糊塗せんとする謀略的夢物語でありまして、洵に笑止の至りであります。而も多年彼等が掠奪し來れる全世界に互る領域と、現に彼等の羈絆の下に塗炭の苦しみを重ねつつある被壓迫民族の解放に關しては、此の夢物語に於てすら、一言も觸れて居らないのであります。彼等の求むる所は正義に

非ず。將又人道に非ず、手段を擇ばざる自己繁榮であり、舊態依然たる飽くなき他民族の搾取であります。今や、彼等は没落の一途を迎れる重慶政權に對し、小策を弄し、甘言を用ひ、之をして、無益の抗戦を繼續せしめんことを、只管是れ圖つて居るのであります。其の眞意は正に、大東亞諸國家諸民族間の離反を永續化し、之に依つて再び、東亞を米英の植民地に轉落せしめ、米英本位の東亞制覇の野望を達成せんとするに在るのであります。カイロ會議こそは、正にかかる非望を中外に暴露し、彼等究極の戦争目的が奈邊に存するかを、自ら世界に向つて公言するの愚を演じたものに外ならないのであります。

萬邦との交誼を篤うし人種的差別を撤廢し、普く文化を交流し、進んで資源を開放し、以て世界の進運に貢獻せんとする大東亞各國共同の崇高なる精神とは全く相容れざる米英本位の非望を、端的に、世界に聲明したものであります。

斯くの如き横暴非道なる指導者に驕弄せられ、戦争の苦惱日増しに、加はる米英國民大衆が、戦争目的に疑念を抱くに至るべきは、必定と信ぜらるる所であります。而も飽くなき野望達成の爲に狂奔する米英の指導者等は、焦慮の餘り、今後、愈々、其の國民大衆を欺瞞しつつ、苦しまぎれの執拗なる反攻を繰り返すべきは、當然豫期せらるる所であります。戦局の、愈々、激化し、長期化すべきは、我々の、夙に覺悟して居る所であります。

此の秋に當り、非道なる米英に對し、我等の執るべき途は炳乎として昭かであります。敵米英が暴力を以て、其の野望を達せんとする以上、我は、實力を以て、之を破碎するばかりであります。隱忍と自重との最大限を重ね、自存自衛の爲、已むに已まれずして、起ち上つた、二年前の今日の決意を常に新にし、必勝の信念の下、愈々、大東亞の

結束を強化して、何處迄も、米英撃擯の、一路を邁進するばかりであります。敵の反攻如何に熾烈なりと雖も何ぞ之を意に介するものでありませうか。斷乎、瘳殺殲滅を以て之に答ふるのみであります。更に進んで飽く迄も、何處迄も、徹底的痛撃を加へて、遂に彼等を屈服せしむるばかりであります。

蓋し、戦勝は空しく坐して贏ち得らるるものではないのであります。一億國民が、外に在ると内に在るとを問はず、夫々の職域に於て、將又日常の生活に於て、一切を捧げて徹底的に奉公の誠を致すことに依り、始めて獲得せらるるものであります。勝利の鍵は我々自身の手に在るのであります。素朴熱烈なる忠誠心、烈々たる闘魂、旺盛なる滅敵意志こそは戦勝の基礎であります。一億同胞一致團結、最善を盡して、決死奮闘するならば、勝利の榮冠は必ずや、我等の上に輝くのであります。

諸君、皇軍將兵は、最近又もやブーゲンビル、ギルバート方面に於て、又、中支那方面等に於て、奮戦激闘、見敵必殺、以て赫々たる戦果を擧げて居るのであります。悠久の大義に生きん此等將兵は、生還素より期する處ではないのであります。又、喜んで家と職とを残して前線に赴き、又は學窓を去つて、戦陣に馳せ參ずる等、國民各層の熱烈なる闘魂を見るとき、我々は、眞に、必勝の信念を固くするものであります。

國民諸君、總員戰團配置にある國民諸君、我々一億同胞は、各々其の職域に於て悉く、戰場に在るの決意を新にし、戦時生活に徹底し、戦力を増強し、戦争持久の構を固め以て戦争第三年を決勝の年となさんことを誓ふものであります。斯くしてこそ、我等は、天與の試練を突破して、皇國護持の途を全うすることが出来るのであります。

而して、此の我等一億の心は即ち大東亞十億の心であります。大東亞戦争の完遂なくして、大東亞の建設はないの

であります。大東亞十億の民族が、悉く其の堵に安んじ、共存共榮し得るに至るか、或は再び轉落して米英の秕政の下に被壓迫民族の苦惱を嘗むるに至るか、正に此の大戦争に懸つて居るのであります。我等一億同胞は、大東亞十億民族と共に、相携へて、戦争を完遂し建設を完成せんことを、更めて固く期するものであります。

茲に大東亞戦争第二周年記念日を迎へ、國民諸君と共に、二年前の決意を新にし、愈々、必勝の信念を堅持して、御稜威の下、帝國の隆替東亞の興廢を決すべき大東亞戦争を勝ち抜き、誓つて、聖旨に應へ奉らんことを期して、私の放送を終ります。

日獨伊間協定成立二周年に關する獨逸國

ヒトラー總統宛東條内閣總理大臣祝電

日獨兩國が對米英共同戦争の第三年に入るに當り余は閣下に対して滿腔の祝意を表明すると共に閣下統率の下にドイツ國民が一致團結終局の勝利に向つて邁進し居らるるに對し深甚の敬意を表せんとするものなり、余は日獨兩國が東西に於て獲得せる輝かしき戦果と之に伴ふ建設とは日獨兩國の究局の勝利を保證するものなることを確信し茲に閣下の御健康とドイツ國民の御健康とを祈念するものなり

日獨伊間協定成立二周年に關する東條内閣

總理大臣宛獨逸國ヒトラー總統祝電

日獨伊三國が米英より挑發せられたる戰爭を終極の勝利に至る迄戦ひ抜かんことを誓ひたる三國協定第二周年の歴史の記念日を迎ふるに當り予は閣下に對し衷心より祝意を表すると共に日獨兩國將兵の勇武と共同の敵撃滅の固き決意とは歐亞に於ける新秩序建設を保障するものなることを確信するものなり

日獨伊間協定成立二周年に關する伊太利國
ムツソリーニ統帥宛東條內閣總理大臣祝電

日伊兩國が對米英共同戰爭の第三年に入るに當り余は閣下に對して滿腔の祝意を表明すると共に日伊兩國が今後益々その協力關係を緊密にし最後の勝利に向つて戦ひ抜く決意を表明し併せて閣下の御健康と貴國將來の發展とを祈念するものなり

日獨伊間協定成立二周年に關する東條內閣
總理大臣宛伊太利國ムツソリーニ統帥祝電

日本帝國伊太利國及獨逸國を其の同一運命並全世界に於ける三國の高遠なる理想實現の爲共通の戰爭遂行に結合せる協定締結の歴史の記念日に當り余は茲に閣下に對し伊太利が確信を以て再び干戈を執る準備に努めつゝある今次戰爭の結果に對する不動の信念を披瀝し併せて閣下並光輝ある日本國民に對する余の最も深甚なる祝意を表す

日獨伊間協定成立二周年に關する獨逸國
リッベントロップ外相宛重光外務大臣祝電

本日對米英共同戰爭完遂に關する日獨伊三國協定締結二周年記念日を迎ふるに當り予は日獨兩國が既に勝ち得たる赫赫たる戦果と建設の跡を回顧しつゝ兩國が今後益々その聯繫を密にし戰爭を遂行するに於ては勝利の榮光は必ずや吾にありとの確信を表明するものなり、こゝに閣下の御健康を祝し日獨兩國の將來を祝福せんとす

日獨伊間協定成立二周年に關する伊太利國
ムツソリーニ外相宛重光外務大臣祝電

本日對米英共同戰爭完遂に關する三國協定締結二周年記念日を迎ふるに際し予は閣下の御健康を祝すると共に日伊兩國が最後の勝利獲得の信念の下に今後益々その聯繫を強化し世界正義の建設に邁進するの決意を新たにすものなり、予はこの機會に於て閣下の御健康と閣下の統帥する伊太利國民將來の發展を祈念するものなり

日獨伊間協定締結記念日に於ける重光外務大臣放送

昭和十八年十二月十一日

本日は日獨伊三國協定締結の記念日であります。

二年前十二月八日米英の挑戦に應じて、帝國が立ち上ると共に、獨伊兩締盟國も亦直ちに之に呼應して共同戦線に立ちました。而して日獨伊三國が米英に依つて強制せられたる戦争を一切の強力手段を以て勝利に至る迄遂行すること、及三國は相互完全なる了解に依るに非れば、米英の何れとも休戦講和をなさざること、更に又戦勝後に於ても三國同盟條約の趣旨に依つて、密接に協力提携して、以て戦後の經營を行ふことを誓つたのであります。以上の趣旨の取極が二年前の本日、三國間に成立したのであります。此の記念日を祝する爲めに本日長くも 天皇陛下には獨伊兩國元首との間に御親電の御交換を遊ばされ、且つ各首都に於て夫れ夫れ記念行事があつた次第であります。

一、二年前に帝國に對して戦争を挑發した米英は最近相會して其の眞意を明にし日本を征服して之を維新前の姿に返へし、之が妨害になる皇軍武力をもとり上げてまいらうと云ふのが彼等の戦争目的であると稱し、日本を無條件に降伏せしめ得る迄戦争を遂行すると云つて居ります。維新の姿に日本を返すと云ふのは如何なる意味でありませうか。

亞細亞は幾千年の輝く精神文明を有ち乍ら、平和と無爲との間に安逸を貪つて居つた爲め、後から追つて來た英米等の武力の前には敵することが出来なかつたのであります。彼等は過去數世紀に互つて亞細亞を西より東へと一つ

一つ侵略して進んで來ました。アラブの世界も、イスラムの世界も、而して印度も、緬甸も馬來も、ジャワも、將又フィリピンも何れも彼等の植民地と化しました。東亞大陸は南より北に至る迄、植民地若は半植民地の状態となつたのであります。彼等は亞細亞を侵略し搾取して、本國の際限なき物質上の繁榮に利用したのであります。彼等は支那を征服する爲めに、鴉片戦争をも致しました。彼等は最後に残された日本をも同様に制禦せんとして、艦隊を差向けて來たのであつて、鹿兒嶋を砲撃した英國艦隊も、ペルリの率ゐた米國艦隊もその目的は何れも日本征服にあつたのであります。

今日米英の夢見て居る所は時計の針を逆轉して日本を此の時代の状態に復歸せしめやうと云ふのであります。之が果して可能のことでありませうか。

二、日本は開國以來殆んど一世紀に互る驚異的奮闘に依つて、遂に世界の列國と共に國際場裡に馳驅することとなり、世界の進運と共に、次第に其の内容を充實し、大國として世界平和の責任を擔任すべき運命に置かるに至つたのであります。

現今の世界は人類の活動上から見て、經濟的には已に狭過ぎるに至つたのにも拘らず、資源は米英等の獨占する所となり、異民族は其の搾取する所となつて居る状況であります。然るに政治的に之を見れば世界は今日猶廣過ぎるのであつて、未だ世界が一勢力の支配に歸すべき時代には到底至つて居ないにも拘らず米英は濫りに自己の持ち分を越へて武力を以て他を支配し、世界資源の獨占と他民族の搾取とを永久化せんと試みて居ります。

日本が大國として、亞細亞の先驅として、東亞の衛りとなるは彼等の最も好まない所で、彼等は先づ日本を強大

ならしめざる爲有ゆる策動を致しました。其の最も顯著なるものは、支那を使曠して日本と相争はしめる政策の樹立でありまして昭和元年末即ち、一九二六年の英外相オーステンチエムバレンのクリスマス覺書なるものは其の著名なる例であります。分割して支配するのは彼等の常套手段であつて、歐洲に於ては勢力均衡の政策として實施せられ、支那に於ては門戸開放機會均等の政策となつて現はれました。

彼等は利己保全の主義政策を他に強制せんとする習癖を有し、彼等と同様の性格と主義とを有せざるものは、盡く之を異端者として排斥するの傳統を持するものであります。彼等は世界を英米一色として恣に之に號令せんとするもので、嘗ては英國流の平和機構 *Paris Britain* を設定したのが之であり、今日では英米流の機構を設定するのが即ち之であります。

米英は已に大國としての日本の存在を許さざる決意を堅め、政治的には其傳統政策たる分割して支配するの手段に訴へ、經濟的には其の獨占せる資源と組織せる經濟力とを武器として、經濟戦争に直進したのであります。戦争は實に真珠灣以前に既に彼等に依つて初められたのであります。

三、大東亞戦争二年にして皇軍の向ふ所敵なく、凡そ東亞の地域よりは侵略勢力を驅逐することが出来ました。全亞細亞より之を驅逐するのは尙之からであります。侵略勢力の東亞に残存する間は、東亞は之が爲自然の姿に在り得なかつたのであります。侵略勢力が驅逐せられて、茲に初めて東亞の姿は自然に復歸して其の貌を鮮明にするに至りました。

其の姿が如何なるものであるかは、支那に對する我新政策又其の延長たる我東亞政策の具現に依つて表はされて

居り、先般大東亞會議に於て、我同盟各國の政府首席に依つて採擇聲明せられた大東亞宣言に明示されて居るのであります。次ぎの五つの根本觀念より出發致して居るのであります。

其の第一は亞細亞は既に米英人の植民地又は半植民地たるべきにあらずして、侵略擄取より解放せられ、亞細亞人に復歸すべきものなりとするものであります。

其の第二は亞細亞は復興し、東亞は建設せらるべしとあります。亞細亞に於ける各民族國家が自主獨立を恢復し、相互に之を尊重し、政治的には平等、經濟的には互惠の關係を保つことが建設の基礎であつて、斯くして華隣友好の國際關係が發達するのであります。

其の第三は解放せられたる地域が、再び侵略擄取せらるることより保衛せんとするにであります。帝國が維新以來開國進取の氣象を以て、墾國の精神に基き、亞細亞解放の大事業に挺身して來つた所以は、兆民各々其の所を得る共存共榮の世界を招來せんとするに他ならぬのであります。折角解放せられた東亞が再び他の侵略擄取の對象となることは東亞民族にとつて、到底堪え得ない所であります。吾人は米洲を米洲人が歐洲を歐洲人が、各々其の所を得て共存共榮を圖るに對し何等異議を唱へるものでありません。然し乍ら東亞は當然東亞人に復歸せねばならぬと考ふるのであります。

第四の觀念は經濟的文化的には有無相通する相互開放の主義が、吾人の履むべき途なりとするにあります。依つて資源は開放し、貿易及交通は自由とし、文化は交流せらるべきことを建前とし、又海洋の自由も是認せらるべきであります。之が人類生活の本體でなければなりません。斯くして動ともすれば起る政治上の葛藤を、出來得る限

り緩和することに努力せねばならぬのであります。経済的の排他独占主義は遂に英米流の經濟戰爭の思想を生み、武力戰爭を誘致するのであります。従つて政策遂行の爲の武力戰爭が否定せらるるとすれば、政策遂行の爲の武力戰爭も亦否定せらるべきであり、之と共に、經濟戰爭を開始せるものは當然戰爭責任を負はざるべからざるものであります。

觀念の第五は平等互恵の思想は、國際關係に於て之を廣く世界に及すべしとするにありませぬ。東亞に於ける各民族國家が平等互恵の原則に基いて、共存共榮すると共に、吾人は此の主義の實行を世界に向つて要求するものであります。如何なる國家も、其の大小強弱を問はず、平等の待遇を與へられ、又互恵の關係に立つべきものと信じます。之と同様に吾人は人種差別觀念を排除し、人種に付ても平等を主張するものであります。米英の人種差別觀念の強烈なることは、白種主義や移民問題を初めとし、南阿に於ける亞細亞人排斥、米國の黒人私刑事件等に依り明かであり、右は何れも文明の汚點であると共に、重大なる政治問題を構成するものであります。人種差別待遇の撤廢がなければ、亞細亞の眞の解放もなく、又世界の眞の平和も望むことは出来ぬのであります。

四、以上は大東亞會議を通じて世界に宣明せられた大東亞諸國の政策の基本を説明したもので、帝國の政策も亦當然之に基礎を置いて居るのであります。

五、今や東亞が建設せられ、亞細亞が解放せられんとするのを見た米英は、東亞保衛の稱たる日本の大國たる存在を否認するの意圖を公表し、以て從來抱懷して居た日本征服の眞意を暴露したのであります。彼等は時計の針を逆轉して日本を維新前の舊態に押しもどさんと企圖を明にしました。現にカイロ會議に重慶を拉し來つて有ゆる甘言

を以て其の離脱を防ぎ、日支を互に相争はしめん爲め重慶に對して將來、支那を以て日本に代へんと約束を與へたのであります。彼等が不可能なる事を約束して、重慶を對日戰爭の一兵卒として彼等の利益の爲めに驅使せんとするのは、如何に日本の強大を恐るる爲めとは言へ、東亞を分裂抗爭に導き、茲に分割して支配せんとする彼等の心理を遺憾なく暴露したのと言ふべきであります。

米英は日本征服の意圖を脅喝的文字を連ねて居るに過ぎぬものであります。彼等の意圖は一つの戰爭を以て他の戰爭を誘發せんとするにあるが如く、世界平和に對し建設的なる何物をも示して居りませぬ。單に彼等の亞細亞征服及び世界支配の非望を表示するのみであります。之を我が東亞同盟諸國の採擇せる大東亞共同宣言と對比致せば、其の主張の正邪は申す迄もなく、一つは建設的なるに反し他は破壊的にして人類歴史上好個の對照をなすものと云はなければなりません。民族覺醒の黎明を迎へて全亞細亞に自主獨立の氣運が澎湃として興りつつある秋斯かる米英の小策は到底效を奏すること能はざる次第であります。

六、帝國は今や我同盟諸國と協心戮力して、東亞を解放し、保衛し、建設せんがために、國運を賭して勇戰奮闘しつつあります。東亞は東亞人の郷土であります。この一戦は郷土防衛の戦であります。東亞が果して米英の桎梏より解放せられるか、或は又再び英米の植民地となつて、壓制と搾取の下に、永遠に呻吟するに至るか、それは懸つて此の一戦の歸趨にあるのであります。此の一戦こそは帝國死活の戰爭であると共に、實に東亞の獨立戰爭であり而して獨りアジア解放の戰爭たるに止まらず、世界正義を顯揚する大戰爭であります。米英の世界支配の野望を破碎し、公正なる永久平和を招來せんことを期し、日獨兩國は東西に於て、善謀勇戦して、光輝ある戦果を擧げつつあ

つて敵側の焦慮の色歴然たるものがあります。日獨兩國が、歐亞に於ける與國と共に、必勝の信念に復し、戦ひ抜くならば、終局の勝利の我等に歸すべきことは火を見るよりも明かであります。

日タイ同盟條約締結記念日に於ける青木大東亞大臣放送

昭和十八年十二月二十一日

親愛なるタイ國民諸君

本日は日タイ攻守同盟締結の二周年記念日であります。昭和十六年十二月大東亞戦争の勃發しまするや逸早く日タイ兩國は「東亞に於ける新秩序の建設が東亞興隆の唯一の方途にして且世界平和の恢復及増進の絶對要件たることを確信し之が障礙となれる一切の禍根を抜根絶する確乎不動の決意を以て」攻守同盟を締結することに意見一致し、二年前の今日今日バンコックに於きまして坪上大使とビブン元帥との間に嚴かに同盟條約が署名調印されたのであります。此の意義深き記念日に當り親愛なるタイ國民諸君に對しラジオを通して聊か所感を申上げる機會を得ましたことは私の頗る欣快とする所であります。

先づ第一に私はタイ國民諸君が大東亞諸國の自主獨立を確保し亞細亞民族永遠の興隆を招来すべき共同の戰爭を完遂するが爲凡ゆる困難を克服し重要な役割を果されつゝありますことに對し深甚なる敬意を表するものであります。

願ひまするに此の二年間帝國及同盟國の力戰奮闘に依りまして亞細亞民族永住の地たる大東亞の天地より米英の侵略的勢力を悉く驅逐し道義に立脚する大東亞建設の大業が着々進行しつゝありますことは洵に御同慶に堪へない次第であります。即ち從來米英の掌中に在りたる大東亞の戰略的要域と豊富なる經濟資源とは、既に悉く我々の確保する所となり一方タイ國は嘗て英國の好策により奪取せられたる廣大なる領域を恢復し、中華民國は治外法權の撤廢、租界の回收等に依り其の完全なる主權を恢復し、ビルマ、フィリピンの兩民族は獨立の榮譽を獲得しインドネシア民族には政治參與の制度が與へられ、更に自由印度假政府が樹立せられ、茲に十億の亞細亞民族の解放、興隆の基礎は確立せられたのであります。而して去る十一月には大東亞各國の代表者が東京に會合し大東亞會議を開きたることは御承知の通りであります。此會議に於きましては米英の東洋制覇の野望が今次の戰爭原因たることを明にし従て此戰爭が米英の桎梏より東亞を解放せんとする聖戰たるの本質に照し各國は相協力して戰爭の完遂を期すべき牢固たる決意を表明したのであります。又大東亞建設の綱領として五原則を決議したのであります。其内容の雄渾にして公明正大なることは獨り大東亞建設の大憲章たるのみならず全人類の國家生活の規範として中外に誇るべき大東亞民族の道義精神の表現であります。今や大東亞十億の民衆は此共同宣言を中心として堅く結ばれ共同の使命達成に向つて邁進しつゝあるのであります。

他方緒戦に於て大敗を喫したる米英は其の後必死の反撃を續けて來たのであります。が皇軍の善謀勇戦は克く彼等の企圖を破推し帝國の必勝不敗の態勢は微動だにして居りません。開戦以來皇軍が米英軍に與へましたる人的損害は實に四十萬人、物質的損害は艦船約二千二百隻、飛行機約一萬二千機の莫大なる數に上つて居るのであります。米英の

爲政者は戦死者の葬儀を公然行ふことを禁じ其の遺族に喪服の着用を禁止して居ると云ふことでありますが之は一體何故でありませうか、申す迄もなく彼等米英の爲政者は自ら無名の戦争を帝國に對して挑發して置きながら只今述べましたるが如き莫大なる人的及物的損害を蒙りたる其の大失策を自國民に蔽ひ隠さんが爲めでありませう。然しなから斯くの如き大損害を何時迄も自國民の耳目より蔽ひ隠し得ざるべきことは勿論であり今や彼等の國內に於て戦争目的に付て論議を生じて居ることは當然であります。従つて彼等は其の國民に對する手前、今や著しく焦燥の氣分に追はれて遮二無二大反撃を試みんとして居ります。然し乍ら之は我方の當然豫期せる所であり、之が對策自ら成算を存するのであります。殊に明年度以降は敵の生産力増大の勢は停頓するに反し、我が生産力及戦力は國內決戦體制の強化に依り今後愈々増強せられるのでありまして、我が戦略上の地位は益々鞏固不拔となり、敵の反攻企圖を根本塞源的に完封破摧し得べき十分の確信を有するのであります。

斯くて戦争の前途に自信を失ひつゝある敵米英は特に最近宣傳及謀略に依つて樞軸諸國の離間を策すると共に其の戦意の挫折を圖らむと狂奔しつゝありますことは注意すべき事實であります。又彼のカイロ會談、其他の諸會談の如きは内心他國の犠牲に於て自國の利益のみを追求する米英が其の與國との關係を表面上糊塗せんが爲めのものであり、又敗戦の憂目を見つゝある米英が、恰も勝利を得つゝあるかの如く或は又戦争は短期に終了するかの如く、自國民を欺瞞せんが爲のものに過ぎないのでありまして、何等意に介する必要はないのであります。殊にカイロ會談の決議の如き其内容に於て建設的なる何物も無く寧ろ重慶政權の脱落を防止せんが爲めの空手形の發行に終つたことは御承知の通りであります。之を前述の大東亞共同宣言の構想の雄大にして建設的なるに比すれば誠に好き對照と申すべきで

あります。大東亞諸民族の團結は此の宣言に依つても明かなる通り道義と信義とに基く鞏固なる結束でありまして、敵米英の自己本位の宣傳謀略に依つて微動だにするもので無いことは申す迄もありません。

私は本年四月貴國を訪問し貴國政府首腦者と親しく懇談する機会を得又盟邦國民諸君の戦争遂行に對する眞剣なる御努力を親しく拜見致し洵に力強く存じたのであります。本日日タイ結盟の記念日を迎へ貴國訪問の記憶を新に致しますると共に兩國の同盟こそ大東亞建設の一大推進力なりとの信念を更に強むる次第であります。

茲に私は衷心よりタイ國國運の隆昌と國民諸君の御康寧とを祈念して私の放送を終ります。

大東亞青少年總蹶起運動に於ける 天羽情報局總裁放送

——於 豐島公會堂——

昭和十八年十二月二十二日

昭和十六年十二月八日、世界は岐路に立つた。

米英は、世界各地を侵略し、擄取し、世界制覇の野望を逞しくせんとして居た。

日獨伊は、世界の各民族を米英の侵略と擄取より、解放して、各々その所を得しめ、新しき、正しき世界を作らんとして居た。

右せんか左せんか、世界諸民族は、正に十字路に立つた。

米英の政策は天下を獨占し世界を支配せんとするにある。他國家、他民族の勃興を、抑壓せむとして居る。日本やドイツの擡頭を抑へんが爲に、あらゆる謀略をめぐらし、又萬一の場合に備ふる爲、戦争の用意をして居た。

ルーズヴェルト始め米國官憲は日本が眞珠灣で不意討を喰はしたと云つて記憶せよ、眞珠灣！と叫んで、輿論の昂揚に狂奔したが實は米が戦争の準備をして我邦に挑戦し來つたのである。

米國政府の發表によれば日本駐米大使グルーの如きは、今から丁度十年前一九三四年十二月二十七日米國政府に對する日本一般情勢報告の結論として、

日本との關係を觀測する場合に若し日米戦争勃發の可能性を考慮せざることあらばそれは罪惡的にして近視眼的見解である。

と述べて、米國は急速に軍備を充實する必要ありと警告してゐるが事實米は對日軍備に怠りなかつた。

一昨年日米交渉中に於て米は經濟壓迫により我邦を屈服せしめんとしたのであるが之だけでは日本は參らぬと見たから戦争は到底避けられないときめこむで愈々戦争の用意をして居た。次いで米國政府は我邦に十一月二十六日附を以て最後通牒的覺書を送つたのであるが、其の三日後即ち二十九日に、國務長官ハルは、英國大使ハリファックスに向つて、日本との關係は、外交的には、事實上終結して、今や事態は陸海軍當局の手に移つたと言明して居る。

米國政府は、此の覺書を日本に發送すると共に、夫々當該軍憲にも訓令を發して戦闘の準備についたのである。

眞珠灣の敗戦は、決して日本の願討では無く眞珠灣敗戦査問委員會報告が斷定して居る如く米國政府も軍部も我邦

との戦争を豫め準備して居たのであるが、あの史上未曾有の惨敗を喫したのは全くハワイ防備責任者の怠慢によつたものである。

今次の歐洲戦争が勃發するや、獨逸は、連戦連勝、歐洲大陸及北阿まで席捲したが最近反樞軸側は反撃に出で同時に米英は今にも獨逸が崩壊するか如く猛烈なる宣傳をして居る。

しかしドイツの東部戦線に於ては、其後大なる變化なく、イタリー方面に於ては、米英軍は當初の意氣込に反して其後一向進まずバルカン方面に於ては、ドイツは、先手を打つてロス、サモス諸島を占領して東地中海よりの攻撃に備へ、又、大西洋からノールウェーの北岸一帯を要塞化して、敵が第二戦線を企圖すれば、デイエツフの二の舞を演ぜしめんとして居る。

米英は、ドイツの都市を空襲して、一舉に國民を恐怖降伏せしめんとしたが、其の結果は全く豫期に反し、ドイツ國民は空襲に依つて敵愾心を強め、對英報復熱を愈々高めつつある。

かくて獨逸は所謂歐洲要塞に立籠り得意の體制によつて敵軍を迎へ撃たんとして居る。十一月十日チャーチルはギルドホールに於ける演説で一九四四年は更に米英の犠牲多きを覺悟せねばならぬと豫告して居る。

東亞に於ても米英は西南太平洋、南太平洋、ビルマ及支那大陸方面よりの反攻や日本本土攻撃を頻りに呼號し先づソロモン、ギルバート方面に反撃を開始したが、六回に互るブーゲンビル島沖航空戦、四回に互るギルバート諸島沖航空戦に非常な痛手を蒙つた。十一月初めルーズヴェルト、ノックス等は米軍のブーゲンビル作戦前に自信たつぷりの言明をしたが事志と違つた。

米英の作戦はかくの如く何れの方面に於ても其宣傳の程には進まない。

其上半米英の國內に於ては現政權に對する反對氣運が漸次擡頭して紛糾を増す徴候があるのでルーズヴェルトは來年大統領選舉に先立つて華々しき戰果を擧げて其の立場をつくらんとし、チャーチルも亦、戰果によつて政治的立場を固めむとして居る。夫れに英領域内の印度人問題、米國の黑人問題の如き人種問題が漸次紛糾せんとして居る。又此戰爭に於ける米英の人的損害は我軍の與へただけでも約四十萬に達するが、米英官憲は極力之が隱蔽を計つて居るに拘らず次第に暴露するので人心の不安動搖は昂りつつある。其他經濟上、社會上の理由からも戰爭に對する倦怠が顯著になつて來た。

又米英關係を見るに過日太平洋方面を視察したる米國上院議員團體の英國攻撃、シカゴ、トリビュン社長マコーミックの英國植民地合併論の如き反英的意見も出て居るが事實問題としても、英國植民地に對する米國の干渉が激化するにつれ、米英間の摩擦は著しくなつて來た。更に又米英の對蘇關係に於ては、東ヨーロッパ諸國バルカン乃至ヨーロッパ全體の問題に就いて益々複雑微妙になりつつある。

他方東亞諸民族の結集愈々固く大東亞の建設も着々進捗し我邦の立場が益々固りつつあるので米英は大東亞の基礎が確乎不動の大勢を整へざる内に我邦を擊推せむと焦つて居る。そこで米英は戰闘に併行して宣傳と謀略を激化して我方を切崩さんとしつつある。カイロ、テヘラン會議の如きは其一例であるが之も失敗に終ることは明かであつて既に米英の國內に於てすら之に對して相當に批判が出て居る。米國の軍事評論家ハンソン・ポールドウィンは、「米英兩國が日本帝國の破壊を公言して日本を恐喝することは、却つて日本人の自尊心を傷け、決意を固めしめる結果に終り

はしないかと心配して居ると米國の社會黨首ノーマン・トーマスは十二月四日、フィラデルフィアに於ける米國戰爭防止評議會年次大會に於て、「米英聯合國側が、アジアに對する白人帝國主義を放棄せずして日本を處理することは出來ない。又日本の如き進歩的な民族を、あくまでも狭い地域内に押し籠めて置くことは出來ない。英國が依然香港、九龍を確保せんとする間は、アジアの平和は望み得ない。カイロ會談は些かも此等の重要な問題に觸れて居らぬ。」と言つて、カイロ會議を攻撃して居る。又テヘラン會議についても米英國民は期待に反し失望して居ると傳へられて居る。

しかし何と云つても米英の得意とするところは、宣傳と謀略である。この戰爭に於て、米英が成功したと誇つて居る北阿とイタリー方面について見るも北阿の方は米英がヴィシー政府の副主席ダラン提督に働きかけ、其裏切によつてフランス軍を誘惑した爲である。しかし、其ダランも、用が濟めば暗殺せられて居る。

イタリーの崩壊も、パドリオの裏切によつたのであるが、同盟國を欺き史上嘗て見ざる汚點を残した此の「パドリオ」も今や米英にも相手にせられず賣國奴として其當然受くべき運命を辿りつつある。

又米英は、目的の爲には手段を選ばず其口に唱ふる人道主義博愛主義を蹂躪して、唯戰ひに勝たんとあせつて居る。空襲によつて都市を破壊し、無辜の老若男女を殺傷して敵國人を恐怖に陥れ、降伏せしめんとして居る如きは其一例である。又病院船の如きも米英は好むで攻撃撃沈し日本の被害だけでも十二隻に達し居る。全く國際法も正義も人道も何もあつたものではない。實に米英の鬼畜的暴虐非道は神人共に許さざるところ我々は徹底的に之を膺懲せねばならぬ。

米英は、現在、あらゆる宣傳謀略によつて日獨の國內を撓亂し、日獨國民の戰意喪失を圖り、日獨を離間せむとして居る。即ち、ドイツを目標としては、バルカン、イベリア、スカンヂナビヤ方面の諸中立國に働きかけ、東亞に於ては、重慶を中心として、大東亞共榮圈内の諸國に働きかけて居る。然も近來に至り、其の宣傳謀略振りが餘りにも猛烈にして過激を極めるに至つたのは、彼等内部の焦燥氣分を遺憾無く反映せるものと言へよう。

米國官憲が焦るのも無理もない。戦争が永びけば國民は益々戦争に對する疑惑を深くする處があるからである。なぜならば元來米英國民は何の爲に戦争して居るのかわからぬのである。

此の戦争は、米英にとつては、唯世界を征服せんが爲の戦争であり、正義に反する戦争である。従つてルーズヴェルトも戦争名目のつけやうがない。一時は生き残る爲の戦争とか何とか考へた様だが、元來が名分のたぬ戦争であるから、如何にしても名實を一致せしめることは困難である。如何に美辭麗句を並べて見ても、やがて其の馬脚を露はすべきことは當然である。

最初英國は、ドイツに對する戦争は、ポーランド、チエツコ・スロヴァキヤ、其の他東ヨーロッパ諸小國を擁護する爲だと言つて居たが、今ではこれら諸小國に對する態度は曖昧模糊たるものがある。

又米英は、大西洋憲章を以て、領土不擴張主義、民族自決主義を唱へて居たが、今では米英はヨーロッパ諸小國の權利などは無視して居るし、又領土擴張の主張を爲し最初の主義は何時か葬り去られたらしい。

米英は戦争勃發の當初は其の野望をかくすのに腐心して居たが時を経るにつれ其野心は漸次暴露し、カイロ會談に於ては愈々其の馬脚をあらはした。米英は我邦の領土を奪ひ我邦を第三流國に落し、東亞民族を隸屬化せんとする意

圖を明にした。

十二月二日のニューヨーク・タイムスは、其論說中に米英は、ベルリ提督が日本の門戸を叩いた一八五三年の地位に、日本を追ひ戻すのであると誇言して居る。ベルリは、幕府が注意せしにも之を顧みず、東京灣を自國の港灣であるかの如き態度で勝手に測量し、自分はアメリカの法律は知つて居るが、日本の法律は知らないと言嘯いて居たのである。又約三十年前我々が最初に支那に行つた頃は北京や天津の税關俱樂部や、上海の公園の入口には支那人及び犬は入るべからずと書いた標札があつた。

米英は、右の様な状態に日本や支那を引き戻し、東亞を奴隸の境地に置かんとして居るのである。

南阿の首相スマツツは、去る十一月二十五日ロンドンの英帝國議員協會秘密會に於て、戦後の世界に於ては米英の三國が指導國家とならねばならぬと公言して居るが米英は、ソ聯をしてドイツに當らしめ、又蔣介石をして日本に當らしめて、出来るだけソ聯及び中華民國を疲勞せしめ、消耗せしめんとして居る。米英の言ふところは、三大國であらうが四大國であらうが實は米英だけで世界を支配せんとする腹である。

これに反し、日本の戦争目的は極めて公正明白である。吾々は米英の大東亞諸國に對する侵略を防ぎ、大東亞の安定を確保し世界の平和を維持せんとするのである。我々は大東亞民族を米英の桎梏から解放し、以て正しき世界をつくらんとするのである。これ大東亞諸國家諸民族が翕然立つて日本と共に戦争の完遂を誓ひ、大東亞共榮圈の建設に邁進する所以であるが之を反映したものは實に過般の大東亞會議、並に大東亞宣言である。

此の大東亞宣言に表明せられた大東亞建設要綱は、要約すれば、共存共榮、獨立親和、文化昂揚、經濟繁榮、世界

進運貢獻の五原則であるが、この五原則こそは實に大東亞建設の大憲章であり、世界再建の金字塔であり、燦として光り輝いて居る。我々大東亞民族は實に此大宣言を生かさむが爲に戦つて居るのである。

我々は日本の爲にも、大東亞の爲にも、世界の爲にも、如何にしても此の戦争に勝ち抜かねばならぬ。今我々の念中には、唯戦争に勝ち抜く一念以外には何もものもない。我々の全生活も亦戦争完勝の一點に集中さるべきである。この帝國の隆替、大東亞の興廢、世界の安危に當りて、戦争の完遂に應分の力を盡すことを得るは我々無上の榮譽でもあり亦誇りでもある。

一昨日發表せられたタラワ、マキン勇士の玉碎は壯烈無比鬼神を哭かしむるものあり我々は此報道に接して勇士の奮闘に對し無限の感謝を致すとともに極度の悲憤を感じた。我々はハワイ、シドニー、アツツ其の他各方面に於て玉碎せる幾多の軍神勇士に對して最大の敬意を拂ひ最高の尊崇の念を捧げて居るが此等勇士の犠牲に對しては何倍にもして其仇を討たんとするのである。

開戦以來、御稜威の下我が皇軍は到るところ連戦連勝、輝やかしき戦果を挙げつつあることは、寔に同慶に堪えぬ。然し敵も執拗必死の反撃に出て既にソロモン、ギルバート、ニューブリテン方面では凄愴苛烈を極むる戦闘が夜も晝も繰返されて居る。忠勇無比なる我皇軍の將兵は激闘又激闘、到る處で血みどろになつて戦ひ驚くべき戦果を挙げつつある。しかし前線の將兵をして更に更に思ふ存分働いて貰ふ爲には我々銃後に於ても前線將兵に劣らぬ働きをして飛行機、船舶の増産其他戦力の増強を計り又食糧の増産に努めなくてはならぬ。たゞ我々國民の總ては必しも直接飛行機、船舶の製造や食糧の生産に従事して居るものではないが我々は何れも直接間接之に關係して居ることを知

らねばならぬ。従つて各人は如何なる職業、如何なる持場に在るにせよ、その與へられた職場と持場に於て、常に最善を盡して働き抜く、頑張り抜くことが、戦力を増強し食糧を増産し、國家に盡す所以となるのである。

我々は今敵を反撃して勝利への基礎を作りつつある。ここ暫くが大事である。只今我々の努力如何で勝負は決する。我々は敵が何と言はうとも敢へて恐れるものでもなければ、又迷はさるものでもない。又戦争の一張一弛に一喜一憂するものでもない。我々は最後の勝利に對して、不動の信念を持つて居る。然し勝利は坐しては來らず、唯我の奮闘努力あるのみである。我々一億は、眞に聖戦の本義に徹し、一切を捧げて大君に歸一し奉りてこそ最終の勝利が齎らさるることを、篤と肝に銘ぜねばならぬ。

青少年諸君、諸君は各々異なる職業を持ち、異なる職場に働き、或は學業に勵みつつあるが、其何れにせよ、軍國に奉公し、戦争の完遂に寄與しつつあるのである。然し敵米英に於ても、滿十八歳に達した者は原則として徵集せられ、又軍事に参加して居ることを忘れてはならない。此の戦争に勝ち抜く爲には、我陸海の將兵が米英の將兵に勝ち、我が銃後の國民が、敵の銃後の國民に勝つ如く、諸君も亦敵の青少年に勝たねばならぬ、今回諸君が大東亞青少年總隊起運動に参加し、中華民國及び滿洲國青少年と相携へて、戦争目的に突進し、道義に基く大東亞を建設せんとするは寔に崇高なる使命と言はねばならぬ。我々は諸君が益々奮闘努力よく其使命を達成せむことを期待するものである。

カイロ會談に關する井口情報局第三部長談

昭和十八年十二月九日

米英兩國並に重慶政權を代表するルーズヴェルト、チャーチル、蔣介石の三者は、去る十一月二十二日から六日間、北アフリカのカイロにおいて會談を重ねた。その結果、彼等が世界に向つて公表したコミュニケは、三國共通の戦争目的として、日本の無條件降伏と、日本の領土の奪取によつて、日本を永く三流國の地位に釘付けすべきことを述べて居る。従來、しばしば行はれた米英側の會談に比べてこのカイロ會談の持つ特徴は、それが太平洋並に東亞の戦局を直接の目標としてゐる點と、重慶に對しきりに媚態これ努めてゐる點である。米英兩國の指導者にして、アジアの國民にたいしかくの如き謙抑を極めた態度に出たことは、不幸にして吾々はこれを知らないものであつて、吾々はむしろこの宣言を通して、今や敵の陣營においてすら、米英の不當なる優越が否定され、アジア國民の正當なる地位が恢復されつつあるのを見る。たとひ、それが政略上の形式であるにせよ、重慶政權を以て、三大聯合國の一つとして待遇しない以上、これを米英側に繋ぎ止めることの不可能なる日が遂に來たのである。

しかしながら、若しも、米英兩國が單に一片の宣言に止まらず、アジア各國に對して、眞に平等公正なる態度に出たならば、少くとも太平洋並に東亞に於ける戦争は發生を見なかつたに違ひない。日本はかつて、いかなる意味にせよ、太平洋を超えて、合衆國の米大洲政策に干渉したこともなければ、そのやうな意圖を示したこともない。然るにほしのままに國境の觀念を遠く東亞に延長して、さながら世界の警察官の如き態度をもつて、日本の正當なる民族的發展の途を妨害し、遂に經濟封鎖の暴舉を敢てしたのは合衆國の指導者である。また、中國において、最も殘虐なる武力をもつて奪掠した權益を擁護せんがために、支那事變の終始を通して、公然たる援蔣行爲を續けて敵性を示したものは、イギリスである。更にビルマ、フィリピン、舊蘭領印度等、大東亞の全地域は少くとも大東亞戦争の以

前にあつては、事實上、米英兩國の支配下におかれてゐたのであつて、大東亞の各國、各民族はすべて、米英の権力に屈從するか、然らざればこれにたいする反抗者として迫害と制裁を蒙る他はなかつたのである。而も、かくの如き人類の道義上、許すべからざる米英の壓制は悉く近代の初頭以來、彼等がその優越せる武器の力によつて築き上げたものであり、實に他民族の犠牲によつてのみ、自己の繁榮を圖るといふ、アングロ・サクソン一流の帝國主義的政策こそ、世界における不安と戦争の原因なのである。

然るに、大東亞戦争における二箇年有餘の経験は、米英兩國の指導者をして、二つの切實なる教訓を得るに至らしめた、即ち、その一つは太平洋並に東亞における巨大なる日本の戦力であり、他の一つは、ひと度、米英の桎梏から解放せられた大東亞各國、各民族が何等の強制を加へられることなく、あたかも水の低きにつくが如く、翕然として一大團結を遂げんとしつゝある事實である。

元來、合衆國の國民大衆にとつては、今次の戦争は、その生存上、何等本質的關係を持たぬのであつて、それ故にこそ、合衆國における戦争挑發者の一群は、國民を戦争に動員するために、凡ゆる術策を弄せざるを得なかつた。彼等は先づ、日本國民をもつて天性の好戦國民といひ、日本の自衛政策をもつて侵略行爲となし、次いで、日本を經濟的にも軍事的にも弱小國となすことによつて、合衆國國民を安易な戦争支持者に轉化せしめた。従つて彼等がつぶさに経験した如き太平洋における苦戦と敗北の連続は、やがて國民の抗戦心理に重大なる混亂と動搖を與へずには措かない。而も彼等が太平洋における日本への反抗を強化せんとする場合、必要缺くべからざる條件は、重慶政權の利用による大陸基地の獲得である。重慶は先づ、戦略上の意味において、米英側から再評價されるに至つたと云へ

る。
 しかしながら、一方、大東亞における現實は、ビルマ、フィリピンの獨立をはじめ、日、タイ、日華同盟條約の成立等に見る如く、従前、米英の支配下におかれたる當時に比して、全く革命的な變化と發展を遂げつつある。殊に去る十一月五日から、二日間におきたつて、東京に開かれた大東亞會議と、その結果、採擇せられた大東亞共同宣言の如きは、米英側の凡ゆる誹謗と中傷にもかかわらず、いかに大東亞の各國が相互の獨立を尊重し、而も大東亞共同の敵にたいする防衛に協力することにおいて、積極且つ誠實を極めつつあるかを全世界に闡明したものである。而も、大東亞の建設が決して、戰爭終了後の空手形ではなくして、實に生々しい戦火の中に、着々として實現されつつあることはこの宣言に無限の權威を與へるものである。重慶政權の内部においてさへ、この影響は顯著なるものがあり、最近における行政院副院長孔祥熙、或は合衆國から歸朝したばかりの評論家林語堂の演説等は、日本にたいする抗戦下にありながら、尙、東亞民族としての自覺が、米英にたいする新しい批判を生み出しつつある一つの傾向を示すものである。米英兩國が重慶政權を迎へるに今更の如き媚態を示さざるを得ないのは、大東亞の新しい事態に即應して、ともすれば、米英の陣營にあることを懷疑し、批判せんとする重慶治下の民心を、いかにもして抑止懐柔せんとする政略上の必要によるものであると思へる。

以上述べた如く、カイロ會議なるものは、深刻な軍事上の打撃に悩みつつある米英側にたいして、勝利と建設の理念を明示した大東亞共同宣言が與へた一種の投影に過ぎないのである。而もこれによつて米英の戰爭目的はいよいよその正體を暴露する結果となつた。即ち、米英は、日本の領土を奪略し、日本を永久に三流國として釘付けにするこ

とを戰爭目的として公言してゐるのである。これこそ、大東亞共同防衛の中樞をなす日本を打倒することによつて、全東亞民族を再び、その脚下に蹂躪せんとする非望を示すもので、米英は彼等が嘗て、東亞において享受した支配と獨占の復活を妨げるものが、何よりも日本の實力であることを痛感してゐるが故に、その日本の實力破壊に全力を傾倒せんとして居るのである。彼等が、日本の打倒を口を極めて強調しながら、日本によつて解放せられた大東亞諸民族にたいする措置について、何等觸れるところのないのは、ひと度、日本の實力破壊に成功した暁は、直ちにこれ等大東亞諸民族をその壓制下となり戻すことをもつて、當然の歸結と考へてゐるからである。

而も、米英としては、かゝる日本にたいする戰爭が、困難にして長期に互ることは、認めざるを得ないのであり、その戰爭の犠牲と負擔を同じ東亞民族の一つたる重慶、中國にたいして強制せんとしつゝあるのである。合衆國の如きは、六十數年以前の立法にかゝる中國移民禁止法の撤廢にさへ、實に前後一年の日子を費したほど、アジア民族にたいする差別觀念を固持して譲らない。カイロ會議に示された米英の意圖は大東亞にたいする米英の飽くことを知らぬ侵略の野心であり、これを復活する唯一の方途として、先づ日本の打倒を企て、而もそれを東亞民族そのものの犠牲において行はんとする、この三點につきるのである。

吾々は、今日、米英自らの口から、大東亞破壊の非望の公言せらるるのを聴き、大東亞民族の共同防衛を更に強化すべきことを痛感すると共に、實に世界人類の平和と福祉のために、その非望を破砕することのいかに緊要なるかを知り、いよいよ、米英にたいする戰意の昂揚を禁じ得ないのである。

戦時外交一年の回顧と展望

情報局第三部長 井口貞夫

昭和十八年十二月二十九日

千九百四十三年、即ち昭和十八年は總反攻の年である。敵米英は昨年からかう宣傳して居りました。その昭和十八年もいよいよ押しつまつたのでありますが、今日過去一年を振り返つて見ますと、なるほど敵はこの一年間といふもの、反攻の企圖を續けて來て居ります。南からも北からも、最近は中部太平洋でも、敵は我が鐵壁布陣に挑戦し、支那大陸やビルマでも主としてゲリラ空襲ではありますが、敵は反攻を試みて居ります。しかしながらそのために彼等は莫大な犠牲を拂ひ、その犠牲の大きさに比べると、彼等の得たところは氣の毒なほど貧弱であります。一年半にわたる莫大なる犠牲を伴ふ攻撃によつて、敵は皇軍が半年の間に占領した地域の何百分の一かを取りかへしただけではありません。しかし、ともかくも敵は反攻を續けてゐるのであります。

けれども、それは戦争の一面面だけの話であります。總力戦である現代の戦争では、軍事上の戦争と併行して、政治外交戦、經濟戦、思想戦が絶えず行はれてゐるのであります。それらの面を見ると、決して敵が攻勢をとつて我が防禦に専心してゐたわけではない、むしろ逆に我が方こそ熾烈な攻撃を着々と展開してきたのであります。特に政治外交的には、昭和十八年は我が國の一大攻勢の年であつた。戦争第一年に嵐の如き突撃を敢行して戦史に比類のない戦果を挙げた帝國は、戦争第二年にはかねてからの雄大な構想に基いて一大政治攻勢を展開し、極めて顯著な成果

を収めたここにこそ昭和十八年の最大の特徴を認めることができます。

元來、我國の戦争目的から云へば、米英の軍事力を大東亞から驅逐することは、單に前提條件に過ぎません。日本はアジアの諸民族を解放し、自由にして統一したアジアを再建することを最高の目的としてゐるのであります。けれども、米英の武力を驅逐しただけでは、この目的は達せられない。戦前のアジアは大部分が米英に隸屬し、アジアとしての統一は少しもなかつた。經濟的に見ると、アジアは殆んど米英の經濟に從屬しその一翼に組入れられて搾取せられアジアとしての有機的な關係を持たなかつた。文化的に見ても、アジアは最古の文明を生み、輝かしい文化の遺産を擁してゐるにも拘らず、米英文化の侵蝕を受けて、アジアとしての獨自性を失つてしまつてゐた。かやうな状態が徹底的に一掃されるのではなくては、アジアの解放と言つても無意味であります。従つて米英の軍事力をアジアから驅逐した我國は、次には米英との關係が切れたために、ばらばらに分裂してゐる諸民族を糾合して本然の相に於けるアジアの統一を建設し、更に米英侵略經濟から解放されたアジア諸地域の經濟を有機的な一體として再編成し、進んで一層根本的に、アジアに残存する米英文化の汚濁を掃除してアジア文化の獨自性を回復するといふ重大な任務を果さねばならぬのであります。我が國の先覺者はアジアは一なりと喝破して居りますが實際は一でなかつた、米英の侵略と搾取のためにアジアはばらばらに分裂してゐた。それを統一して文字通りアジアは一なりを實現しなければならぬ。それこそ日本の最高の任務であります。昭和十八年は正しく我國がこの任務の遂行に着手し、幾多の輝かしい政治的、外交的成果を収めた年なのであります。

アジアが一體になるためには、アジアの各民族が失つた獨立と自由とを回復する必要があること、申すまでもありま

せん。獨立と自由とを持たぬ民族はただ服従することが出来るだけで、進んで他の民族と提携聯合することはできない。敵米英も世界を一つにしようと思つて居つて、米國共和黨の大統領候補者であつたウイルキンの如きは世界は一なりといふ本を書いてゐる位であるが、彼等が一つにしようといふ世界は米英に征服される世界であり、いはゆる米英の世界征覇である。日本のアジアは一つは、これとは全く違ふのであります。一つなるアジアは征服と服従との關係ではない。反對にアジア各民族が互にその獨立を尊重し、相互の立場をよく諒解し、相寄り相助けて共榮の樂土を築かうといふのであります。それには各民族がそれぞれ強い獨立國として生長してくれなければならぬ。米英は他國が弱くなり、獨立を失ひ、遂に植民地に轉落することをいつでもその政策の目的としてゐるのであります。日本は全くその反對で、アジアの各民族が獨立と自由とを回復し強い國となつて復活してくれることを衷心より祈願してゐるのであります。さうなつてくれこそ、アジアの各民族は日本の頼むに足る盟友となることができるのであります。それゆゑ、我國のアジア政策はアジアの各民族を助けてその自主平等を回復させることを大眼目としてゐるのであります。昭和十八年は我がかやうなアジア政策を大膽奔放に遂行した年であり、この點で我政治外交史上劃期的な一年であつたと云はねばなりません。

先づ本年初頭には對支新政策が樹立せられた。この新政策に基づき我が國は支那に租界を返還した。自らさうしただけではなく、盟邦及中立國に勸告して支那に租界を返還させた。我が國はまた治外法權を撤廢した。自らさうしただけでなく、また盟邦や中立國も進んで、我が國にならふに至つた。そもそも不平等條約を廢棄し中國の自主平等を恢復することは、故孫文先生の終生の念願であり、中國國民黨の最高の目的であります。我國は孫文の正統なる後継者

汪精衛氏を助けてこの念願、この目的を實現せしめたのであります。實際中國の國際地位は僅か一年の間に飛躍的に高まつたのであります。中國の國民が我が國の新政策に共鳴感激して斷乎として米英に宣戰し我國と共生同死を誓ふに至つたのは、誠に當然と云ふべきであります。

八月にはビルマが獨立し、同時にビルマもまた米英に宣戰しました。ビルマの人民が獨立を恢復するために過去幾十年に互り惡戰苦闘を續けて來たことは周知の如くであります。ビルマは英國の壓制を斷ち切ることが出来なかつた。然るに一度日本が驟起するや、たちまち英國勢力は驅逐せられ、近々二十ヶ月でビルマは宿望の獨立を獲得したのであります。初め皇軍がビルマに進軍するや、敵は日本はビルマを征服する積りなのだと思はれ、盛んに宣傳しました。ビルマ人の中にもこの宣傳に惑はされたものがなかつたといへない。然るに我國の爲すところは敵の意表に出て、戰雲尚ほ色濃く、國境線では砲聲殷々たるさなかで、日本は堂々ビルマに獨立を許與したのであります。敵陣營にあつてさへ、帝國の戰爭外交の見事に嘆稱するものを生じてゐるのも怪しむに足りません。

更に十月にはフィリピンが獨立して新共和國となりました。よもやと思つて居た米國は今更乍ら驚いて其の得意とする空手形を振出し比律賓に夢の様な獨立を許與するなど慌てふためいたことは御承知の通りであります。

その他インドネシアの住民に參政權を與へた措置、タイ國に廣大な領土を編入した事實、スパス・チャンドラ・ポース氏の自由印度假政府を承認し、これにニコバル、アンダマン諸島を與へる用意ある旨を聲明し、その國民軍の編成に強力な支援を與へてゐる事實等、いづれもアジア諸民族を支援し指導して自由と獨立とを恢復せしめるといふ帝國外交の道義性の端的な表現であり、同時に敵米英に對しては雄渾な政治攻勢であつたのであります。そしてこの攻勢は十

し、如何なる國民と雖も現に米國が當面してゐるが如き、より以上の難局に遭遇したことは決してないことであると斷言し、軍事的勝利獲得に必要な果斷と政治的指導力が米國に於て缺けてゐることを嘆じ、當局者の無定見を非難して居るのであります。

畢竟米國政府官民の間に戦争遂行に關する渾然一體の結合が存在しないことは、國民が全幅的に支持する具體的にして且明確なる戦争目的が國民に示されてないからであります。ルーズヴェルト大統領の相談役たるヘリー・ホプキンスが最近米國雑誌に發表した論文に依りますと、米國が此の戦争に於て如何に愨の深い野望をたくましくせんとしてゐるかが判然するのであります。即ち今次大戦の後、米國は七つの海を支配する世界最大の海軍と世界最大の商船隊とを保有し、如何なる國家も追従し得ない大空軍を有する、世界で最も富み、最も強大なる國家として残るべく、其の輸出額は戦後の數年間を通して毎年七十億弗臺を持續するであらうとホプキンスは廣言してゐるのであります。これ取りもなほ米國の貪慾極まる戦争目的を端的に告白したものでありませう。經濟的にして同時に政治的なる世界支配を目的とする、物質的富力と政治的權力に對する飽くなき野望の追求は、これによつて愈々明かであります。

此のアメリカ的支配と搾取に對應し、英國の帝國主義的戦争目的も、期せずして、南阿首相スマッツ將軍が十一月下旬ロンドンで行つた演説に於て明かにされて居るのであります。

スマッツは戦後の世界が英米ソ聯を三位一體とする三大國の責任に歸するものとなし、かくして出現するヨーロッパの新しい巨人たるソ聯に對し、均衡を維持するため、英國は西歐諸國をその傘下に抱擁しその指導權を握らねばならないことを示唆し、ソ聯を牽制すると同時に、ヨーロッパ大陸に於ける英國の地歩を確保し、海外諸領土と共に英帝

國の存在を保たんとする意圖を物語つて居ります。之に依つても、米英が、銘々、各自の世界的帝國の建設と保持を今次大戦の眞の目的としてゐることを看取し得るのであります。米英が抽象的美辭を並べ、偽善的な理想的宣言を以て世界を欺き、自國民にさへも、眞の戦争目的を秘して陰に世界的支配の野望達成に汲々たるものあるを知るべきであります。是實に我國が道義を持つて起ち、世界の恒久平和と人類福祉の増進に寄與せんがため、正義人道の敵米英の撃滅を期し、彼等の非望を撃碎し去るまで、斷じて戈を收めざるを決意してゐる所以であります。之を要しまするに、我國は戦争第一年には一大軍事攻勢によつて廣大な土地、無盡蔵の資源を確保し、かくして必勝不敗の態勢を確保した。戦争第二年には日本は一大政治攻勢を展開し、政治的經濟的文化的に必勝不敗の基礎を確立した。昭和十八年の歴史的意義は何よりもこの點にあると私は考へるのであります。而して戦争第三年即ち昭和十九年には、我國はこの二つの必勝不敗を根據として全面的攻勢に轉じ、軍事的に敵の反攻を徹底に打碎くとともに、政治經濟思想の全分野に於て、アジア諸民族の一體化をいよいよ推し進め、その提携協力を一層密接にし、かくて世界制覇を窺ふ米英の勢力をアジアから驅逐拂拭しなければならぬ。そのことを來るべき一年に於ける我々の光榮ある任務なのであります。

病院船ブエノスアイレス丸不法撃沈に對する帝國政府の
米國政府宛抗議に關する外務當局談

病院船ブエノスアイレス丸不法撃沈に關し帝國政府は今般西班牙政府を通し米國政府に對し左の如き強硬なる抗議を提出せり。

一、帝國病院船ブエノスアイレス丸は、十一月二十七日午前八時十分南緯二度四十分、東經百四十九度二十分の海上を航行中の處來襲せる米コンソリデーテットB、二四型一機の投下せる爆彈を左舷に受け約四十分にして沈没せり。右飛行機は太陽を背にして高度一千米内外にて同船尾方向より飛來し該爆彈一個を投下したる後、前方の雲間に入り、遭難と同時に救命艇、小發動艇等約十八隻水上に下され傷病兵其の他乗船者の殆ど全員は同船沈没前に救命艇又は筏に收容せられたるも、第四番船艙にありし擔送傷病兵其の他約三十名は爆彈破裂の衝動に依り落下せる艙口の梁材に依り壓死又は受傷し同船と共に沈没せるもの如し。

通信機破壊の結果連絡の方法も無く十一月二十七日より十二月二日迄漂流中、數回米哨戒機に發見せられ、其の都度赤布片にて赤十字を中央部に表示し、右哨戒機も超低空にて之を認識し得たるもの如くなりし處、十二月一日の哨戒機は百米内外の超低空にて漂流中の傷病兵滿載舟艇に機銃掃射を加へ戦死二名、負傷一名を出したり。

十二月二日の午後に至り漂流中の一部舟艇は隔々附近航行中の帝國船舶に發見せられ、次で其の報告に基き同日及翌三日に互り帝國飛行機並に舟艇等に依る殘餘漂流者の收容行はれたるも、終に交代歸還上の看護婦を含む一七四名の死亡者又は行方不明者を出せり。

二、ブエノスアイレス丸は、一九〇七年海牙に於て締結せられたるジュネヴア條約の原則を海戦に應用する條約第一條の規定に従ひ利益代表西班牙國政府を通し客年十二月七日米國政府に對し其の船名を通告せられ、且同條約第五

條所定の標識の外帝國軍當局に於て研究、試験の結果考案せられたる特に認識容易なる對空並に夜間用赤十字標識を有し居り、之亦米國政府通告濟なり。然も當時は天氣晴朗にして太陽を背にし高度一千米内外より右標識の認識は絶對且完全に可能なりしものなり。

上述の如き狀況に於て米機に依りて行はれたる本件爆撃は前記海牙條約並に國際法の根本原則に對する明瞭なる違反なるのみならず、亦人道に背悖する殘虐の行爲と言はざる可からず。況んや無辜の看護婦を悲惨なる死に至らしめ、又赤十字の標識を掲げて漂流中の傷病者に對し機銃掃射を行ひ之を殺戮するが如きは野蠻且卑劣なる殺害行爲とも稱し得べし。

三、帝國政府は右の事實に付米國政府に對しても最も嚴重に抗議し且其の反省を促し、同政府が速に誠意ある調査に基く回答を行ひ責任者を處罰し、將來再び斯る事件の惹起せらるることなき保障を與ふることを要求すると共に、右不法行爲の矯正に關し一切の權利を留保するものなり。

帝國政府は曩にアラビア丸以下六隻の帝國病院船に對する不法攻撃に付其の利益代表西班牙國政府を通し六月二十八日米國政府に對し強硬抗議する所ありたるも、今日に至る迄何等の回答に接し居らず、加之帝國病院船に對する不法攻撃は其の後も跡を絶たず。最近更に高砂丸以下四隻の不法攻撃に付利益代表國を通し米國政府に申入るる所ありたり。然るにも拘らず今又ブエノスアイレス丸の撃沈を見たる點に付帝國政府としては重大なる關心を有するものにして、米國政府の深甚なる注意を喚起するものなり。

ジエネヴァ條約の原則を海戦に應用する條約

第一條

軍用病院船即ち傷者、病者及難船者ヲ救護スル唯一ノ目的ヲ以テ國家ニ於テ製造シ又ハ設備スル船舶ニシテ開戦ノ際又ハ戰爭中其ノ使用ニ先チ船名ヲ交戦國ニ通告シタルモノハ戰爭ノ繼續中ニテ之ヲ尊重スベク且捕獲スルコトヲ得ザルモノトス

第五條

軍用病院船ハ其ノ外部ヲ白色ニ塗り幅約一メートル半ノ綠色ノ横筋ヲ施シテ之ヲ標識スベシ
前記ノ諸船舶ニ附屬スル端舟及救護用ニ供セラルベキ小船ハ前項ニ準ジテ塗色ヲ以テ之ヲ標識スベシ
病院船ハ總テ其ノ國旗ト共ニジエネヴァ條約ニ定メタル白地ニ赤十字ノ旗ヲ掲ゲ又中立國ニ屬スルモノナルトキハ右ノ指揮ヲ受クル交戦國ノ國旗ヲ大橋ニ掲ゲテ之ヲ標識スベシ
前記ノ病院船及端舟ニシテ其ノ享有スル尊重ヲ夜間確實ナラシメムト欲スルモノハ其ノ附隨スル交戦者ノ同意ヲ得テ其ノ標色塗色ヲ看易クスル爲必要ナル措置ヲ執ルベシ

戰爭の原因を歪曲せる米國の白書

— 於大政翼賛會講堂 —

特命全權大使 來 栖 三 郎

昭和十八年十二月三日

大東亞戰爭は將に數日にして開戦二周年を迎へむとし、世界全國の戦局は、東亞に於ても歐洲に於ても頗る苛烈を極めて居りますが、之と共に思想戰、宣傳戰の方面も益々激しくなつて居りますことは御承知の通りであります。この思想戰の關係に於きまして從來屢々指摘せられたる如く、米英の戰爭目的が甚だ不明瞭であつて、自國內に於てすら常に問題となるのみならず、戰爭が次第に長期戰の様相を示して参りますに従ひ、米國內各層に潜在する不滿も段段強くなり、一體米國は何のために戰爭をして居るのかを疑問とする者が次第に多くなる傾向も見えますので、米國政府は、この戰爭が日本から仕掛けられたものであつて、従つて避くべからざるものであつたといふことを頻りに内に宣傳して居るのでありますが、その最も代表的なるものは、本年一月、國務省の出版しました「平和と戰爭」と題する刊行物、及本年十月、之亦國務省の發表しました開戦前約二箇月に互る日米交渉に關する公文を集めた一冊子であります。私は先頃この「平和と戰爭」の全文を入手して之を通讀し、最近又之が姉妹篇たる前述の公文集の抜萃を讀む機會を得ましたので、茲に之等米國政府公の出版物、即ち普通に白書と呼ばれる刊行物に關する米國側の欺瞞を指摘し、惡辣なる敵の思想戰振りの一端を御話申上げて皆様の御参考と御警戒に資したいと存じます。

之等刊行物中には戰爭の遠因、近因及直接原因の三點に涉つて多くの欺瞞が指摘し得らるのであります。即ち第一に、「平和と戰爭」と申す書物は、初から一九三〇年(昭和五年)より四一年(昭和十六年)に至る米國の外交政策と銘



打つてありまして、従つて一九三〇年(昭和五年)以後の甚だ不幸なる事態を招來する根本原因を齎した前世界大戦後十年間の非常に重要な諸経緯の説明を始から述べて居り、第二に、今次の歐洲戦及大東亞戦争を馴致する上に至大の責任がある戦争前數年間に互る米國政府の戦争挑發政策には始ど何等觸れて居らず、第三に、日米交渉の経緯、殊にその最後の段階に關する記述に大なる歪曲と陰蔽があるのでありまして、以下主としてこの點に付いて順を逐つて申述べて見たいと存じます。

先づ第一の點即ち戦争の遠因に付き申述べますと、前世界大戦後の十年間は、最近の國際關係の歴史に於て最も重要な期間でありまして、この期間に於てヴェルサイユ體制が出来上り、東亞に關してもワシントン會議體制が成立し、この兩體制共その後の國際關係の展開に極めて大なる影響を及したのでありまして、換言すれば一九三〇年以後の不幸なる世界情勢は實にその當然の歸結に外ならないのであるに拘らず米國は此根本問題について觸れる事を避けて居るのであります。

米國の白書に依りますと、ハル國務長官は、一九三五年(昭和十年)五月五日、ワシントンに於て演説して歐洲に於てデモクラシーの代りに獨裁政治が突如として飛び出したと述べて居りますが、一體一國の、國體、政體が重大なる原因と長い發展過程を経過することなしに突如として飛び出すと云ふことは到底あり得べからざることあります。

從來米、英はデモクラシーにあらざれば國にあらざると云ふ様な事を申しますが、世界の各國が、それぞれその歴史、傳統を異にし且つ政治、經濟、軍事の各關係に互つてその國內事情及國際環境を同じうせざるに拘らず、皆同一の政治組織を持たねばならぬのか、又獨伊のやうな地位に在る國が米英と同一に所謂デモクラシー組織を採用して、

その内外國政の運用に果して遺憾なきを得るや否やといふ根本問題の審議は暫く措くと致しましたが、一體ドイツが今日の如き政治組織を採り、今日の如き對外政策を採らざるを得ざるに至つた重大原因の一つは、ヴェルサイユ體制と之が誤れる運用であると見なければならぬのであります。

抑々前大戦に於て、愈々米國の參戦を見ますや、英國は有名なるウイ爾ソンの十四箇條を以て彼等自身の戦争目的であるかの如く宣傳し、遂には之に依つてドイツ國民の戦意を挫いたのであります。一度休戦となりますや、英佛は俄然その態度を一變し、チャーチルの如きは、我々が米國に要求する所はただ一つである即ち借金棒引にして貰ふことである。ウイ爾ソンの提案には必ずしも協力を惜しまぬが、樞要なる問題に付ては飽くまで冷静に我々の利益を固守せねばならぬ云々といふ、まるで手の裏を返したやうな豹變振りを示し、その結果出来上つた講和條約もウイ爾ソンの理想とは頗る懸け離れたものになつたのであります。見様に依つては、單りドイツのみならず、米國自身も英佛に欺かれたことになるのであります。前米國大統領フーヴァーの如きは、大東亞戦直前に出版されました米國の第一次十字軍といふ著書に於て、この経緯を指摘して米國民を戒めて居るのであります。斯くの如き事情の下に出来上つたヴェルサイユ體制であり、又事實上之が運用の全權を握つて居つた英佛に於ては、要するにドイツを永久に抑へ付けて置かうといふ考へ方が支配的であつたのでありますから、ウイ爾ソンの十四箇條を以て講和したドイツは、最初から悲惨なる幻滅に直面したのであります。即ち政治上に於ては英米の主張するデモクラシーを十二分以上に採り入れたワイマール憲法も、ストレーゼマンその他の協調外交も、遂に英佛等の支援、協力を得るに至らず、又經濟上に於ても、英國の委員ケーンズが最初からその無理を指摘して居つた講和條約中の經濟條項、賠償に關

する條項のために、稼いでも稼いでも追つ付かぬといふ甚だしい經濟上の苦闘を嘗めさせられ、一時僅かにドーズ・ヤング案といふやうな一寸逃れの案と米國からの短期の借金に依つて辛じて局面を糊塗して行つたのでありますが、一度歐洲に恐慌の徴が見えまするや、米國は何の遠慮會釋もなく忽ちその資金を引揚げましたので、ドイツはために悲境のドン底に陥し込まれ、失業者は七、八百萬人に達し、政治的にも殆ど斷末魔とも言ふべき窮境に陥つたのでありまして、之を救ふがために起ち、今日のドイツを再建した者が即ちヒットラー總統とその一黨の人々でありますから、米英は徒に全體主義を批判し攻撃する前に、先づ事茲に至らしめた彼等自身の責任を考へて見なければならぬのであります。

次にワシントン會議の問題に付いて述べて見ますと、抑々同會議關係諸條約の表面の目的は、列國間の協調に依つて東亞の安定を圖らむとするものでありまして、從來屢々申上げた通り、我が國は約十年の久しきに亙つて忠實に之を遵奉し來つたのでありますが、當時支那側は之を以て我が國が米英の壓迫に屈したる證左なりと解釋し、米英の支援を恃みとして事毎に抗排日を事とし、米英も亦陰に陽に之を支援して以て我が國の支那大陸に於ける當然の發展を抑へむとしたのでありまして、その結果、遂に滿洲事變、日支事變が起り、延いて大東亞戰爭の勃發を馴致するに至つたものであります。一體斯くの如き事態の起りは、米國が既に第一次世界戰爭中から次第に日本壓迫の態度を示し、パリ講和會議の際、山東問題に付いて遮二無二支那を支援し、遂に支那をして山東問題のために講和條約調印を拒ましむるに至つたことに發して居るのでありまして、その後華府會議に於ても支那側は、頻りに山東問題に對する不當なる主張を繰返し、之がため委員會を開催すること實に三十六回に及び、終りには米國大統領自ら支那代表に對

し、餘り強情を張ると山東省全體を失ふことになるぞと忠告して、辛じて終結を告げたやうなこととなつたのであります。爾來支那は、何事に付いても米英の支持、支援を自當として、我が國に抗爭する態度に出で來り、米英亦之を獎勵し、利用したのでありまして、これがため華府諸條約は徒に支那の抗日運動を激成する具と化し、東亞の安定を確保すべき筈のワシントン體制が、却て東亞の禍亂を誘發することとなつたのであります。

更に又一九二〇年以後十年間に於ける日米間の問題中、兩國關係に重大なる影響を及したものは、一九二四年の米國移民法の制定でありまして、この立法は、當時の國務長官ヒューズが下院の移民及歸化問題委員長ジョンソンに宛てた書翰中に述べた通り、我々に侮辱の極印を押したものととして我々の到底忘れることの出来ないものであります。この外、前大戰末期に於けるシベリア出兵問題を繞る日米の葛藤、對支借款問題を中心とする兩國の紛争は、山東問題、華府會議と共に、この當時米國が日本に對して與へたる四つの顯著なる壓迫國策の現れであることは、公平なる外交史家、即ちユール大學教授グリスウォールドがその著「米國の極東政策」の中に指摘して居る通りでありまして、之等一聯の不幸なる案件が、その後の日米關係を著しく禍したことは否むべからざる事實でありますから、この経緯から切り離していきなり一九三〇年以後、即ち大體滿洲事變以後の日米關係を論述するが如きは無意義にして且つ失言と言はねばなりません。

第二に今次大戰の近因とも言ふべき歐洲戰爭開始及大東亞戰勃發に至る數年間の米國の政策の記述に於ても、米國の白書中に種々指摘すべき歪曲がありますが、その最も主なるものは、歐洲戰爭勃發前に於て米國政府が英佛等に對し開戦を煽動した態度及滿洲事變以來頻りに行はれた國際聯盟その他に依る對日壓迫運動に於て米國が終始一貫主動

的態度を執つたことに付き正しい記述がなく、又日獨伊同盟に對し最初から根據なき曲解と執拗なる先入主とに因はれ、之がために日米交渉の妥結を不可能ならしめた経緯の記録が頗る獨斷的であつて且つ公平を缺いて居ることあります。

先づ歐洲の問題に付いて見ますと、今次の歐洲大戦勃發に先立ち、ドイツが英國との衝突を避け、何等かの妥協點を見出すために有らゆる手段を盡したことは周知の事實でありますが、又英國の側に於ても之に呼應せむとする一派があり、現ドイツ外相リッペンントロップ氏は、この間の情勢に鑑み自ら駐英大使として赴任したものと見られて居るのであります。然るに米國は既にその當時から英獨の和協に反對し、その間、英國の政情の變化もありましてリ外相は遂にその使命を達成することを得なかつたのであります。その後歐洲の形勢が更に一層緊迫化するに及んで、當時の英國首相チェンバレンは深く英國の現状及將來を考へた末、英獨妥協の決意を固め、ヒットラー總統と會見し、一九三八年(昭和十三年)九月二十九日に有名なミュンヘン協定を作り、之を以て自分等一代の平和と唱へ揚々として歸國し、英國の大衆は勿論、戦雲の重壓の下に懊惱して居つた歐洲一般の民衆の大多數は歡呼の聲を揚げて同首相の政策を迎へたのであります。その當時又々強く之に反對したものは米國であり、且つ米國支援の下にチェンバレンの策の打倒を企てたるチャーチル、イーデンの一派であつたのであります。又米國のハル長官が、ミュンヘン協定成立の翌日、此協定について所謂奧齒に物の挟つたやうな聲明を發したことは米國の白書にも書いてあるのであります。兎に角、當時歐洲に在動して居りました私の眼に映じた所に依りますと、米國は頻りに歐洲の問題に介入し、否、寧ろ主動的立場を執り、極力英獨の妥協を妨害して、一步々々兩國を戰爭必至の情勢に追込みつたのであります。

て、當時私の同僚であつた一米國大使の如きは、私と同一の觀測をなし、頻りに歐洲の前途を憂慮して居つたのであります。その時分、歐洲各方面に傳へられた所に依りますと、米國の駐英大使ケネディーも略々同一の意見であつたといふことあります。このケネディー大使は、歐洲戰爭開始後、即ち一九四〇年(昭和十五年)十月頃、米國に歸り、十一月十日、ボストン・クロウズといふ新聞の記者と會見し、英國の民主主義は既に滅亡し、勞働黨出身者が牛耳を執つて居るので、英國の現政府はナチスと異なる所なく、米國にして參戰することあらむか、米國の民主主義も同様の運命に達着すべく、自分は參戰に對しては生命を賭して闘ふだらうといふ趣旨のことを述べ、非常なセンセーションを起したのであります。之に依つて見ましてもミュンヘン協定前後に於て同大使の有して居つたものは大體分るのであります。その後同大使はルーズヴェルト大統領の慰留をも却けて遂に辭任してしまひました。

斯くの如く、米國の外交官中にすら、當時の米國政府の政策に反對する者があつたのであります。その後ドイツがワルソーを占領した際押収した戰爭物發に關係あるポーランド側の公文書を一括公表したものに依りますと、ポーランド、フランス等に居つた當時の米國の外交官その他は、頻りに任國に對して對獨強硬政策を執ることを勸告すると共に、開戦の場合には米國も必ず參戰するもの如く思ひ込ませたものと見え、現に米國の白書自體に依りましても、フランスが將に倒れむとするに當つて、時の佛國首相レイノーは、一九四〇年(昭和十五年)六月十日、十四日兩回に互つて米國大統領に直接電信を送り、米國が直ちに參戰してフランスを救援せむことを哀訴して居りますが、殊に十四日のメッセージに於ては、米國にして數時間内に參戰を決定せざれば、貴下はフランスが溺るる者如く沈み行き救助を期待せる自由の國米國に向つて最後の一瞥を投げ掛けたる後水底に没し去るを見らるるに至るべ

しといふ、實に近世外交史上の一大悲劇と見るべき悲痛なる最後の絶叫を掲げて居るのであります、之に依つて見ましても開戦直前迄駐佛大使等が如何にフランス爲政者を誤つたかといふことが明瞭に分るのであります。

次に東亞の問題に付きましても、米國は滿洲事變以來、常に主動者となつて對日壓迫を主張し、自國の参加し居らざる國際聯盟に對しあらゆる策謀、威壓を加へて、聯盟規約中のサンクション即ち經濟斷交條款の發動を盡さしめむとし、當時英國が濫りに米國の笛に踊らざるに對し著しく不滿の意を表したことは、當時の米國國務長官スチュムソン自身の投書によつても明らかであります。

その後日支事變の勃發致しまするや、米國は又しても日本壓迫の主動的立場を執り、國際聯盟及各國に働きかけたのであります、一九三七年(昭和十二年)ブラッセルに開かれた九ヶ國會議の如きも、主として米國の發議、要請に因つたものであることは、當時ブラッセルの大使として在勤して居りました私に對し、同僚たる英國大使より説明があつた所に依つても明かなのであります。

更にその後にも日支事變に對する米國の態度は、飽迄我が方を壓迫せんとする運動の先頭に立つて居つたのであります、昭和十四年(一九三九年)の夏、英國が國際的見地から日支事變の現實を正視し、多少なりとも支那を中心とする日英關係を調整せんとし、遂に同年七月二十四日、時の外務大臣有田八郎氏とクレイギー英國大使との間に天津租界問題に關する妥協の成立を見るに至りまするや、米國は、その二日後に於て日米通商條約の廢棄を通告して參つたのであります。之には無論前からの行掛りはありますが、この廢棄通告は、一面日英妥協に關する米國の不滿の意を表示し英國を制肘せんとする意志が多分に含まれて居つたと見ることが出来るのであります。

更に翌年六月に至りましてビルマ通路閉鎖の問題が起り、我が國と英國との間に協議が進められまするや、米國は、華府に於て英國大使及濠洲公使を招致して會議を開き、之を牽制せんと試むる一方、七月二日、輸出統制法を制定し七月十七日愈々日英間に妥協成立するや、ただちにこの輸出統制法に基いて航空用、ガソリン及工作機械の大部分の對日輸出を禁止し、再び日本を壓迫し且つ英國を掣肘せんとしたのであります。當時の實情に於ては、日支問題は則ち日英問題であり、且日米問題であつたのでありますから、斯くの如く日英を掣肘した米國は、日支問題の解決を困難ならしめ、遂に之を大東亞戰爭にまで發展せしめた大きな責任者であると云はねばならぬのであります。

次に米國は白書中に於て、日獨伊三國條約の目的を曲解して、頻りに之を攻撃するのみならず、既に一九三四、五年(昭和九、十年)の頃より日獨間に東西呼應して世界侵略を行はむとする秘密協定が存在したと信じて居つたと述べ、又一九四〇年(昭和十五年)九月十一日、フランス大使との會談に於てハル長官は米國政府は、過去數年以來ヒットラーは歐洲に對する殘忍にして全然破壊的なる征服者たるべく、日本はハワイよりタイ國に至る太平洋に於て同様の道に向はむと決心せるものなりと推定を下し、それ以來米國政府の總ての言明及行動をこの推定の基礎の上に置き來つたものと説明して居りますが、實に非禮にして亂暴極まる獨斷と言はざるを得ないのであります。而して事實過般の日米交渉に於きましても、米國側は常に我が方に向つて三國條約の破棄又は事實上の脫退を迫り之を以て日米妥結の前提なりと強要したのであります。

然るに一方白書の記録する所に依りますと、米國は一九四〇年(昭和十五年)四月二十九日以来、當時既にドイツと同盟條約を有して居つたイタリーのムッソリーニ首相に對しルーズヴェルト自ら前後四回に互つてメッセージを送つて

只管イタリーの参戦を防止せんと試み、或は米伊共同して歐洲平和再建を圖らうとか、或はイタリーの希望は何でも聞いて、米國は英佛兩國に對し之が達成を斡旋し且つその實現を保障しようとか、或は又講和會議の場合にはイタリーの参戦を歓迎し、交戦國と同一の地位を與へようとか、八方有利な條件を連ねてイタリーを誘つたと書いてありますが、其際には米國はイタリーとドイツとの同盟條約に關しては別に廢棄しろとも何とも言つて居らぬのであります。米國のこのイタリーに對する態度と、三國條約成立前及過般の日米交渉中に於ける我が國に對する態度とを比較して見ますと、その間に格段の相違と大きな矛盾とが存するのであります。之は畢竟米國が我が國の地位、實力を見詰つたことと、その後の歐洲戦局に鑑み米國自身尙に参戦の決意を固め、その場合の用意として豫め三國條約を骨抜きにして太平洋方面に於ける後顧の憂を除いて置かうといふ思惑に出たものと見る外はないのであります。若しこの米國の思惑が成功した場合には、米國は参戦して先づドイツを屈伏せしめ、その後には前大戦に於けると同一の筆法を以て、英國と共同して我が國を抑へ付けようと考えて居つたものと見られるのであります。

第三に、大東亞戦争の直接原因を成した日米交渉の經過に關する白書の記述に歸しても幾多指摘すべき點がありますが、今日は昨年十一月十七日、私自身が直接に交渉に参加しました以後の事、即ち私自身経験した部分のことに付してのみ述べて見たいと存じます。

そこで先づ第一に氣が付きましたことは、私が参加した第一回の大統領との會見に於て、ルーズヴェルト大統領自ら、日支の間に紹介者たらむことを申出で、その後この重大なる提議が有耶無耶の間に葬り去られた消息に關して何等記されてゐないこととあります。この會見に於て私は新たに交渉に参加した者として先づ第一に發言し、米國の白

書にもありません通り、日米妥結の必要を力説すると共に、私が渡米の途上、瞥見した所のみによつて見ても、太平洋上の事態は全く一觸即發といふべきであると申したのに對し、大統領は言下にホワット・ホワー、即ち全く何のためだといつて直ちに同感の意を表し、次いで私から日米間の難關が主として日支關係に在ること、及びこの問題の解決を困難ならしめつつある重大原因は、米國が本來、事の性質上日支間の交渉に委かすべき日支和平條件の内容にまで入つて論議し、而も米國の主張が頗る現實の情勢に副はざることに存する旨を指摘したのに對し、ルーズヴェルト大統領は、自分は斯くの如き用意が外交上使用せらるるや否やは承知しないがと前提して、米國が日支間の紹介者となつたらどうか、即ち紹介者は紹介するのみで、交渉の内容、條件に立入る要はなからうとまで述べたのであります。この時列席のハル長官は、日本政府の不信を云々致しましたので、私から前大戦後に於ける米國政府の對日態度の豹變振りを指摘し、日本側の一部にも之を根據とする對米不信が存することを述べ、斯くの如き重大時機に當つて、双方相手方の不信を云々するに於ては、交渉は遂に成立の見込なきに至るべしと應酬したのであります。

その後米國側は言を左右に託して大統領のこの重大なる提議をもみ消すことに努めたのであります。苟くも一國の元首が外國の使臣に對し、公式の會談に於て提議したことを反古にして恬然たることに依つて見ましても、日米交渉に對する米國政府の誠意の缺如は十分之を窺ふことが出来るのであります。

次に私の指摘したことは、米國の白書が我が方の十一月二十日の提案を頗る軽く取扱ひ、米國側が提出し來つたあの重大なる十一月二十六日のノートも事も無げに、且つ正當なるものであるかの如くに取扱ふと共に、彼我ノートの交換の間に経過した息詰るが如き一週間、即ち日米和戦決定の分岐點となつた一週間に付いて故意に記述の省略を

行つて居ることあります。即ち先づ我が方の十一月二十日附提案に對しては、彼等は根本問題を解決することなく交渉の初期に於て論議せられ來れる公正にして廣汎なる解決の眞剣なる考慮を避けむと試みたること明白となれりと甚しき詭辯を弄して我が方のこの重要な提案を簡單に片付けて居るのでありますが、實際に於ては當時米國は、所謂根本問題に關して獨善的にして且現實に副はざる原則論を繰返すのみで、全く果てしなく、その間危局は刻々迫り來る實情であつたのに鑑み、我が方は先づこの緊迫せる局面を打開し、空気を緩和轉換したる後更に時機を待つて根本問題の解決を圖らむとする構想を以て十一月二十日案を提出したのであります。即ち我が方は當時問題の中心となつて居つた佛印南部の駐兵を北部に移駐し、之に對し米英側石油賣止、資産凍結その他の經濟壓迫を撤廢することを案の骨子としたものであります。之に對しては當時側面より我が方を援助して居つた大統領側近の米國の一人の如きは、我が方の考へ方に對し非常に贊意を表し、石油が一度流れ出せば、殘餘は次第に解決するであらう云々とまで言つて、之を喜んだのであります。その外米國の新聞紙上等にも當時日米間に暫定的合意成立せりといふやうな記事が頻りに現るるに至り、事實又國務省等に於ても頻りに協議が行はれ居つた様子でありました。その間、十一月二十一日には私は先づ單獨で、二十二日には野村大使と共にハル長官を私邸に訪問し種々懇談したのであります。但し此二十一日の會見に於て同長官は米國政府の内部關係に於て長官も有力なる方面の制御の下に在つて萬事の意は任かせざるものがあることを述べた程でありまして、當時米國側が事態の重大性と我が方の提案の重要性を十分認識して居たことは明かでありまして、今日に至つて上述の詭辯を弄するのは實に甚しい欺瞞と言はねばならぬのであります。

更に又白書は、米側の彼の十一月二十六日附のノートを提出した理由の一つとして、之に依つて多分交渉を持續せしめ得べきを考へ云々と、人を愚弄したやうなことを書いてありますが、從來屢々引用されたロバート委員會報告書の外、この米國の白書自體及其の姉妹編たる關係公文集に依りまして、ハル長官はこの不幸なるノートを我が方につき付けた直後、陸海軍長官及英國大使等に對し、交渉が事實上打切りになつたことを通告したと記述してあり、又公文集の方に依りますと、ハル長官は英國大使に對しては、日本が突如として非常に廣汎な地域に互つて奇襲を行ひ、英米等がその對策を協議決定する進も與へず重要な戰略基地を占領する可能性ありとまで言つて居るのであります。前に述べました或は多分交渉を持續せしめ得べきを考へ云々と申すのは實にそらざらしい偽りであるのであります。又白書に依りますと、米側は經濟壓迫が日本の報復を招き、延いて戦争にも至る危険があることを十分承知して居つたと書いてあり、殊に戦争直前、グルー大使は、十一月三日の電信で、經濟壓迫手段によつて東亞に於ける戦争の勃發を防がむとすることの誤りであること、又日本人の國民性に考へ、斯くの如き手段が却て戦争を誘發すべきことを戒め、更に十一月十七日の電信を以て、事態危急と報告して來て居るに拘らず、米國は十一月二十日の我が方の提案を容れて之等の經濟壓迫手段を撤廢するの方途に出ざるのみならず、十一月二十六日の所謂果し狀をつき付けて參りましたことは、全く我が國を絶對絶命の窮地に追込んで開戦の餘地なきに至らしめむとする策謀と見るの外ないのであります。米國政府は、開戦以來國民に對し眞珠灣を記憶せよと常に宣傳して居るのでありますが、之は當然十一月二十六日を記憶せよと訂正すべきものであるのであります。

この外白書に現れて居らぬ米英の共同策謀その他種々指摘したい點は多々ありますし、殊に私の言として書いてある事の中にも、歪曲され誇張され又は故意に省略されて居る點も少くないのでありますが、餘り長くならず且つ細かくならずから、今回はこの程度に止めて置きますが、要するに、米國が斯くの如き欺瞞を敢へてしてまで國民を引摺り、中立國民を引付けて行かねばならぬ所に、その戰爭目的の不純、不明瞭から來る敵米國の憐みがあると言ふことが出来るのであります。

私は昨年十一月二十六日に等しく此大政翼賛會主催の下に開かれた會合に於て述べました講演の末段に於て、大東亞共榮圏の精神に徹し断じて之を口頭禪に終らしめるが如きことなく窮行實踐益々之を現實の上に擴大して参りましたならば我々が最後の勝利を得ることは全く疑ひないのであります。否、寧ろ勝利の鍵は既に我々の手中に在ると言つても過言でないと思つて申しますと申したのであります。この私の念願は其後着々事實となつて現れて参つたのであります。ビルマ、フィリピン、タイ國の地位の強化、日支關係の躍進、印度假政府の設立、マラ、インドネシア、原住民の政治參與等、大東亞の秩序、大東亞民族結集が着々實現せられ、殊に去る十一月五六の兩日には遂に大東亞會議の開催を見るに至り、新たな大東亞建設の不滅の憲章として世界史上に長く燦然たる光輝を放つべき大東亞宣言は採擇せられるに至つたのであります。

之等の事實が如何に敵米英の陣營を震駭せしめたかといふことは、彼等が大東亞會議の真相に關し行らゆる宣傳を弄して自國民の耳目を欺かむとしつとあるといふことに依つても明かでありまして、米英は大東亞資源の開發に依る我が方の戦力の増強を恐ると同時に、この大東亞民族結集が益々鞏固となり、遂に動かすべからざるものになり

つつあることを恐れて日本に時を與ふるなといふ標語の下に、頻りに太平洋の各方面に互つて苛烈なる反攻を加へ來りつつあるのであります。

大東亞戰の直前、米國に於ては頻りに支那を見殺しにするなかれといふ宣傳が行はれ、その後も米國は支那を助くるために大東亞戰を戦ひつつあるかの如く装ひ來つたのであります。支那の宿望が殆ど達せられたる今日に至つては、彼等は遂に假面を脱いで、彼等が全く米英自身利益保護のために重慶をして戦はしめつつあることを明かにせざるを得ぬことになつたのであります。又フィリピンに關しましても、我が國の力に依つて比島の獨立が達成せられむとするのを見て、ルーズヴェルト大統領は、十月六日、慌てて議會に教書を送つて、その獨立時期の繰上を可能ならしむるが如き權限の付與を求めたのであります。その教書の文書を注意して讀んで見ますと、實現可能なり次第完全なる自由、獨立の法律的地位を與へると書いてあり、又この獨立の地位は保護せらるべしと書いてあるのであります。第一に實現可能の時機は米國が下すので、いつのことか分りませぬ、第二に、單に獨立と言はず、獨立の法律的地位と言つてあること、現にカンクテモといふ海軍基地を米國に租借せられてゐる玆馬が法律的には完全なる獨立國とされて居ることと併せ考へて見ますと、米國のその邊の用意も略窺へるのであります。又保護云々といふことに依つても、事實上の獨立制限を如何様にも迷彩することが出来るのであります。最近米國に於て屢々太平洋上の飛行基地、海軍基地の重要性が審議されて居ります事實にも鑑み、米國の欲する比島獨立が何であるかといふことは、之を察するに難くないのであります。

次に印度獨立問題に付きまして、大東亞戰勃發後、彼のクリップスが英國から印度に派遣せられた當時から、米

國の一部には印度獨立促進論が盛行はれて居り、今その一例を挙げますれば、米國の二大労働團體の一たるC.I.Oの如きは、大西洋憲章の印度適用を主張して居るのでありますが、米國政府は、之等の正當なる主張を抑へ、曾ては自ら英國から獨立を奪ひ去つた歴史があるにも拘らず、米國民をして印度、ビルマの獨立妨害、覆滅のために戦はしめつつあるであります。

以上指摘し來つた如く、彼等の戦争目的は不純にして矛盾に充ちて居るのでありますが、國民を引摺つて行く米國政府の力は依然として頗る強く、その生産力は老大にして、飽くまで各種兵器の量を持つて我が國を壓迫し去らむとして居るのであります。現在の米國政府を動かす得るものは、正義でも人道でもなく、一に力なのでありますから、我々銃後の國民も、開戦以來の皇軍將士の善謀勇戦及最近に於て又々皇軍の擧げつつある目覚ましき戦果に應へ、この際最も必要な飛行機その他生産力増強及一般の戦力向上を目標とし各自その職場に於て彌が上にも一億敢闘の精神を發揮せねばならぬのであります。

第八十四回帝國議會に於ける東條陸軍大臣戦況報告

昭和十八年十二月二十七日

前回本議場に於て報告致しました以後に於きまする陸軍の戦況は、之を大觀致しますると、敵の反攻は愈々本格化し、各所に深刻苛烈なる戦鬪が惹起されて居るのであります。局地の戦鬪に於きましては多少の波瀾がございます

が、海軍と緊密なる協同の下に、既得の我が全般の戦略態勢は儼として之を確保し、我が第一線將兵は愈々潑刺たる英氣を以ちまして隨所に敵の反攻を邀へ、其の人的、物的戦力の撃砕を圖り、一意戦争目的完遂に邁進しつつあるのであります。以下其の戦況に付て報告致したいと存じます。

第一に西南太平洋方面に就て申上げます。本正面に於きましては、十月以降敵の本格的反攻を邀へ、我が陸海軍部隊は隨所に之に痛撃を與へて居るのでありますが、陸軍と致しましては目下ソロモン群島、ビスマルク諸島、東部ニューギニアの此の三方面に激戦を交へて居るのであります。即ちソロモン群島方面に於きましては、敵は先づ一部隊を十月二十七日、モノ島に上陸せしめ、次いで十一月一日有力なる部隊を以て、艦艇及び航空の掩護の下に、ブーゲンビル島西岸タロキナ附近に上陸を開始したのであります。該方面陸軍部隊はジャングル濕地の連互する峽々たる山岳地帯を踏破して之を攻撃すると共に、海軍の積極果敢なる協力の下艦艇に依り、一部隊をして敵の背後に上陸攻撃せしめ、局所に於きましては敵に殲滅的打撃を與へたのであります。敵は逐次兵力を増加し、目下戦鬪進行中でありまして、ビスマルク諸島、ニューブリテン島に於きましては十二月十五日敵は艦船約二十隻及び舟艇類多數を以てマーカス岬東方地區に上陸して参りましたが、所在の我が地上部隊は直ちに之に反撃を加へますと共に、陸軍航空部隊亦海軍航空部隊に協力して之を攻撃し、目下激戦展開中でありまして、現在までに判明せる是等正面の戦果は、陸軍部隊に依り撃沈破致しましたる敵の艦船六隻、舟艇百隻以上、撃墜致しましたる敵機少くも二十機であります。又ラバウル方面に對しましては、十月下旬以降、敵は戦爆連合の航空部隊を以て攻撃致して参りましたのであります。又、同方面の陸軍部隊は海軍と協同し、防空戦鬪に任じて居るのであります。十月下旬以降陸軍部隊に依る敵機の



撃墜数は約百五十機に上つて居ります。

次に東部ニューギニア方面に於きましては、前回既に報告致しました通り、九月下旬フィンッシュハーフェン附近に上陸致したる敵に對し、直ちに攻撃を開始致したのであります。同方面の我が部隊は十月中旬末該方面の敵陣地を突破分断し、特に一部を以て敵の背後に上陸を決心せしめ、敵を斃すこと約三千、破壊鹵獲の火炮十數門等の戦果を収めたのであります。然るに敵は其の後急速に兵力を増強し、其の一部は我が側背に上陸し來り、今や全く補給戦の様相を呈して居るのであります。申すまでもなく、該方面の後方輸送は悉く海上輸送に依らねばならぬ關係にありまするが、我が海上輸送部隊は小舟艇類を以てダンピール海峡に出沒致します敵艦艇と交戦しつつ夜暗を利用し隠密輸送に任じて居る次第であります。十月下旬以降敵魚雷艇約二十隻を撃沈致して居ります。當方面に於きまする我が航空部隊は、或は遠く敵の航空基地を攻撃し、或は近く我が地上部隊の戦闘に協力し、特に敵航空及び潜水艦に對し我が海上輸送の護衛に日夜不斷の努力を傾倒して居る次第であります。十月下旬以後本方面に於て收めましたる戦果は、撃墜破約三百五十機、我が損害約三十機であります。

第二に濠洲西北方面に就て申上げます。本正面に於きましては敵は鋭意我が作戦準備を妨害する一方、其の反攻準備促進に努めつつあるのであります。十月下旬以降毎月延五百機を以て絶えず我が基地の攻撃、特に海上交通の遮断を企圖致して居るのであります。此の方面の陸軍航空部隊は常時不斷の航空作戦に任じ、特に船團の護衛、就中對潜水艦警戒等には眞に寧日なく、又當方面の我が地上部隊は、愈々其の作戦準備を強化致して居るのであります。第三にビルマ方面に付て申上げます。今春以來ビルマ反攻は屢々敵の呼號する所でありましたが、九月以降逐次敵

奮動の徴を認めまするので、軍は機先を制して是が撃滅に努めつつあるのであります。即ちビルマの東北方面、怒江正面に於きましては、十月中旬以降同江西岸に進出しましたる約二箇師の敵に對し、殲滅的打撃を與へたのであります。本作戦は重慶がビルマ・ルートの喪失に伴ふ苦悶の舉句英米軍と協同し、北部ビルマ奪回を企圖致したるに對し、我が軍が機先を制して之を撃攘したるものであります。本作戦に於ける戦果は敵遺棄死體、俘虜約一千五百名、鹵獲火炮銃器等多數であります。ビルマに於ける敵渡の來襲は雨期明けと共に急激に増加し、毎月延約二千數百機に上り、主として我が後方要地の攻撃を企圖して居るのであります。陸軍航空部隊は寡兵克く勇戦奮闘、常に旺盛なる闘志を以て凡ゆる創意と、凡ゆる工夫とを凝らし、一意任務に邁進して居る次第であります。特に印支航空ルートの遮断に努め、敵に大打撃を與へ、又十二月五日海軍部隊と協同し大舉カルカッタに進攻し、敵の慮に乗じて敵港灣施設及び船舶を攻撃し、多大の戦果を収めたのであります。十月下旬以降に於て收めましたる戦果は、撃墜破敵機約百五十機、撃沈破敵船舶十數隻、舟艇多數であります。

第四に支那方面に就て申上げます。支那方面に於きましては、其の後益々常時不斷の討伐を實施し、銳意治安の擴充に邁進して居るのであります。特に今秋には華北作戦、常德作戦、其の他幾多の作戦が行はれ、十月下旬以降支那全土に於きまする交戦回数は約四千回、交戦敵兵力は約六十餘萬に上つて居るのであります。先にも申述べましたるか如く、重慶政權は其の生命線たるビルマ・ルート回復の爲め、ビルマ反攻を企圖する徴候がありましたので、支那派遣軍は之を牽制抑留致しますと共に、武漢正面の敵を撃破する目的を以て、十一月月上旬より常德に向ひ作戦を開始致しまして、所在の有力なる敵を包圍撃滅しつつ、十二月上旬常德城を占領し、完全に作戦目的を達成致したので

あります。此の間敵はビルマ方面に使用せんと致したる兵力を反轉し、各方面より反撃し來ると共に、常德城直接の守備軍亦水流、城壁、家屋等を利用して、空軍の協力と相俟ちまして極めて頑強に戦闘致し、最近稀に見る激戦が展開せられたのであります。此の間に於きます敵交戦兵力は約三十數箇師團、兵數約四十萬であります。其の戦果は敵遺棄死體、俘虜約四萬四千、鹵獲火砲約百五十門、鹵獲銃器約七千でありまして、特に敵の師長六名を斃して居るのであります。

次に今秋以來敵米英は在支空軍の増強に努め、其の出撃機數は毎月延約五百機に達して居るのであります。陸軍航空部隊は常時不斷の航空作戦に任じ、特に常德作戦の際に敵挑戦の好機に投じまして大打撃を與へた次第であります。十月下旬以降の戦果は撃墜破せる敵機約百二十機、我が損害約二十機であります。陸軍と致しましては支那に於ける航空作戦の意義極めて重大なるに鑑みまして、今後更に隨時敵航空戦力の撃滅に努め、以て其の擡頭を封殺し本土防空の萬全を期して居る次第でございます。

第五に滿洲及び本土方面の状況に就て申し上げます。滿洲及び我が本土北邊に於きます陸軍部隊は、酷寒を冒して一意其の任務に邁進し、其の守りは磐石であります。又我が本土に於きます防衛諸部隊は愈々其の防備を強化致しますと共に、一意訓練に邁進し、我が本土防衛の完璧を期して居る次第であります。

之を要しまするに陸軍の戦況は、十月下旬以降大局上大なる變化はないのであります。各方面戦闘の實想は愈々深刻苛烈の度を加へ、敵は我が交通破壊に力を注ぎ、特に注意を要しまするは、補給戦の様相を呈しつつあるのであります。窮極する所資材の生産及び輸送の二點に歸するのであります。幸ひに資材、就中航空機の増産に關しま

しては、國民各位の熱烈なる御協力に依りまして、最近其の成果洵に見るべきものがあるのであります。此の點洵に御同慶に堪へぬ所でありますが、今後更に一段の努力を加へたいと存する次第であります。又輸送の問題に付きましては、密に海軍と協力し速かに是が対策を強化し、銃後國民各位の努力の結晶を速かに戦力化することに關し萬遺憾なきを期する所存でございます。

最近敵は各種の機會に於きまして内外に對する宣傳謀略等の必要に基きまして、幾多の威嚇的言辭を弄して居るのであります。今日敵が焦慮に陥り、遮二無二反攻を急ぐの状況は、是れ敵撃滅の好機を與へられるものであります。寧ろ我に有利なりと斷じて居る次第であります。愈々必勝の信念を堅持し、益々旺盛なる攻撃精神を發揮し、飽くまでも不屈不撓、一意戦争完遂に邁進せんことを期する次第であります。

終りに臨みまして謹んで陣歿將士の英靈に敬弔の誠を捧げますと共に、其の御遺族に深く御同情申上げ、又愈々熱誠溢るる國民各位の御後援に對しまして、私は厚く御禮を申上げる次第であります。之を以ちまして私の戦況報告を終ります。(拍手)

第八十四回帝國議會に於ける嶋田海軍大臣戦況報告

昭和十八年十二月二十七日

去る十月本議場に於て説明致しました以後に於ける帝國海軍の戦況に付て其の概要を説明致します。

大東亞戰爭の緒戦に於て皇軍が占領致しました大東亞及び太平洋、インド洋に互る廣大なる地域は、時と共に其の戰略態勢を着々強化するに到ると同時に、其の豊富なる資源を急速に開發し、是が戦力化に全力を擧げて邁進中であります。

敵米英は昨年来反攻作戦を繼續して参りましたが、此の急速なる我が戰略態勢の強化に狼狽し、最近其の反攻振りには特に熾烈の度を加へて参りまして、今や文字通り決戦段階に入り、戦勢愈々最高潮に達せんと致して居ります。帝國海軍部隊は、御稜威の下、陸軍部隊と緊密なる協同を以て勇戦奮闘、敵兵力の捕捉殲滅に努め、其の萬全を盡して居ります。本期間に於ける作戦の主なるものに於て、インド洋方面、太平洋方面並に潜水艦關係等の順序に説明致します。

先づインド洋方面に於きまして、海軍部隊は、陸軍と緊密なる協同の下に、占領地域の防備を固めると共に、進んで敵の後方攻撃に努め、去る十二月五日、陸海軍航空部隊は、カルカッタに對し晝間攻撃を執行致しまして、敵の軍事施設及び船舶に對し、甚大なる損害を與へたのであります。

又北太平洋方面に於きましては、我が海軍部隊は陸軍部隊と共に、吹雪の空に海に又陸に、儼として敵に對し、其の守り愈々固く、攻撃準備を整へて居ります。

次に濠洲方面に對しまして、海軍航空部隊は、十一月十二日未明、敵の軍事據點たるポート・ダーウイン、プロック・スクリーク、パツチエラ等に對しまして、大空襲を反覆敢行し、多大の損害を與へました。又東ニューギニア方面に於きましても我が海軍陸戦隊及び航空部隊はフィンシユハーフェン附近を中心とし瘴癘の地、克く困苦缺乏に耐

へ、陸軍部隊に協力して、敵軍の撃破に努めて居ります。

次に南太平洋方面に於きましては、此の二箇月間に於て、極めて大規模且つ激烈なる大空海戦が次々と展開され、帝國海軍部隊は其の眞髓を遺憾なく發揮し、赫々たる戦果を収めたのであります。

其の第一はソロモン諸島、ブーゲンビル島方面の作戦でありまして、十月二十七日敵の一部隊がソロモン諸島の小島モノ島に上陸して來ましたのを端緒としまして、十二月三日までに克く敵を捕捉し、所謂ブーゲンビル島沖海戦及び第一次より第六次に至るブーゲンビル島沖航空戦が相連續して起つたのであります。是は敵がソロモン諸島を経てラバウル方面を衝かんとする氣勢を示し、其の第一歩として、モノ島及びブーゲンビル島の占領を企圖致しまして、有力なる輸送船團並に航空母艦、戦艦を基幹とする機動部隊を以て、極めて執拗に進出して來ましたのに對しまして、我が海軍航空部隊及び海上部隊は、其の都度之を捕捉し、悪天候を冒し、極めて勇猛果敢なる攻撃を執行し、航空母艦十一隻、戦艦八隻、巡洋艦二十八隻、その他艦艇多數を撃沈撃破し、飛行機約六百機を撃墜するの大戦果を擧げたのであります。執拗なる敵は更にニューブリテン島に對し攻撃して参り、十二月十五日其の一部隊は同島マーカス岬附近に對する上陸を企圖して來たのであります。之に對して所在の我が海軍航空部隊は之に攻撃を加へ、上陸以前に其の大部を撃破しましたが、其の一部は遂に上陸し、目下我が守備隊と激戦中でありまして。爾來我が海軍航空部隊は連日敵輸送船團を攻撃し、敵艦船は勿論、兵員及び軍需品に對して多大の損害を與へ、本日までに巡洋艦三隻、輸送船二十二隻、その他上陸用舟艇等約百隻を撃沈撃破致しました。

ラバウル方面に對する敵の空襲も頻繁となり、其の都度激烈な空中戦を展開し、其の大部を撃墜して居ります。其

國民もアメリカ政府の公表に大なる疑惑を抱いて居る模様であり、結局政府信用の失墜に終ることは、従来の經驗に徴しても想像に難くない所であります。

殊に開戦以來帝國陸海軍が米軍に與へました人的損害は極めて大でありまして、我が海軍に依るものだけでも戦死約十七萬の外、之に倍する負傷者を出して居りますことは、アメリカ國民に對しては堪へ難いことであらうと思はれます。

楮て此の短期間に擧げました我が戦果は非常に大なるものでありますが、併し未だ敵に對し致命傷を與へたのではないのでありまして、此の赫々たる戦果と愈々緊迫して來ました戦局とを明確に區別して認識せねばならぬと思ふのであります。

抑、近代戦に於ける制海權の爭奪は、主として航空機の發達に依り、著しく其の趣きを異にして參りまして、昔のやうに彼我兩艦隊の一、二回の決戦に依り一擧に決するのではなく、所謂決戦の連続と云ふ様相を呈して來たのであります。隨て刻下の緊喫事は凡ゆる艱難を克服し、一億國民の全智全能を總動員し、唯一途に戦力増強の一點に集中致すことでありまして、斯くして前線將兵をして安んじて所要の飛行機、艦船を以て勇戦奮闘せしめますに於ては、聖戰目的の完遂決して難事ではないと確信するものであります。(拍手)

海軍將兵は帝國未曾有の大聖戰に際會し、陸軍と協力して海軍の重大責務を完遂し、身命を君國に捧げ得る光榮に衷心感激致しまして、常に 聖旨を奉體し、一意勇戦奮闘誓つて敵軍を撃滅して、以て 皇恩の萬分の一に報い奉らんことを固く期して居ります。

終りに臨み、壯烈君國に殉ぜられたる幾多忠勇なる將兵に對し、茲に衷心哀悼の誠を捧げ、其の遺家族に對して深厚なる同情の意を表します。(拍手)

聯合艦隊司令長官に對し賜りたる 勅語に關する

大本營發表

昭和十八年十二月七日

大元帥陛下には昨日海軍幕僚長を召させられ聯合艦隊司令長官に對し左の 勅語を賜りたり

勅 語

聯合艦隊航空部隊ハ今次「ギルバート」方面海域ニ於テ寡勢克ク連日ニ互リ惡天候ヲ冒シ勇戦奮闘大ニ敵艦隊ヲ撃破セリ 朕深ク之ヲ嘉ス

惟フニ戦局ハ益多端ヲ加フ汝等愈奮勵努力以テ朕カ信倚ニ副ハムコトヲ期セヨ

第四次ギルバート諸島沖航空戦に關する大本營發表

昭和十八年十二月一日

帝國海軍航空部隊は、十一月二十九日薄暮、ギルバート諸島東方海面に於て敵機動部隊を攻撃し左の戦果を得たり

撃 沈 航空母艦二隻(内一隻轟沈)

艦種未詳一隻

撃 破 大型巡洋艦一隻(大破炎上)

我方の損害未歸還六機

(註) 本航空戦を第四次ギルバート諸島沖航空戦と呼稱す

帝國陸軍航空部隊の各方面敵航空部隊に對する

戦果に關する大本營發表

昭和十八年十二月四日

帝國陸軍航空部隊は、十一月二十五日より十二月二日迄の間に各方面の敵航空部隊に對し次の戦果(地上火器によるものを含む)を收めたり

一、緬甸方面

撃 墜 四十三機(内不確實八機)

撃 破 六機

二、ニューギニア島方面

撃 墜 二十八機(内不確實七機)

撃 破 二機

三、支那方面

撃 墜 十五機(内不確實八機)

撃 破 十機

同期間に於ける我方の損害 自爆及未歸還八機なり

常德縣城完全占領竝に重慶軍第六戰區進攻作戰

戦果に關する大本營發表

昭和十八年十二月四日

十一月二日より重慶軍第六戰區に對し進攻作戰中の帝國陸軍部隊は同戰區の敵に徹底的打撃を與へ十二月三日十一時常德縣城を完全に占領せり、本作戦開始以來十二月一日迄の主要なる綜合戦果(常德縣城攻略戦の戦果を含まず)次の如し

敵に與へたる損害 我方にて收容せる死體一萬八千四百九十七、俘虜三千三百六十一、飛行機撃墜十四機

鹵獲品 火砲七十四門、銃器三千二百七十五挺

我方の損害 戦死五百五十六名

第六次ブーゲンビル島沖航空戦に関する大本營發表

昭和十八年十二月五日

帝國海軍航空部隊は、十二月三日夕刻、ブーゲンビル島南方海面に於て敵機動部隊を捕捉攻撃し左の戦果を得たり

撃沈

航空母艦 三隻(内二隻轟沈)

戦艦 一隻(若くは大型巡洋艦)

大型巡洋艦 一隻

撃破

戦艦 一隻(大破炎上)

大型巡洋艦 一隻(撃沈概ね確實)

駆逐艦 一隻(撃沈概ね確實)

我方の損害 未歸還一〇機

(註) 本航空戦を第六次ブーゲンビル島沖航空戦と呼稱す

華北討伐肅正作戦の戦果に関する大本營發表

昭和十八年十二月六日

北支那方面帝國陸軍部隊は九月中旬以降華北全域に互り討伐肅正作戦續行中にして、作戦開始以來、十一月三十日迄に判明せる主要なる戦果次の如し

敵に與へたる損害 遺棄死體二萬五千三百九十五、俘虜一萬九百四十六、覆滅施設二千百十二

南獲品火砲廿九門銃器一萬四千百廿九挺、地雷及手榴彈五萬三千八百六十六發

我方の損害 戦死七百卅八名

帝國陸海軍航空部隊のカルカッタ協同進攻戦果

に関する大本營發表

昭和十八年十二月六日

帝國陸海軍航空部隊は十二月五日カルカッタに協同進攻し港内に碇泊中の敵船舶及埠頭施設を爆撃すると共に敵戦艦約四十機と交戦し次の戦果を収めたり

撃破炎上 大型輸送船三隻

埠頭施設及倉庫群
 擊破 輸送船二隻
 擊墜 十二機(内不確實二機)
 我方の損害 自爆及未歸還二機

マーシャル諸島沖航空戦戦果に関する大本營發表

昭和十八年十二月六日

一、十二月五日朝敵機動部隊の艦載機約百機マーシャル諸島の我基地に來襲せるも所在帝國海軍航空全部隊守備隊並に海上部隊は之を逸撃し其二十機を擊墜せり
 我方地上に於て若干の損害あり

二、帝國海軍航空部隊は同日夕刻マーシャル諸島北東海面に於て右機動部隊を捕捉攻撃し之に壊滅的打撃を與へたり
 本戦闘に於て得たる戦果左の如し

擊沈 中型航空母艦 一隻(轟沈)
 大型巡洋艦 一隻(轟沈)
 擊破 大型航空母艦 一隻(擊沈概ね確實)

巡洋艦 一隻(擊沈概ね確實)
 我方の損害 未歸還六機
 (註) 本航空戦をマーシャル諸島沖航空戦と呼稱す

帝國陸軍の一箇年間に收めたる綜合戦果に関する大本營發表

昭和十八年十二月七日

昭和十七年十二月月上旬より昭和十八年十一月下旬に至る一箇年間に收めたる帝國陸軍の綜合戦果中主要なるものに我方の損害左の如し

一、南方及アリニューシヤン方面
 交戦せる敵第一線兵力 約四十萬
 敵に與へたる損害 約十九萬三千名(俘虜及歸順約十萬を含む)
 飛行機擊墜破 二千七百二十八機
 擊沈及擊破せる艦船 百八十五隻

二、支那方面

交戦せる敵第一線兵力 約二百三十七萬
 我方にて收容せる死體 約二十一萬
 俘虜及歸順 二十萬四千六百七十七名
 鹵獲及撃沈破船 八十八隻
 鹵獲舟艇 三千四百六十六隻
 飛行機撃墜破 三百七十三機

三、我方の損害
 戦 死 三萬二千九百六十二名
 飛行機 三百十三機

大東亞戰爭開始以來敵米英軍に與へたる人的損害に
 關する大本營發表

昭和十八年十二月八日

大東亞戰爭開始以來二ヶ年間に帝國陸海軍の敵米英軍に與へたる人的損害の概數次の如し

米軍 二十七萬七千名
 英軍 十二萬二千名

同期間に於ける帝國陸海軍の米英軍による戦死傷約十五萬九千名なり

常德附近戦果に關する大本營發表

昭和十八年十二月十一日

中支那方面帝國陸軍部隊は常德附近の戦闘に於て更に次の戦果を收めたり(十二月四日發表せるものを含まず)
 敵に與へたる損害

我方にて收容せる死體 一萬一千六(師長六名を含む)
 俘虜 一萬六百六十四
 飛行機撃墜 廿機(内不確實一機)
 鹵獲品 火炮 七十七門
 銃器 三千百卅七挺
 我方の損害 戦死七百十八名

支那方面帝國陸軍航空部隊の戦果に關する大本營發表

昭和十八年十二月十三日

支那方面帝國陸軍航空部隊は連日衡陽、零陵、梧州韶關等の敵重要基地に進攻すると共に來襲する敵機を邀撃し之に大打撃を與へつつあり

十二月四日より同十二日迄に敵航空部隊に對し收めたる戦果次の如し

撃 墜 四十四機(内不確實十一機)

撃破又は炎上 約四十機

同期間に於る我方の損害 自爆及未歸還九機なり

緬甸方面帝國陸軍航空部隊の戦果に關する大本營發表

昭和十八年十二月十六日

緬甸方面帝國陸軍航空部隊は、十月中旬以降、好機を捕捉し印度重慶間の敵空輸機を襲撃すると共にその在印根據地たるテンスキア飛行場を攻撃し該空輸路に對し大なる脅威を與へつつあり、本攻撃開始以來現在迄に判明せる綜合戦果次の如し

撃 墜 大型輸送機十四機を含み計四十一機(内不確實七機)

炎上又は撃破 大型輸送機二十二機を含み計二十八機

我方の損害 自爆及未歸還九機

ニューブリテン島マーカス岬附近戦況竝にマーカス

岬沖及ラバウルに於ける戦果に關する大本營發表

昭和十八年十二月十八日

一、我守備隊は十二月十五日以來ニューブリテン島マーカス岬附近に上陸せる一部の敵を邀撃激戦中なり

二、十二月十五日未明敵輸送船團のマーカス岬に近接中なるを發見せる帝國海軍航空部隊はこれをマーカス岬沖海上に於て邀撃爾後反覆痛烈なる攻撃を加へて左の戦果を收めたり

(イ) 第一次攻撃(十二月十五日早朝)

一、敵に與へたる損害

撃 沈 大型輸送船 一隻

小型輸送船 三隻

上陸用舟艇 三十隻以上

撃 破 大型巡洋艦 一隻(沈没概ね確實)

小型輸送船 一隻(沈没概ね確實)

右輸送船並に上陸用舟艇は何れも上陸前にして兵員を満載しあり

二、我方の損害未歸還三機

(ロ) 第二次攻撃(十二月十六日午後)

一、敵に與へたる損害

撃 沈 大型上陸用舟艇 一隻

撃 破 上陸用舟艇 二十隻以上

特殊輸送船 二隻(炎上大破)

大型上陸用舟艇 一隻(炎上大破)

上陸用舟艇 多數(炎上大破)

撃 墜 五機

右輸送船並に上陸用舟艇は何れも上陸前にして兵員を満載しあり

二、我方の損害未歸還三機

(ハ) 第三次攻撃(十二月十七日早朝)

一、敵に與へたる損害

撃 沈 小型輸送船 一隻

海上トラック 一隻

大型上陸用舟艇 四隻

上陸用舟艇 數隻

撃 破 小型輸送船 二隻(炎上大破)

海上トラック 一隻(炎上大破)

大型上陸用舟艇 二隻(炎上大破)

撃 墜 八機

二、我方の損害 未歸還機四機

尙十二月十六日には夜間攻撃を行ひ相當の損害を與へたるも暗夜の爲確認するに至らず

三、帝國海軍航空部隊は十二月十七日早朝ラバウルに來襲せる敵機約四十機を邀撃しその十八機を撃墜せり、我方

の損害未歸還二機

タラワ島及マキン島守備帝國海軍陸戰隊の全員玉碎
に關する大本營發表

昭和十八年十二月二十日



クラワ島及マキン島守備の帝國海軍陸戦隊は十一月二十一日以來三千の寡兵を以て五萬餘の敵上陸軍を邀撃、熾烈執拗なる敵機の銃爆撃及艦砲射撃に抗し、連日奮戦、我に數倍する大損害を與へつつ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の寄與をなし、十一月二十五日最後の突撃を敢行、全員玉碎せり
指揮官は海軍少將柴崎惠次なり
尙兩島に於て守備部隊に終始協力奮戦せし軍屬約一千五百名も亦全員玉碎せり

帝國陸軍航空部隊の昆明竝に雲南驛攻撃戦果に關する 大本營發表

昭和十八年十二月二十二日

帝國陸軍航空部隊は十二月十八日昆明敵飛行場を、同十九日雲南驛敵飛行場を攻撃し在地敵機を爆碎すると共に挑戦し來れる敵戦闘機各十數機と交戦し次の戦果を收めたり

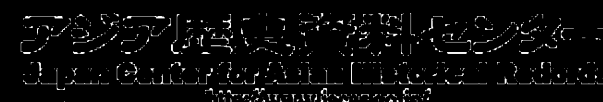
- 撃 墜 十五機(内不確實七機)
- 炎上又は撃破 十七機
- 我方の損害 自爆及未歸還六機

帝國海軍航空部隊のマークス岬附近攻撃戦果に關する 大本營發表(一)

昭和十八年十二月二十二日

帝國海軍航空部隊は十二月二十一日、午前午後一回に互リマークス岬附近の敵輸送船團を攻撃し左の戦果を收めたり

- (一) 第一次
 - (イ) 敵に與へたる損害
 - 撃 沈 大型輸送船 二隻
 - 特殊輸送船(若くは中型輸送船) 四乃至五隻
 - 巡洋艦(若くは大型驅逐艦) 二隻
 - 上陸用舟艇 一隻
 - 撃 破 驅逐艦 一隻(炎上大破)
 - 小舟艇 多數
 - (ロ) 我方の損害 自爆未歸還 五機
- (二) 第二次



(イ) 敵に與へたる損害

撃沈	特殊輸送船	二隻
	魚雷艇	二隻
	上陸用舟艇	約三十隻
撃破	驅逐艦	一隻(炎上大破)
	驅潜艦	一隻(大破)
	輸送船	一隻(大破)
	上陸用舟艇	多數(大破)
撃墜		四機以上

(ロ) 我方の損害 自爆未歸還 五機

輸送船並に上陸用舟艇は第一次、第二次共に全部上陸前にして兵員及び軍需品を満載しあり

帝國陸軍航空部隊の昆明飛行場攻撃戦果に關する 大本營發表

昭和十八年十二月二十三日

帝國陸軍航空部隊は十二月二十二日午後戰爆連合を以て大舉昆明飛行場を急襲し敵戦闘機約四十機の執拗なる妨害

を排除して地上に集結中の敵機群を攻撃せり、現在までに判明せる戦果次の如し

撃墜 戦闘機二十六機(内不確實八機)
 撃破炎上 大型六機、小型八機 計十四機
 我方の損害 自爆及未歸還四機

帝國海軍航空部隊のマーカス岬附近攻撃戦果に關する 大本營發表(二)

昭和十八年十二月二十三日

一、帝國海軍航空部隊は十二月二十二日未明マーカス岬附近の敵據點並に軍需品集積所を爆撃し二箇所到大火炎、一ヶ所に大爆發を起さしめ九箇所を炎上せしむる等甚大なる損害を與へたり

二、既報十二月二十一日の海軍航空部隊のマーカス岬附近敵輸送船團に對する第二次攻撃の戦果を左の通訂正す

(イ) 追加
 撃沈 特殊輸送船(若くは小型輸送船)三隻
 特殊輸送船(若くは海上トラック)二隻以上
 撃墜 三機

爆碎 敵陣地二ヶ所
 (口) 削 除
 撃沈 魚雷艇二隻
 撃破 驅潜艇一隻(大破)

帝國海軍航空部隊のマークス岬附近及アラウエ島
 竝にラバウル方面戦果に関する大本營發表表

昭和十八年十二月二十四日

- 一、帝國海軍航空部隊は十二月二十三日未明マークス岬附近及アラウエ島の敵據點を爆撃八箇所を炎上せしめたる外上陸用舟艇二隻を大破炎上せしめたり
 - 二、帝國海軍航空部隊は十二月二十三日午前ラバウルに來襲せる敵機約七五機を遠撃し、其の二四機(内不確實四機)を撃墜せり
- 我方の損害未歸還六機

帝國海軍航空部隊のマークス岬及ビレロ島

竝にラバウル方面戦果に関する大本營發表表

昭和十八年十二月二十五日

- 一、帝國海軍航空部隊は、十二月二十四日未明、マークス岬及びビレロ島の敵據點を爆撃し一箇所は大爆發、四箇所は大炎を起さしめたり
- 二、帝國海軍航空部隊は十二月二十四日午前ラバウルに來襲せる敵機百三十五機を遠撃し其の五十八機(内不確實五機)を撃墜せり我方の損害未歸還六機

帝國海軍航空部隊のカビエング、ラバウル竝にマークス岬
 附近等に於ける戦果に関する大本營發表表

昭和十八年十二月二十七日

- 一、十二月二十五日早朝敵機動部隊の艦載機約百二十機ニューアイルランド島カビエングに來襲せるも所在部隊は之を遠撃し其の三機を撃墜せり、我方損害輕微なり
- 二、帝國海軍航空部隊は十二月二十五日夕刻ブーゲンビル島北方海面に於て右機動部隊を補捉攻撃し敵艦一隻(艦

種不詳)を撃沈せり、我方の損害未歸還四機

三、帝國海軍航空部隊は十二月二十五日午前ラバウルに來襲せる敵機約七十機を邀撃し其の二十機(内不確實二機)を撃墜せり、我方の損害未歸還三機

四、帝國海軍航空部隊は十二月二十六日早朝マーカス岬附近の敵艦船及ビレロ島の敵陣地を爆撃し左の戦果を得たり

イ、敵に與へたる損害

撃 沈 海上トラック 一隻

撃 破 小型特殊輸送船 一隻(撃沈概ね確實)

小型特殊輸送船 一隻(炎上大破)

驅潜艇 一隻(炎上大破)

上陸用舟艇 一隻(炎上大破)

爆破炎上 敵陣地二箇所(ビレロ島は連爆に依り燒野化す)

ロ、我方の損害 未歸還 二機

ニューブリテン島グロースター岬戦況並にボルゲン灣、
マーカス岬附近及ラバウルに於ける戦果に関する大本

營發表

昭和十八年十二月二十八日

一、我守備隊は十二月二十六日以来ニューブリテン島グロースター岬の東西兩岸に上陸せる敵を邀撃激戦中なり

二、帝國海軍航空部隊は十二月二十六日正午ボルゲン灣の敵輸送船團を強襲し左の戦果を得たり

撃 沈 大型巡洋艦 二隻

大型輸送船 二隻

撃 破 大型輸送船 三隻(撃沈概ね確實)

撃 墜 二〇機(内不確實五機)

我方の損害 未歸還一七機

三、帝國海軍航空部隊は十二月二十七日早朝マーカス岬附近の敵舟艇及陣地を攻撃し左の戦果を得たり

撃 沈 特殊輸送船 二隻(兵員滿載)

魚雷艇 二隻

撃 墜 一八機(内不確實四機)

爆破炎上 三箇所

我方の損害 未歸還七機

四、帝國海軍航空部隊は十二月二日午前ラバウルに來襲せる敵機約五〇機を遠撃し、其の二三機(内不確實八機)を撃墜せり
我方の損害 未歸還六機

帝國陸軍部隊の重慶第六、第九戰區敵主力を撃滅綜合 戰果に關する大本營發表

昭和十八年十二月二十九日

- 一、十一月二日より洞庭湖西方地區に作戰中なりし帝國陸軍部隊は重慶抗戦力の根幹たる第六、第九戰區の敵主力を撃滅すると共に該方面の要衝常德周邊の諸軍事施設を完全に覆滅せり
- 二、作戰部隊は所期の目的を完全に達成し十二月二十五日原態勢に復歸せり
- 三、本作戰間の綜合戰果次の如し

我方にて收容せる死體 三二、七四七
 俘 虜 一四、三二五
 常德附近に於ける飛行機撃墜 六〇機

主なる鹵獲品 火 砲 一五八門
 重 輕 機 六五七挺
 小 銃 六三五六挺
 各種彈藥 二三六萬發
 我方の損害 死 一、六六六名

帝國海軍航空部隊のラバウルに於ける戰果に 關する大本營發表

昭和十八年十二月二十九日

帝國海軍航空部隊は十二月二十八日早朝ラバウルに來襲せる敵戦闘機約五〇機を遠撃し其の三一機(内不確實一〇機)を撃墜せり
我方の損害 未歸還三機

帝國海軍艦艇並に陸海軍航空部隊の敵潜水艦十四隻撃沈

其他戰果に關する大本營發表

昭和十八年十二月三十一日

- 一、帝國海軍艦艇並に陸海軍航空部隊は日本近海其他作戦海方面に於て十月以降本日迄に敵潜水艦十四隻を撃沈せり
- 二、既報帝國海軍航空部隊の十二月二十五日ブーゲンビル島北方海面に於ける敵機動部隊攻撃に際し得たる戦果に敵艦(敵種不詳)一隻撃破を追加す

國 際 時 報

テヘラン會談の實情とその後の歐洲情勢

(一) 序 説

十二月一日に至る四日間、テヘランにおいて開催された米英ソ三國首腦會談を契機として、歐州の情勢は明に政戦兩面に互る新たな段階に突入した。少くとも敵米英は第二戦線結成の言質を取られたことにより、獨ソ共倒れを狙ふ従来の戦争遂行方式を一擲して自ら火中に栗を拾ふの危険に直面せしめられる一方、政治の面に於てもソ聯の政治的攻勢の前に漸次大西洋憲章を空文と化し、自己傘下のポーランド、ユーゴその他亡命諸政權を賣り渡すの已むなきに至らうとしてゐる。以下米英ソ從來の關係を回顧しつつ、テヘラン會談の實情を明かにし、

爾後の歐洲新情勢に検討を加へることとする。

(二) テヘラン會談前の米英ソ三國關係

一九四一年六月の獨ソ開戦により僅に危局を脱し得た英國は、専らソ聯の犠牲に於て國內體制整備のための貴重な時を稼ぐと共に、内心獨ソ双方の疲弊を待ち望んだのである。この氣持は米國においても大同小異であり、従つて米英の一貫した對ソ政策は、間接的な物的援助を繼續することのみによりソ聯の戦線脱落を防止すると云ふ線に沿つて進められた。

他方ソ聯は翌一九四二年五月モロトフ外務人民委員自ら米英を歴訪し、英ソ軍事同盟條約並に米ソ諒解を成立さ

せたが、その後もソ聯がドイツ軍の苛烈な攻撃を一手に引受けて國土を荒廢に委し人的物的の甚大なる損耗を強ひられてゐるのに引替へ、米英は一向に歐洲第二戦線を實現せず緩慢且悠然たる戦争態度を以て自己の消耗を避けつゝひたすら戦力の充實に努めてゐるので、漸く不快と不安を露骨に示すに至つた。就中昨今獨ソ戦線が危局を離脱して餘裕を取戻し、漸次政治的發言權を恢復するに及んで、米英に對し所謂第二戦線の開設を猛烈に要求するとともに、米英が戦闘を回避して消耗を避けんとするが如き利己的態度は斷じて許さないとする強硬な態度を明確にしたのである。かくして米英は、ソ聯に對し著しく危懼の念を深め、少くとも戦争継続の言質をソ聯より獲得しようとする焦燥は、次第に深刻となり、本年八月のケベック會談(第六次會談)に於ては、あらゆる手段をつくしてスターリン議長との會談を實現し、ソ聯をして戦争継続を確約させようとの決意を公然表示するに至つた。

た。即ち八月二十五日の共同コミュニケに於ては、
「一九四三年末までに米英兩國政府が別に會談を開催し、更に纏めることが出来ればソ聯との間に於ける三國會談を開催するやう決議された」
と述べ、續いて八月三十一日チャーチルは右を敷衍して「ルーズヴェルト竝に余はスターリン議長との三國首腦會談開催に對し最大の希望を持つてゐる。今迄之が開かれなかつたのは我々が最善を盡さなかつたためではなく、スターリン元帥が赤軍將士を戰場に置き去りにすることが出来なかつたからである。ルーズヴェルトと余はスターリン議長と會見せんとする努力を飽く迄押進める積りである」
と決意を表明して自己陣營の不安と失望とを慰撫し、續いて赤軍の力闘に讃辭を呈した後、
「獨軍の最大重壓を背負つてゐるロシヤ人達が、我々に對して第二戦線の遂行を間斷なく督促し、又

我々の不履行に對し不平と非難とを持つて居るのは極めて當然である。」
と宥和に努めてゐるのであるが、その口の下から、

「余はフランスにある獨逸軍と干戈を交へるに至る日を待望してゐるが、然し、一大攻勢の決行は順調な成功の見透しがついた時に於て始めて可能となるのであり、我々の兵士達は如何なる種類の政治的考慮にも浪費されることなく唯軍事的計畫に従つてのみ活用されるべきである」

と述べ、米英のソ聯に對する利己的態度が、根本的には變化無く、出來得る限り歐洲第二戦線開設を遅延しようとする肚であることを推察させた。しかもチャーチルは、
「米英ソ三國外相乃至責任ある代理者が適當な場所において會談し、各種の重要問題を検討して、三國首腦が問題に介入し得る所迄討議を進めることは極めて緊急且必要と考へる」

と述べ、スターリン議長出馬のための諸條件を検討すべき米英ソ三國外相モスクワ會談の計畫を勾はせたのである。

然るに、その間米英ソ三國の歩み寄りを可能ならしめる他の事情が醸成され來つた。それは、三國の國內的諸困難の激化により戦争短期終結の要望が昂つたのにもかかはらず、大東亞戦争はもとより歐洲戦争も亦ドイツの勇戦により停頓膠着の可能性を示し始めたことである。

英國の國內は、開戦五年目に至り既に疲弊の色の蔽ひ難いものがあり、米國の老大な軍需生産力も去る七月頃を以て一應頭打ちとなり、船舶航空機等の増産の爲には超重點生産方式への切替へを餘儀なくされるに至つた。

他面戦争目的の晦冥は戦局に對する徒らな樂觀論の流行と相並んで、當局者の屢次の警告にも拘らず、米英兩國就中米國國民の戦意を弛緩せしめる危険を孕み、政府の物價對策の不徹底は闇取引の横行や勞働罷業の頻發とな

り、兩國とも悪性インフレーションの脅威にさらされようとしてゐる。

又ソ聯に於ける國內事情も樂觀を許さないものがある。人的資源の枯渇と奪回地帯の荒廢に加ふるに、ヴォルガ、カザクスタン地方の旱魃は最もよく食糧難に反映し、一九四三年一月より十月末に至る米國の武器貸與法に基づく食糧輸入は百七十九萬噸に達したのにも拘らず、十一月二十一日には一年七ヶ月振りでパン割當量の切下げが行はれた。しかも、米英は、北阿からシチリアへ、そして南伊へと易きについた作戦のみを行ひ、ソ聯が本格的第二戦線と認め得るやうな作戦は言を左右に託して未だに決行せず、その上、南伊戦線は完全な停頓状態に陥り、僅に「蝸牛の前進」をなしてゐるにすぎない。そしてソ聯は又しても歐洲戦局の全重壓を背負はされて甚しい消耗を強ひられるに至つた。

他方、ドイツは精戦に先占した有利な態勢を利用して、

その外廓線において戦ひつつ敵に消耗を強ひると同時に、自己は極力消耗を避けて戦力の充實に努めてゐる。かくして、ソ聯側としては、このあたりで米英の眞の肚をつきとめて置く必要を感じたであらうことは想像に難くないのである。そして米英側としてはもとよりソ聯の力を借りずに單獨でドイツを打倒することの絶対に不可能なのを身にしみて知りぬいてゐるのであるから、出來得る限り戦争を短期に終結せんと焦慮する餘り、極力ソ聯に對する歩み寄りの機会を求めた。

去る十月の米英ソ三國外相會談は、上記の如き複雑な事情の下に、妥協し得べき諸條件の検討を行ひ、ルーズヴェルト、チャーチル、スターリン三巨頭會談を困難ならしめる事情を除去する目的を持つものであつた。

(三) テヘラン會談の意義

「我等即ち米國大統領英國首相及ソ聯邦首相は、此の四日間我等の同盟國イランの首都に於て會合し我等の共

通の政策を決定し且之を確認せり。我等は我等の國家が戦時に於ても亦之に引續く平時に於ても共同に行動する決意ある旨を表明せり。

作戦に關しては軍部代表を圓卓會議に参加せしめ獨逸軍撃滅の方策を協議したるが、我等は東方西方及南方より執らるべき作戦の規模及時機に關し完全なる協定に達したり。(We have reached complete agreement as to the scope and timing of operations which will be undertaken from the east, the west, and the south.)此の共通の諒解は我等の勝利を保障するものなり。

戦後の平和に關しても我等は三國間に存する一致が之を鞏固なる平和たらしむべきことを確信す。我等及聯合諸國民は世界の大多數の民衆の是認し且今後數世紀に互り戦争の災禍及脅怖を除去するが如き平和の實現に對し崇高なる責任を擔ふものなることを充分に認識するものなり。我等は外交擔當者と共に將來に關する問題を審理せ

り。我等は我等の國民と同様、壓制、奴隸、迫害、偏狭の排撃に熱意を有する大小國民の協力及積極的参加を希望するものにして、是等諸國家にして之を欲せば民主主義諸國家の世界的家族に参加するを歓迎すべし。地球上の如何なる兵力も我等が獨陸軍を陸に、獨潜水艦を海に、獨戦時工業を空より撃破するを阻止し得ず、我等の攻撃は苛責なく且激化し續くべし。

此の友好的なる會談に依り我等は世界各國民が自己の決定と良心とに従ひ自由にして壓制なき世界に生存し得べき日の來る可きことを確信す。我等は希望と決意とを以て此處に集りたるが今や心と目的を一にする眞の友人として當地を立去るものなり。

一九四三年十二月一日

テヘランに於て署名

ルーズヴェルト

チャーチル

チャーチル

以上がテヘランにおいて開催された米英ソ三國首脳會談公報の全文であるが、その後米英側當事者が右會談の内容について発表した言辭の主なもの拾へば左の如くである。先づルーズヴェルトは、十二月十七日、華府歸還後、新聞記者團との初會見においては、

「今次會談は尠くとも我等の時代に於ては新たな戰爭を發生せしめない爲の努力に終始した。スターリン議長は現實主義の人であるが、右の如き自分の意圖には同意であつた」

と簡単に述べたのみであつたが、十二月二十四日のクリスマス前線放送中に際しては相當詳細にテヘラン會談の内容に言及した。いまその要旨を抄記すれば、次の通りである。

「政戦兩略に互りあくまでも隔意なき意見の交換をした結果三國代表はドイツ軍に對する攻勢開始に關し

凡ゆる點に於て意見の一致を見た。赤軍は東部戰線に於て熾烈な攻勢を繼續するであらう。イタリア本土並にアフリカ北部に於ける反樞軸軍は南方からドイツ軍に對し不斷の壓迫を加へ、更に米軍並に英軍の大部隊は他の諸點から攻撃するであらう。現在三百八十萬の海外派遣軍は來年七月迄には五百萬に増加しよう。

我等は單に軍事問題のみならず將來の世界建設計畫にも注意を拂つた。そして廣汎な國際關係を審議したが、然し細目には觸れなかつた。自分は審議の結果より見て三國間に解決困難な意見の不一致はないものと考へる。國の大小を問はず各國の權利は合衆國內の個人個人の權利と同様尊重擁護されなければならない。強者が弱者を支配すると云ふ原則には自分は反對である。只、自由に對する各國民の權利は各國がどの程度迄自由の爲に戦ふ用意があるかによつて測定されなければならない。」

他方、英外相イーデンは十二月十四日上院において次の如く報告した。

「テヘラン會談の基礎はモスクワ三國外相會談により築かれたものであるが、今や三國首脳者會談により米英ソ三國の協力は全く確立した。一々の計畫及びその實施時機につき合意が成立したので戰爭終結時期は短縮されるであらう。六ヶ月前迄は戦後協力に關し三國間に必しも意見の一致があつたとは言はれなかつたが、現在に於ては米英ソ三國は戦後も協力し得るといふことが出来よう。」

以上を綜合すれば、テヘラン會談はモスクワ會談に於て探求されたスターリン議長出馬のための諸條件に關する原則的諒解の範圍内に於て之を再確認し、且具體的協議が遂げられたものと見られ、従つてドイツ攻撃の時機、場所、規模等が一應決定されたこと疑ひないのであるが、他面肝腎な歐洲の政治的處理方針がどう決定された

かは一尙具體的に示されてゐない。これは、歐洲の政治問題を繞る米英ソ三國の微妙な對立を物語つて餘りあるものといへよう。

いまテヘラン會談の内容を個別的にみれば左の通りである。
(イ) 對獨戰短期終結の見地による軍政兩略即ち第二戰線の開設地、規模、時機及びトルコ參戰問題、獨逸支配下諸國に對する政治攻勢等が決定をみたことは略々疑ひ無い。

(ロ) 米英の最大の頭痛の種になつてゐるソ聯の國境問題、戦後歐洲の處理問題は概ね將來に残されたものと見られる。右が話合はれたことは有り得るが積極的な決定に達したとは思はれない。寧ろ決定を避けることがテヘラン會談成立の前提條件をなしたとみるを妥當とする。
かくしてソ聯は米英の對獨協同體制に加入したわけ

ありこの面に於ての協力は改善されるであらうし、その限りにおいてスターリン議長をこの會議に出席させ署名までさせたことは米英の成功であつたといふことができ。しかしながら、根本的な政治問題が背面に押やられたことは致命的であり、將來に紛争の因を残すものといふ外はない。

もとより戦後平和確立に對する協力と云ふことが謳はれてゐるが、何等具體的内容のない協力といふものが如何に無意味なものであり、またいざとなればどうにでも變へられるものであることは、スターリン議長ならずともルーズヴェルト、チャーチル兩人の身に充分覺えのある所であらう。

又敢て戦後の平和と言はずとも、現在既に協力解決すべき幾多の紛争例へばフィンランド、バルト三國問題、ポーランド、ユーゴスラヴィヤの亡命政権の問題等について、米英がその金科玉條たる大西洋憲章との關係をどう

糊塗するかは、今後の最も興味深い見物たるを失はない。

最後に最大の重點である對獨攻撃方法に關しても尙曖昧な表現が無いとは言へない。現在行はれてゐる東部戦線、英本土よりの爆撃戦、伊太利戦線等は正しく東西南の三方よりする對獨攻撃であり、まさかの場合には老獪な米英の迷口上の一助ともなり得るのである。ルーズヴェルトの言ふが如く、それが右以外の他の地點であるとしても、決定と實行とは自ら別であらう。

尙、テヘラン會談公報發表と同時にイラン國の獨立尊重並に經濟援助に關する三國宣言も發表されたが、これは結局會議開催地であるイランの面子を尊重して食糧難その他から最近米英ソ三國軍の駐留に對する不滿を昂めてゐる同國民を懐柔するとともに、同國內における米英ソ三國の政治的暗闘に關し相互に牽制的な手を打つたといふ以外、餘り重大な政治的意義は有しないものと考へられる。

(四) テヘラン會談後の歐洲情勢

テヘラン會談後に於ける歐洲情勢は、ソ聯の政治的攻勢が漸次明確な姿を呈し始めたことに對し、米英がこれを容認乃至默認してゐることによつて特徴付けられる。

これは獨ソ戦線に於けるソ聯の進出に伴ひ當然に豫想された所であり、米英はモスクワ、テヘラン兩會談を通じて何等かの諒解に達したい希望を持つてゐたのであらうが、ソ聯の歐洲政治問題に對する態度は、何等の決定を行はないことを主眼とし、米英は差しあたりこれに讓歩を強ひられた形になつた。従つて、早晚利害の相反するに至ることは充分に豫想されたのである。

現にソ聯はその後の戦局の好轉につれて、漸次明確且活潑にその外交政策を推進してゐたが、十二月十二日亡命チエツコ政権との間に友好相互援助條約を締結しその隣接小國に對する態度を明にした。同條約の要點は次の通り。

第一條 友好戦後協力及び對獨戦争に對する相互援助

第二條 單獨不媾和

第三條 戦後再び獨逸の攻撃を受くる場合の協力

第四條 獨立尊重及び内政不干涉

第五條 兩國は、他の一國に對抗する如何なる條約乃至

同盟にも加入せず

第六條 有効期間二十箇年

附屬議定書、兩國に接壤し今次戦争に於て獨逸の侵略を受けた第三國が本條約に参加を希望する場合他の條約國の同意を得て其の参加を許容す。

これは英國の傳統的勢力均衡政策の現れである東歐聯邦案及び歐洲諸小國をして國家群乃至國家聯合を形成せしめんとする本年三月二十一日のチャーチルの戦後經營論と相反するのみならず、英ソ同盟條約と殆ど同内容の條約をチエツコの如き小國と取結んだことは、三大國指導による共同安全保障の構想に矛盾し、且共同安全機構が作られるとすれば黨中黨を作る如きものとなるのであり、

英國の對歐政策乃至は戰後案と明に背馳するのである。他方ソ聯の意圖は、その勢力の及ぶ諸小國に對し自己と友好的な政權を樹立せしめ、これと個別的條約を結ぶことにより自己を盟主とする集團安全保障制度を構成しようとしてゐるものと一般に推測されてゐる。

又、ソ聯は今次大戰におけるドイツの東方進攻をスラブ民族に對するゲルマン民族の侵寇であるとし、これに對するにはスラブ民族の大同團結を以てすべきであるとの論法を取つて汎スラブ主義運動を強化してゐる。

そして今回のソチ條約に對するソ聯の取扱ひは甚しく宣傳的であり、チエツコの如き小國と全く對等な條約を結んだことを以てソ聯の小國尊重意圖の現れであると爲す一方、所謂英國の「防疫線政策」を暗に非難してゐる。例へば「戰爭と勞働階級」誌第十四號は、

「本條約は大國對小國將來の庇護關係の基礎となるものであつて、歐洲小國が人工的且生氣なき團結を行

ふことなく一般安全保障制度に参加する可能性を示唆するものである。附屬議定書は歐洲の安全保障制度を組織する上に於て意義深いものであらう」と説明してゐる。又、亡命チエツコ大統領ベネツシユは、十二月二十二日、

「チエツコは夙に歐洲平和は小國とソ聯との協力なくしては不可能であるとの見解を持つてゐたが、今次條約は一般安全保障制度の一環となるであらう」と述べてゐる。

他方英外相イーデンは、十二月十四日下院に於て、本條約はモスクワ會談に於て容認された所であり、歐洲の一般安全保障制度を脅威するものとは考へないと言明したが、米國務省も十四日大體同様の見解を表明した。

他方、ユーゴスラヴィアに對しては、ソ聯は共產主義者チトーに對し援助を與へてゐたが、十二月四日チトーを國防委員長とする假政府即ちユーゴスラヴィア解放

委員會が樹立されるや、ソ聯は十二月十四日軍事使節團の派遣を發表した。しかも、米英側はこれに先立つて、チトーに對する武器援助と軍事使節派遣を發表し、ソ聯に對する政治的牽制策に出でた。(後掲「チトー赤色政權の樹立と舊ユーゴスラヴィア領の現状」参照)

かくしてベーター二世以下亡命ユーゴ政權は、多年の米英に對する忠勤も空しく、無慙にも牛を馬にのりかへられた形となつたのである。

尙、ギリシヤに於ても反獨戰線の分裂が傳へられ、共產主義運動の廉により國外に追放されてゐたスロヴオス博士を首班とする赤色臨時政府が樹立されたと報ぜられてゐる。

ブルガリアに對しては、テヘラン會談に基く對獨戰短期終結の爲の政治攻勢が集中されたかの感がある。即ち米英は屢次に互るソフィヤ大爆撃とともに猛烈な威嚇宣傳を敢行、米國務長官ハルは十二月十一日ブルガリア、

ハンガリー、ルーマニアに對し恫喝聲明を發したが、ブルガリア國民は米英に對して何等の敵對行爲をもしてゐないのに拘らず、屢次の空襲により多大の被害を受けたことに憤懣の念を懷いてをり、壓迫に對し反撥する尙武的國民性も加はつて愛國運動が活潑に行はれてゐる。

そして、フィンランドに對しては、ソ聯は、同國が對ソ防壁として利用されることを極力警戒してをり、その態度も強硬である。しかしフィンランド國民は無條件降服を拒否し、依然抗戰の決意を堅めてゐる模様で、現にリスト・リチ大統領は十二月六日獨立二十六周年に當り戰爭繼續の決意を闡明してゐる。

又、バルト三國に對しては、ソ聯はこれを自國領土とみる立前をとつてをり、米英の介入を許さず、實力を以て奮回する意圖をもつてゐるもの如くである。そして米英は大西洋憲章にも拘らず、ソ聯の要求を容認する外はないものと諦めてゐるとみられる。

最後に、トルコに對しては、十二月四日より六日に至る三日間、ルーズヴェルト及びチャーチルはカイロにおいてイノニュー士大統領出席の下に米英土三國首脳會談を開催し、同七日左の共同コミュニケを發表した。

「ルーズヴェルト、イノニュー及びチャーチルの三者は、一般政治情勢を検討し且三國の共通並に特殊事情を考慮し今後執るべき自己の政策を全面的に審議した。そして相互理解と誠實の精神に基き一切の問題を研究した結果、米土英間には緊密な一致が現存して居ること及び國際情勢に對する此等諸國の態度が判明した。かくして四箇國間の傳統的親善關係が再確認されるに至つた」。

そして、本會談がテヘラン會談の決定に基いて開催されたことは、十二月十四日の下院に於けるイーデンの報告に照しても疑ひなく、且又米英が對獨戰爭計畫に對するトルコの積極的協力を強要する目的を有してゐたこと

も略、確實とみられるが、他方、メネメンジヨグル外相が、十二月九日アンカラにおける記者團會見に際し、

「國際政局のすべての様相と戦争のあらゆる部面に對して検討を加へた。英土相互援助條約は今後益々強化されるであらうが、トルコ従來の外交政策には變化なし」

と説明してゐるのに鑑みれば、トルコは米英の參戰要求を一應拒否したものと解される。事實、トルコに於ては政府のみならず國民一般も參戰には甚しく消極的であり、尠くとも自己の發意に於て參戰することは先づあるまいと觀測されてゐるが、トルコは對バルカン作戦の最も有力な基地であり、米英がこの方面に作戦を開始する場合には非常手段に訴へて遮二無二參戰を餘儀なくすることもあり得るし、又バルカン等の情勢の急變により捲込まれる惧れもないわけでは無く、結局歐洲戦局今後の推移がトルコの向背を決定する最大要因になると見るのが無

理のないところであらう。

(五) 結 語

以上を綜合すれば複雑な過程を経過しつつも「歐洲第二戦線」の問題は、テヘラン會談を契機として漸く實行への段階に移行したと見ることが出来る。そして米英が既に軍事活動に先立ち早くも老獪な政治的策動をバルカン特にトルコ、ブルガリア、ユーゴー等に試みてゐることとは上述した通りである。

しかしながら、かうした米英の妄動も歐洲第二戦線成功の見透しがついたからではなく、むしろソ聯の強要に迫られ、内政上の諸困難に驅り立てられて、云はば、政治上の必然性によつて否應なしに、最も好まない一大賭博へと追込まれた結果とみることが出来る。

即ち米英は十二月二十四日より二十九日にかけて歐洲侵攻反樞軸軍の新設及び地中海方面反樞軸軍總司令部の改編を決定發表したが、その陣容は左の如くである。

一、歐洲解放の爲英本國に於て組織さるべき米英兩國軍遠征軍最高司令官(米陸軍大將)ドワイト・アイゼンハウアー

最高司令官代理(英空軍大將)

アイゼンハウアー麾下英軍
總司令官(英陸軍中將) パーナード・モントゴメリー
海軍司令官(英海軍大將) アレキサンダー・ラムゼー
空軍司令官(英空軍中將) レイ・マローリー
對獨戰略爆撃隊司令官(米陸軍中將) カール・スパーツ

米第八航空部隊司令官(米陸軍少將) ジェームス・ドワリットル

二、地中海方面反樞軸軍總司令官(英陸軍大將) ヘンリー・メイトランド・ウイリソン

副司令官兼米軍司令官(米陸軍中將) ジェイコブ・デイヴアリス

西亞軍司令官(英陸軍中將) パーナード・バジエツト

カナダ獨立軍司令官(加陸軍中將) ケネス・スチュアート

フランス叛軍第二軍司令官(佛叛軍陸軍中將)
 ジヤンド・ラトル・タツシニ
 三、イタリア方面反樞軸軍總司令官(英陸軍大將)ハロルド・アレキサンダー
 米第五軍司令官(米陸軍中將)
 マーク・クラーク
 英第八軍司令官(英陸軍中將)
 オリヴァー・リリス
 ニュージールランド第二師團司令官(ニュージールランド陸軍司令官)
 パーナード・フライバーグ
 フランス叛軍遠征軍司令官(佛叛軍陸軍中將)
 アルフォンス・ジュアン

チトー赤色政權の樹立と舊ユーゴスラヴィア領の現状

バルカン半島に對する米英の策動は最近頗る目立つてきたが、その中でも最も興味深いのは、十二月四日舊ユーゴスラヴィア領ヤイツェに樹立されたチトー赤色政權即ちユーゴスラヴィア解放委員會に對する米英就中英

しかも、米英が澁々ながらもかくの如き大兵力を集結し、歐洲大陸に猪突して來ることは、完備した歐洲要塞に據り、内線作戦の有利な態勢の下に、滿々たる自信を胸に秘めて待機してゐる獨軍當局にとつては、正に殲滅的打撃を米英軍の頭上に加へる絶好の機会といふべく、近く開始されるべきドイツの對英報復爆撃とともに、歐洲戦局に決定的意義をもたらすことが豫想されるのである。

國の見苦しい媚態であらう。
 即ち、英外務次官ローは、十二月八日、下院において一議員の質問に答へて、
 「英國は舊ユーゴスラヴィア領における對獨反抗

勢力を全部援助してゐるが、最近に於てはチトー政權の活動力がミハイロヴィツチ軍より大きいので、ミハイロヴィツチ軍よりもチトー軍の方に一層多くの援助を與へてゐる。」
 と言明、又、イーデン外相も十二月十四日の下院演説に際し、英國はチトー政權に對し武器彈藥その他一切の可能な援助を與へてゐるのみならず、軍事委員をも派遣してゐる旨を發表した。かくして、十二月十一日ロンドン發タス電が、これに先立つて、米英側聯絡將校の空路ユーゴ赴任を報道したのが偽りではなかつたことを裏書したのである。

他方、十二月十四日カイロ發ロイター電は、同地に在る亡命ユーゴ政府が英國のチトーに對する武器援助に關し、不滿の意を表明したことを報じた。これは、同政府系のミハイロヴィツチ軍が現に舊ユーゴ領内でチトー軍と屢々武力衝突を惹起してゐる以上、當然のこと

と云ひ得るであらう。しかも國王ピーター二世以下亡命ユーゴ政府首腦部が今日の如き亡命流竄の境涯に陥るに至つたのは、一に専ら米英側謀略の魔手に躍らされ殊に英國に對して忠勤を勵んだからに外ならないのであるから、その間の事情を知るものにとつては、今更チトー一派の赤色政權が優勢になつたからといつて、あつさりその方に見かへてしまふ英國の冷酷無恥の態度に義憤を感じると共に、身から出た錆とはいひながら、英國を信じ且頼つたために相次いで見るも哀れな窮地に追ひこまれて行くポーランド、ユーゴスラヴィア等歐洲諸小國の運命に憐憫を感じざるを得ないのである。

いま舊ユーゴスラヴィア國崩壞當時の狀況を顧ると、昭和十六年三月二十五日、パウエル攝政以下三攝政を含む同國首腦部は、日獨伊三國の世界新秩序建設に協力すべく三國條約に参加したのであるが、これに對し、三

月二十七日軍部を中心とする反樞軸クーデターが起り、パウエル攝政以下政府首脳部は總辭職し、國王ビーター二世の下にシモウイツチ前參謀總長を首班とする反獨内閣が組織された。

そして、米英の支援を頼んで國境の軍備を固め明に反獨氣勢を示したので、ドイツは遂に斷乎脅威の鐵槌を下すべく決意し、四月六日同國に軍を進め、忽ちにしてユーゴスラヴィア全土を席捲、四月十七日ユーゴ全軍は無條件降服し、國王ビーター二世以下は國外に逃げ去つたのである。

しかも、亡命ユーゴ政權は、その後陸相ミハイロウイツチをして執拗なゲリラ戦を續けさせ、バルカン方面反樞軸側の策動とにかく一臂の勞を惜まなかつたのであるが、ソ聯の援助を背景とするチトー一派の共產系、バルチザンが漸次勢力を得てその兵力二十萬と號するに至る一方、ミハイロウイツチ軍は、ドイツ軍の肅清工作と

チトー軍の攻撃との板狭みになつて、當初四萬乃至五萬

といはれた兵力も一萬五千乃至二萬程度に減少してしまつた。すると英國は上述の如く掌をかへすやうにこれを袖にし、チトー一派に武器彈藥を供給するのみならず、政治代表や軍事委員まで派遣するに至つたのである。

かくして國王ビーター二世以下亡命ユーゴ政權の立場は極めて困難なものとなつたが、これに對する米英殊に英國朝野の態度は實に素氣ないものであつて、十二月十二日ロンドン・タイムス紙の如きはチトー政權の樹立を祝福する一方、

「將校、官吏、外交官の集團にすぎない亡命ユーゴ政權がチトー政府の合法性を否定するのは不愉快である」とさへ論じたと傳へられる。

さて、チトーは本名をヨシフ・ブロズ・チトー Josip

Broz Tito とす(但しTitoはThird International Terrorist Organisationの頭文字をとつたものといふ説もある)、セルビア系農民出身の共產主義者で、前大戦中ロシアに捕虜となつてゐたことがあり、又、スペインの内亂當時には同地の共產軍に加はつてゐたとも或はソ聯においてバルチザン教育を受けたとも傳へられてゐるが、詳細は判明しない。

ユーゴ潜入後は蘇聯のバルチザンに範をとり、共產主義乃至左翼民主主義及び汎スラブ主義を標榜して組織的活動を開始し、獨逸軍の掃蕩作戦に追はれつつもグルマチア山嶽地帯を中心に盤踞してゐたが、十二月四日ソ聯政府支援の下にユーゴスラヴィア解放委員會を樹立したのである。

十二月四日自由ユーゴ放逐局の發表として傳へられた所によれば、右に先立つて開催されたユーゴ全地區代表者會議がユーゴ解放委員會を組織してユーゴ

臨時政府としての全機能を賦與し、臨時議會を組織し、且原則的に舊ユーゴ聯邦憲法を採擇することを決議したものとみられるが、右臨時政府の構成は左の如くである。

議長 兼 回復地首班 イワン・リバル(クロアチア人)
(第一次大戦後ベルグラードに召集された國民會議議長)
議長代理 モーシヤ・ピヤダ(セルビア人)以下五名
國防委員長兼國民解放軍司令官元帥

同代理 ヨシフ・ブロズ・チトー(クロアチア人)
ウラゴ・リブニカル

(ベルグラード・ポリチカ紙前社長)

ホヂダル・マゴバツ

(ホルワット人、農民黨員)

外交部長 ヨシフ・スモドラカ

(ホルワット人、前ヴァチカン駐劄ユーゴ公使)

其他 内務部長 復興部長 鑛山林業部長等

以上政府委員は總數六十四名であり、セルビア人二十三名、クロアチア人二十名、スロヴェニア人十名、モンテネグロ人四名、回教徒三名より成り、主として外交

官、辯護士、大學教授、新聞人等の出身者が多く左翼的色彩が強いことである。

次に議會は議員百五十より成り、大部分はクロアチア人で、モンテネグロ人が之に次ぎ、セルビア人、スロヴエニア人、マセドニア人等は少數である。議長はイワン・リパールが兼任し、副議長には各々五民族より代表を選出し、南スラブ五州より成る聯邦國家の形態を採用する意圖のやうである。

ソ聯は、十二月十四日、同假政府樹立に關し、

「ユーゴに於て同政府の樹立せられた事は英米に於いても同情を以て迎へられたが、蘇聯政府も亦これを以てユーゴ國民のドイツに對する鬭争の成功を結果する事實であると看做すものであり、同政府樹立は又同國の新指導者が全ユーゴ國民の團結を成し遂げた事を實證するものである。

情報によれば、ミハイロヴィツチ將軍の一派の活動

は今日迄ユーゴ國民の占領者ドイツに對する鬭争を何等援助せず寧ろ有害な存在であつた。此の故にソ聯邦政府は右に對し否定的態度を執らざるを得ない。ソ聯政府は同假政權樹立に關し更に詳細な情報入手する必要を認め、ユーゴに對し軍事使節を派遣する事に決した」

と發表しミハイロヴィツチを否認し、同假政府に對する全面的支持を與へる方針を示唆したが、未だ正式承認を爲した模様はない。そして、英國の態度は上述の如くであり、米國また國務長官ハルが九日武器貸與法をテト政府に適用し且英國と同歩調をとる旨言明し、共にソ聯に追従する態度を示した。



他方、ドイツは、米英ソと異つて、バルカンに對し何等の政治的野心も示さず、クロアチア、セルビア、アルバニア等の自主獨立を尊重し、バルカンをして歐洲廣域

國の健全な一部として成長させようとしてゐる。

元來舊ユーゴスラヴィア國は、第一次世界大戰の結果、クロアチア族、セルブ族及びスロヴエニア族の三民族が中心となつて形成されたが、英國はセルブ族即ち舊セルビア王國に指導權を與へて援助し、文化的宗教的に獨伊の影響の濃いクロアチア族を壓迫してきた。これに對しクロアチア族は、オーストリア・ハンガリー帝國時代に自治を許されてゐた歴史もあり、斷じてセルブ族に屈從せず、昭和十四年八月遂に同族居住の地方において外交、國防、交通等を除く自治權を獲得した。

その後、今次大戰勃發し、昭和十六年三月二十七日、舊ユーゴスラヴィアが國王ピーター二世の下にシモヴィツチ反獨内閣を組織し、これに對しドイツが四月六日斷乎電撃的進駐を行ひ、同日クロアチア首府ザグレブがドイツ軍の手に落ちるや、同日グヴァテルニク將軍がクロアチアの獨立を宣言した。そしてイタリアに亡命中で

あつたウスタチア (Ustasch) とクロアチア獨立のため十餘年間鬭争しつゞけた國家主義團體の首領アンテ・パヴェリツチ Ante Pavelich が歸國し、クロアチア國家主席となり、クヴァテニク將軍は國家副主席兼陸海軍最高指揮官となつた。次いで同年五月十八日、イタリア國王エマヌエーレ三世が同王家のスボレット公をクロアチア國王に指名したが遂に即位するに至らず、パヴェリツチ主席はボグラフンク Bogaric (指導者の意) 即ち國家元首として終始國政に當り、昨秋バドリオ政權の降伏に際しては九月九日ダルマチア併合の宿望を達成し、ドイツと同生共死の意氣込みを以てバルカンの秩序維持に獻身の努力を捧げてゐる。

尙、パヴェリツチ國家主席は、從來首相を兼攝してゐたが、昨年九月ニコラ・マンデイツチ博士を首相に任命し、次いで識見才能兼ね備はつた獨立運動の功勞者ホンチエ・ボンベリツク駐勃公使を外相に起用して政治力を

強化するとともに、クロアチア軍にウスタシア黨警察隊の装備を改善して、ドイツ軍のチトー政権その他に對する肅清工作に力強く協力してゐる。

他方、ドイツは、セルビアにおいてはネディッチ政府の育成につとめ、又、アルバニアにおいては、去る十月二十六日チラナに成立した攝政委員會を支持して十二月二十九日アルバニアの獨立を正式に宣言させた。

そして、十二月三十日附「ミュンヒナー・ナハリヒテン紙」は、アルバニアの獨立を祝福して、

「アルバニアの獨立は歐洲民族の解放を旨とするドイツの外交政策を反映するものであつて、小國を喰物

にし、自己の利益のためには弊履の如く捨てて顧みない米英の正體が完全に暴露された今日、特に意義深いものがあらう。」

と述べたが、これは正にユーゴーリ亡命政権に對する米英最近の政治的態度の最も痛いところをついたものと云へよう。

かくして、チトー假政府を繞る反樞軸側の暗躍妄動にも拘らずバルカンには對獨協力の基礎に立つ新秩序が建設されようとし、米英側の宣傳するバルカン上陸作戦は時とともに却つて困難にならうとしてゐるのである。

一九四三年度米國主要軍需生産一覽表

一月	戦費飛行機	船	鋼	雜	備考
六十二億五千四百萬弗	約五千機	百六隻	七百四十二萬噸	一、千封度或はその以上の大型爆彈七萬箇以上	一、一九四三年度の國庫収入は三百四十五億一千六百萬弗で支
(戰時生産局發)	(戰時生産局發)	百萬噸餘	(鐵鋼協會發表)		

四月	三月	二月	
七十二億九千萬弗 (戰時生産局發表)	七十一億一千二百萬弗 (戰時生産局發表)	六十億八千九百萬弗 (戰時生産局發表)	(戰時生産局發表)
約六千機 (戰時生産局發表)	六千二百機 (戰時生産局發表)	五千五百機 (戰時生産局發表)	表 (六五パーセントは軍用機)
百五十七隻 百六十萬六千六 (海軍委員會發表)	百四十六隻 百五十一萬六千 (海軍委員會發表)	百三十三隻 百二十三萬九千 二百噸 リナイ型 油槽船 八十一隻 特殊船 九隻 コンクリート船 九隻 沿岸貨物船 十五隻 その他 十五隻 (海軍委員會發表)	表 (海軍委員會發表)
七百三十七萬四千五百噸 (鐵鋼協會發表)	八百六十七萬八千噸 (鐵鋼協會發表)	六百八十二萬六千噸 (鐵鋼協會發表)	鋼板 百三十三萬五千噸 (戰時生産局發表)
第四週一日平均 四百二十三萬七千 千パレル 燃料生産高 無煙炭生産高 第四週百三十六	原油生産高 第四週一日平均 四百二十三萬七千 千パレル 燃料生産高 無煙炭生産高 第四週百三十六	高射砲二千門 各種砲彈四十一萬九千發 小銃及機關銃 彈藥(直徑三〇、四五、五〇)十二萬四千五百箇 (パタソン陸軍大官發表)	次官發表
出は約八百八十億弗 その内戰費は八百二十億弗に上つた (十一月三十日財務省發表)	一、一九四三年度中にリベリタリ爆撃機用發動機二萬四千六百二十六基が陸軍に納入された (十一月三十一日陸軍省發表)	一、開戦以來九月三十日に至る間に飛行機十一萬機を製造し、近く五分間に平均一機宛を生産する域に達する (十月二十三日戰時生産局長ウイソン發表)	一、一月一日より十一月末に至る期間の船隻建造數 自由型貨物船 五三 油槽船 三三 非常用油槽船 三 貨物船 三 沿岸貨物船 三 沿洋貨物船 三 遠洋貨物船 三 陸軍型貨物船 三 コンクリート船 三

九月	八月	
七十二億一千二百萬弗 (戰時生産局發表)	七十五億二千九百萬弗 (戰時生産局發表)	
七千五百九十八機 (戰時生産局發表)	七千六百十二機 (戰時生産局發表)	
特別型 大洋航行船五 噸石積載船三 百六十七隻 (註)右合計百 四十五隻であ り百五十八隻 と一致しない (海軍委員會發 表)	特別型 大洋航行船五 噸石積載船三 百六十九隻 (註)右合計百 四十五隻であ り百五十八隻 と一致しない (海軍委員會發 表)	
七百四十八萬八 千九百七十八噸 (鐵鋼協會發表)	七百五十六萬二 千二百二十五噸 (鐵鋼協會發表)	
三億六千五百萬 噸(鐵鋼協會發 表)	三億六千五百萬 噸(鐵鋼協會發 表)	
人造ゴム生産高 三萬噸 セメント生産高 一千三百三十萬 噸 原油生産高 一億四千四百三 十四萬七千三百 噸(鐵鋼協會發 表)	人造ゴム生産高 三萬噸 セメント生産高 一千三百三十萬 噸 原油生産高 一億四千四百三 十四萬七千三百 噸(鐵鋼協會發 表)	
カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇	カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇	

七月	六月	五月
六十七億四千六 百萬弗 (戰時生産局發 表)	七十六億八千八 百萬弗 (戰時生産局發 表)	七十三億七千三 百萬弗 (戰時生産局發 表)
七千三百七十三 機 (戰時生産局發 表)	七千機 (戰時生産局發 表)	七千二百機 (戰時生産局發 表)
特別型 大洋航行船五 噸石積載船三 百六十七隻 (註)右合計百 四十五隻であ り百五十八隻 と一致しない (海軍委員會發 表)	特別型 大洋航行船五 噸石積載船三 百六十八隻 (註)右合計百 四十五隻であ り百五十八隻 と一致しない (海軍委員會發 表)	特別型 大洋航行船五 噸石積載船三 百六十八隻 (註)右合計百 四十五隻であ り百五十八隻 と一致しない (海軍委員會發 表)
七百三十七萬六 千七百七噸 (鐵鋼協會發表)	七百二十二萬七千 噸 (鐵鋼協會發表)	七百五十四萬五 千三百七十九噸 (鐵鋼協會發表)
三億六千五百萬 噸(鐵鋼協會發 表)	三億六千五百萬 噸(鐵鋼協會發 表)	三億六千五百萬 噸(鐵鋼協會發 表)
人造ゴム生産高 三萬噸 セメント生産高 一千三百三十萬 噸 原油生産高 一億四千四百三 十四萬七千三百 噸(鐵鋼協會發 表)	人造ゴム生産高 三萬噸 セメント生産高 一千三百三十萬 噸 原油生産高 一億四千四百三 十四萬七千三百 噸(鐵鋼協會發 表)	人造ゴム生産高 三萬噸 セメント生産高 一千三百三十萬 噸 原油生産高 一億四千四百三 十四萬七千三百 噸(鐵鋼協會發 表)
カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇	カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇	カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇 カニ 三〇〇〇〇〇 イシイ 三〇〇〇〇〇 ウツク 三〇〇〇〇〇 エビ 三〇〇〇〇〇

のであつた。

しかるに、マックアーサーは、十二月二十六日に至るや、執拗にも再び自ら采配を振つて、クルーガー麾下の米第六軍をニューブリテン島グロスター岬の東西兩岸に上陸させた。そしてこの上陸作戦の先鋒をつとめたのは海軍少将ウイリアム・ルバースを指揮官とするガダルカナル島歴戦の海兵隊であつたと傳へられてゐる。

かくして敵はラバウルと地続きのニューブリテン島上に前進基地(グロスター岬よりラバウルまでは二百六十餘哩にすぎない)を獲得したのであるが、しかも従來の敵側戦法から推斷するに、地上進撃によつて直ちにラバウルに肉迫してくる公算は極めて少く、むしろこれらの要點を確保して飛行場を設営したのち、先づラバウルの我が航空基地に對し、飛行機の數的優勢をたのみとする航空決戦を挑んでくるものと觀測される。

蓋し、晝なほ暗い密林内の死闘就中夜戦は敵の最も恐怖するところであり、従つて敵は海上或は海岸傳ひに公然前進しても餘り危険を感じないですむやうになるまでは行動を慎むのが常であるから、ニューブリテン島における作戦も、敵がラバウルの我が航空兵力を殲滅しつゝしたと自ら信じ得るまでは、即ち絶對的な制空權をすでに獲得し頭上を青空の下に露出して前進してももう大丈夫といふ確信を得るまでは、ラバウルへの直接進撃を回避することであらう。

従つて、ラバウルへの地上進撃に先立つて先づラバウルの航空基地として機能の根絶すべく、敵側がその南太平洋方面全航空兵力を擧げて航空決戦を挑み來たるべきことは疑ひの餘地がなく、惹いては、今次大東亞戰爭開始以來最大の日米航空決戦がラバウルにおいて戦はれるべきことは、必至となつたのである。

現に、米第六軍のニューブリテン島上陸以來、凄絶な航空攻防戦が連日ラバウルの上空にくりひろげられてゐるのであるが、その間數において遙に劣勢な我が航空部隊の不眠不休の勇戦敢闘が、いかに輝やかしい戦果をあげてゐるかは、左表を見れば一目瞭然たるものがあると思はれる。

日期	來襲機數	擊墜數	我損害
十二月十七日	四〇	一八	二
十二月十九日	八四	八	二
十二月二十日	約一五〇	〇	〇
十二月二十三日	七五	二四	六
十二月二十四日	一三五	五八	六
十二月二十五日	七〇	二〇	三
十二月二十七日	五〇	二三	六
十二月二十八日	五〇	三一	三
來襲回数	七五九	一八二	二八

しかも、純忠無比、勇武鬼神の如き我が將兵にして、餘りに劣勢の機數を以て日夜苦闘をつゞける中に

は、漸次その損害を累増するに至るであらうことは豫想に難くない。かくして、一機でも早く、一機でも多く、新鋭機をこの空の決戦場に送ることが銃後一億の國民にとつて命がけの義務となつたのであり、飛行機増産の成否こそ今後の戦局の歸趨を決定するものと稱しても過言ではないのである。

(二) 支那大陸戦線

洞庭湖西方重慶軍第六戦區掃蕩作戦を遂行中であつた我が陸軍部隊は十一月二十六日敵の本據常德城内に突入、引続き殘敵の掃蕩を行つて、十二月三日十一時遂にこれを完全占領するに至つた。次いで十二月二十四日常德周邊の重慶軍の殘存兵力の撃碎を完了し、翌二十五日原態勢に復歸したのである。約二ヶ月に亙る本作戦の重大なる意義として考へられるべきものには、
(イ) 敵中央直系軍の戦力に大打撃を與へたこと
(ロ) 敵がビルマ總反攻を呼號し兵力轉用中の虚を衝い

てその反攻計畫を重大な危機に陥れたこと

の二つがある。即ち重慶は米英側の要求に従ひ第六戦區司令官陳誠を遠征軍司令官として雲南に送りビルマ方面の第六戦區は今次の三萬二千七百有餘の犠牲を出す外火砲一五八門其他大損害を蒙つたのである。尙陸軍航空部隊は我が本土を靴々として窺ふ在支米空軍に對し連日の如く昆明、衡陽、零陵、梧州等敵重要基地に進攻し、敵機を撃墜するとともに敵飛行場の粉碎に努め大打撃を與へた。在支米第十四航空部隊司令官シエンノートは重慶空軍を合併米支混成空軍を編成し、表面的には統合指揮權を掌握した觀を示したが、兩空軍の内紛は依然絶へないと傳へられる。

尙、シエンノートは自ら統率する第十四航空部隊を戦術航空部隊と、重爆部隊とに分轄し、重爆部隊を以て將來日本本土に對し作戰を起す場合の中核的航空部隊とな

す方針であると云はれてゐる。

(三) 印緬戦線

十一月上旬から始められた怒江作戰は赫々たる戦果を收め重慶第一戦區に致命的大打撃を與へたので、皇軍は次期作戰への準備のため態勢整理を行つた。従つて十二月中は大規模な地上作戰は見られなかつた。然し乍ら航空戦線に於ては我が陸軍航空部隊、或は陸海軍兩航空部隊の進攻作戰は特筆すべき戦果をあげた。

即ち十二月五日、陸海航空部隊のカルカッタへの協同作戰に於ては輸送船五隻、撃破竝に敵機撃墜十二機といふ戦果をあげた。これに對しインド軍當局は翌六日簡單な公報を發表した以外、極力損害を隠蔽したが、十二月八日附ステーツマン紙は、空爆犠牲者五百名の中三分の一以上が死亡したと報じ、敵側損害のいかに大きかつたかを示唆した。他方東南アジア反輻軸軍總司令官マウントバッテンは、十二月十九日、緬支國境方面三日間の視

察を終へた後將兵に對し次の如く豪語激勵した。

「我々に必要な資源はやがて到着するであらうが、その時こそ日本は困難な場面に直面するであらう。イタリアを打倒した反輻軸軍は目下ドイツに全戦力を集中してゐるが、ドイツを撃破した後には老大な全資源が日本に集中されるべく、戦争は日本が和平を求めると迄は終らないであらう。日本を粉碎しない限り恒久的平和は望み得ない。我々は日本が占領地を開発し戦力を増強するのを妨害する爲めに日本との戦闘をあく迄繼續しなければならぬ。」

(四) 歐洲東部戦線

赤軍は十一月五日の夏季作戰綜合戦果發表と相前後して一先づ大規模作戰行動を打ち切り、その後戦力の再編成につとめてゐるが、十二月十四日、突如バグラミアン軍大將麾下の新編バルト戦線軍がモスクワ市西方正面ネヴェリ地區に新攻撃を開始し、バルト三國方面に指向せん

とする態勢を示し、次いで同二十四日、キエフ西方地區においてヴァツチン大將麾下の第一ウクライナ戦線軍が所謂クリスマス大攻勢を開始し、三十日コロステン、三十一日、ジトミールを抜き、舊ポーランド國境に對して肉迫する態勢を示した。

かくして、今次冬期反攻における赤軍の攻撃重點としては第一ネヴェリ、ヴァイテプスク戦區、第二ジトミール、コロステン戦區、第三ニコポリ、ドニエプルペトロフスクの三方面にあり、就中戦闘の重點は第二戦區に集中されてゐるものとみられる。即ち、この第二戦區における赤軍の突出部は、漸次ドニエプル大灣曲部の獨マンシュタイン軍背後の兵站線を脅威するに至る可能性があり、獨ソ何れもここに攻防の主力を注ぐことが豫想されるのである。

かくの如く、ソ聯は、テヘラン會談後最初の風評通り、十二月二十四日を期して、全面的大攻勢に轉じたの



であるが、米英側は、同二十四日にアイゼンハワー總司令官以下歐洲進攻反樞軸軍首脳部の陣容を發表したのみで、赤軍のクリスマス攻勢に呼應して行動を起しさうな氣配はみえない。従つてこの赤軍冬期攻勢がソ聯獨自の立場に基くか、或は又米英側の第二戦線と呼應するものか未だ不明であるが、獨軍當局はこれによつて赤軍の冬期攻勢が本格的に開始されたものと判斷してゐるもの如くである。

(五) 歐洲南部戦線

イタリア本土はいまや苛烈な戦場と化し、ファシスト共和國治下の北伊及び中伊と米英軍占領地帯の南伊とに二分されたが、イタリア北部、中部一帯はムッソリーニ統帥以下ファシスト共和政府の眞鍮な努力と軍規嚴正なドイツ軍の治安維持とによつて順調に再建の路を辿つてゐるのに反し、米英軍の占領下にあるイタリア南部は、米英軍が多数入りこみ、就中米軍の如きは一弗百リラの率

で軍票を流通させてゐるので諸物資就中食糧難が極めて深刻であり、住民は今更の如く米英軍占領下の事態に幻滅を感じてゐるといはれる。かうした状況下にあつて十月中旬の戦況は全く停顿状態に陥り、反樞軸側の呼號するローマ進撃は到る處に於て獨軍防禦線の頑強な反撃によつて阻止された。即ち、ニュージールランド第二師團、カナダ第一師團、インド第八師團等を包含する英第八軍は十一月末より十二月初めにかけて有力な部隊を東部サングロ河に注入したが、イタリア上陸以來最大の血戦と云はれる本戦團に於て、獨軍の反撃は完全に敵軍の企圖を挫折せしめるのに成功した。他方、西部地區並に中部山岳地帯を擔當するクラーク中將麾下米第五軍もローマに向つて間斷なく北進を企圖したが、頑強な獨軍の堅陣は敵に一個の突破口をも與へなかつた。尚、同戦線における米軍將兵は、士氣低調、訓練も精到を缺き、英軍將兵に比し遙に見劣りがすると傳へられ

てゐるが、何れにしても二十數個師に達すると推定される米英の大軍が兵力において遙に劣勢なドイツ軍の前に足踏みをつづけてゐることは、米英朝野をして漸く焦慮に堪へざらしめてゐるもの如くである。

(六) 其の他

英空軍のベルリン爆撃は十一月二十二日以来漸次活潑化し、十二月末日迄に九回に及んでゐる。

來襲機數は三百機乃至四百機のこと最も多く、テロ爆撃の悪辣性を愈々發揮し、月のない夜、殊に雲又は霧の深い天候を利用する傾向が著しく、宵の七時乃至八時或は未明の三時又は四時頃に行はれるのが普通である。

これは英本土における出發及び歸着を目没前又は夜明け後にする關係からきたものと思はれるが、このやうに夜間悪天候を選んで大編隊の爆撃を實施し得るやうになつたのは、敵側無線通信技術の發達を示すものとして注目される。

しかし、ベルリン市の被害がハンブルグ市のそれに比し段違ひに輕微なことは、ベルリン市の人家が元來密集してゐないばかりでなく、八月以來人口疎開が實施されたこと、及びドイツ側防衛措置の進歩就中夜間戦闘機の改良増加により敵側來襲機はベルリン市に近づくまでに驅け散らされ、完全な集中爆撃を行ひ得なくなつたこと等によるものと認められる。

他方、米英空軍は、ブルガリア首都ソフィアに對しても威嚇爆撃を強化し、十二月十日には約百機を以て工場地帯に、又十二月二十五日には百數十機(百五十機とみる説もある)を以て南方住宅地域等に爆撃を加へたが、ブルガリア空軍はこれを邀撃して、十日には敵機四機を撃墜し、自らは一機を失ひ、二十三日には七機を撃墜し、自らは二機を失つた。

しかも二十三日の空中戦においてはスプロヴエスキ大尉外一名のブルガリア空軍勇士が決然米機に對し體當

りを敢行、古來尙武の譽高いブルガリア民族の眞面目を發揮するとともに、同國民の士氣を愈々奮ひ立たせた。

であつた。

十二月中の世界政治日誌

日	樞軸側	反樞軸側	其他
十二月一日	<p>(日) 井口情報局第三部長、米海軍の推定損害を發表、死傷隠蔽を摘發(於記者團會見)</p> <p>(獨) 通商破壞戰艦、二十七隻、二十三隻、二百噸、擊沈、二十七隻、十七隻、六千噸、大破</p> <p>(日) 井口情報局第三部長、病院船高砂丸、ほか三隻に對する米英側の不法攻撃に關し、スイス、スペイン、兩國政府を通過し、嚴重抗議をなした旨發表(於記者團會見)</p> <p>(自由インド) ポリス首班、在アイル「緑色戦線」の同精決議に祝電に對し、謝意表明(於記者團會見)</p> <p>同じくアイル首相デヴァレラ博士の祝意表明に對し、謝電送付</p> <p>(獨) ソフイア滞在中のフォン・パーベン駐土大使、ブルガリヤ外相を訪問</p>	<p>米英蘇テヘラン會談公報終了</p> <p>米英燃料相ロイド、ジョージ、石炭生産が昨年比、週二十萬噸減、罷業による喪失五十萬噸と發表</p> <p>(佛) 反ファシスト委員會議設置を決定</p> <p>(英) 労働黨議員、モズレー事件に關し、政府不信任案上提、三七三票對六三票で否決</p>	<p>(西) カルセレル商工相、インフレ抑制防止のため輸出制限にパリ協定の採用を發表</p> <p>(西) ホルダ外相、イベルリヤブロッツクの結束を讃歌、サラザール葡首相に對し、謝電送付</p> <p>(聯) 常備完全占領</p>
二日	<p>(日) 來栖大使「戦争の眞因を歪曲せる米國の白書」と題し、「平和と戦争」及び「關保公文書集の欺瞞性を剔抉」(於大政翼賛會)</p> <p>(勃) シンヌマン外相、樞軸國並に中立國との提携を強調(於議會)</p>	<p>(米) 海軍長官ノックス、タラワ島上陸作戦の兵力損害に關し、上陸決行前に三千噸の砲彈を注入したと辯解</p> <p>(米) 海軍長官ノックス、十一月中の海軍擴充状況發表、竣工二十五萬噸、内各種空母十二隻</p> <p>(英) マウンテンバットン、カイロ會談を終へ、ニューデリー歸着</p> <p>(佛) フランス國民解放委員會、カイロ會談の決定に拘束されざる旨聲明</p> <p>伊太利諸國委員會第二回會議南伊ブリンギツシに開催</p> <p>(エジプト) 駐ソ公使任命、駐土公使アブトニアエレマン、ナキエアスが兼任</p> <p>米英土カイロ會談開始、ルーズヴェルト、チャーチル、イノエ、三大統領並に、グイノグラドフ、蘇大使等出席</p> <p>(ソ) 聯タス通信社、ヘラン會談内容に關し、米英に先手を打つて發表</p> <p>(ユーゴ) ユーゴスラヴィア假政府、獨立、共產主義者、チトー、國防委員長に就任</p> <p>(ポリヂイア) 大統領エンリケ・ペニャラソ、日本及獨逸に對し、宣戰布告</p> <p>(米) 平和と戦争に對し、第二卷發行</p> <p>(米) 徵集兵隊投票に關するルーカス案を否決、マクラレン案を可決、下院に同附</p> <p>(米) エヴェレット・デイルクセン、(イリノイ) 選出共和黨下院議員、大統領選挙戦に立候補</p> <p>(米) 歐洲諸國委員會米代表に駐英大使ジョン・ウイナントを任命(駐英大使如故)</p> <p>(佛) コルシカ島行政權獲得</p>	<p>(米) 海軍長官ノックス、タラワ島上陸作戦の兵力損害に關し、上陸決行前に三千噸の砲彈を注入したと辯解</p> <p>(米) 海軍長官ノックス、十一月中の海軍擴充状況發表、竣工二十五萬噸、内各種空母十二隻</p> <p>(英) マウンテンバットン、カイロ會談を終へ、ニューデリー歸着</p> <p>(佛) フランス國民解放委員會、カイロ會談の決定に拘束されざる旨聲明</p> <p>伊太利諸國委員會第二回會議南伊ブリンギツシに開催</p> <p>(エジプト) 駐ソ公使任命、駐土公使アブトニアエレマン、ナキエアスが兼任</p> <p>米英土カイロ會談開始、ルーズヴェルト、チャーチル、イノエ、三大統領並に、グイノグラドフ、蘇大使等出席</p> <p>(ソ) 聯タス通信社、ヘラン會談内容に關し、米英に先手を打つて發表</p> <p>(ユーゴ) ユーゴスラヴィア假政府、獨立、共產主義者、チトー、國防委員長に就任</p> <p>(ポリヂイア) 大統領エンリケ・ペニャラソ、日本及獨逸に對し、宣戰布告</p> <p>(米) 平和と戦争に對し、第二卷發行</p> <p>(米) 徵集兵隊投票に關するルーカス案を否決、マクラレン案を可決、下院に同附</p> <p>(米) エヴェレット・デイルクセン、(イリノイ) 選出共和黨下院議員、大統領選挙戦に立候補</p> <p>(米) 歐洲諸國委員會米代表に駐英大使ジョン・ウイナントを任命(駐英大使如故)</p> <p>(佛) コルシカ島行政權獲得</p>
三日	<p>(日) 國民登録適用範圍を滿四十五歳迄引上げ</p>	<p>(英) 下院、米國のカイロ會談にニューズweekの責任を追求</p> <p>(米) ルーゾヴェルト、チャーチル、カイロ到着</p> <p>(ソ) 聯スターリン議長、モスクワ歸還</p> <p>(英) 労働相ベヴァン、炭坑夫徵用案を發表</p> <p>(重慶) 蔣介石、カイロより重慶歸着</p>	<p>(西) カルセレル商工相、インフレ抑制防止のため輸出制限にパリ協定の採用を發表</p> <p>(西) ホルダ外相、イベルリヤブロッツクの結束を讃歌、サラザール葡首相に對し、謝電送付</p> <p>(聯) 常備完全占領</p>

日	樞軸側	反樞軸側	其他
四日	<p>(獨) オスロ、大學生逮捕事件に關する公報發表、スエーデンの抗議を一蹴</p> <p>(獨) デイトリツヒ新聞長官、敵側流布の和平案、戦後策等の諜略的性質を剔抉(於新聞記者會見)</p> <p>(芬) フインランド、豫備將校團、ワルテン國防相臨席の下に大會開催、抗戰決意を表明</p>	<p>(米) 海軍長官ノックス、タラワ島上陸作戦の兵力損害に關し、上陸決行前に三千噸の砲彈を注入したと辯解</p> <p>(米) 海軍長官ノックス、十一月中の海軍擴充状況發表、竣工二十五萬噸、内各種空母十二隻</p> <p>(英) マウンテンバットン、カイロ會談を終へ、ニューデリー歸着</p> <p>(佛) フランス國民解放委員會、カイロ會談の決定に拘束されざる旨聲明</p> <p>伊太利諸國委員會第二回會議南伊ブリンギツシに開催</p> <p>(エジプト) 駐ソ公使任命、駐土公使アブトニアエレマン、ナキエアスが兼任</p> <p>米英土カイロ會談開始、ルーズヴェルト、チャーチル、イノエ、三大統領並に、グイノグラドフ、蘇大使等出席</p> <p>(ソ) 聯タス通信社、ヘラン會談内容に關し、米英に先手を打つて發表</p> <p>(ユーゴ) ユーゴスラヴィア假政府、獨立、共產主義者、チトー、國防委員長に就任</p> <p>(ポリヂイア) 大統領エンリケ・ペニャラソ、日本及獨逸に對し、宣戰布告</p> <p>(米) 平和と戦争に對し、第二卷發行</p> <p>(米) 徵集兵隊投票に關するルーカス案を否決、マクラレン案を可決、下院に同附</p> <p>(米) エヴェレット・デイルクセン、(イリノイ) 選出共和黨下院議員、大統領選挙戦に立候補</p> <p>(米) 歐洲諸國委員會米代表に駐英大使ジョン・ウイナントを任命(駐英大使如故)</p> <p>(佛) コルシカ島行政權獲得</p>	<p>(西) カルセレル商工相、インフレ抑制防止のため輸出制限にパリ協定の採用を發表</p> <p>(西) ホルダ外相、イベルリヤブロッツクの結束を讃歌、サラザール葡首相に對し、謝電送付</p> <p>(聯) 常備完全占領</p>

五日	(日)近隣外方山嶽司令部 司令官、中國沿岸の封鎖繼續を宣言 (英)リットン大統領獨立二十六周年に當り 戰爭繼續の決意を表明
六日	(獨)フォン・パーベン駐士大使アンカラ 歸任、サラジヨグル士首相と會見 (日)畑支那派遣軍總司令官談話發表
七日	(日)東條首相大東亞戰爭二周年記念放送 演説、總額百五十萬圓に與へた損害 (マライ)マライ義勇軍及び義勇隊の創設 發表 (スマトラ)原住民政政制度確立、スマトラ三十參議會發足 (セレス)原住民政政法公布 (日)支那派遣軍當局現下の戰局に關し談話發表 (日)井口情報局第三部長、カイロ會談に關し談話發表 (伊)共和ファシスト黨黨員五十萬に達す
八日	(米)上院比島獨立附與時期線上法案を可決 (米)上院鐵道非乘務從業員に對する時間給八仙引上げを承認する旨の決議案を可決 (米)下院農業委員會食糧統制權限を物價
九日	(獨)獨逸軍ケルチ南 方の赤軍橋頭堡を 潰滅 (土)イノニエー大統領、カイロより歸 領、人民共和黨特 別會議を開催

十日	(日)昭和十九年度一般會計歳入歳出概算 發表、總額百五十二億四千三百萬圓 (自由インド)ボリス首班ジャカルタに飛 來 (獨)國防軍當局、ロメル元帥のデンマー ク駐屯軍及びジエツトランド要塞視閲 を發表
十一日	日獨伊軍事同盟二周年記念に當り重光、 リットン首相兼外相決定放送、ムツ ソリーニ首相兼外相決定放送の増徴を決 定公布 (伊)共和ファシスト政府、共同戰線繼續 の決意を宣言 (獨)ライン駐伊大使、ムツソリーニ統 帥に信任狀捧呈
十二日	(日)在上海イタリヤ人及びイタリヤ人財 産を解放 (米)反極端救濟復興東亞補給委員會開催 (於ワシントン) (米)下院海軍土木關係豫算二億三千五百 萬弗可決、上院に回附 (英)外相アサヒ、ロンドン歸任 (南阿)首相スマツツ、ブントリア歸任 (ブラジル)大統領モリニゴ、アルゼン チン訪問 (亡命)チェッコ大統領ベネツシユ、盛大 な出迎を受けてモスクワ着(二十三日 退去) (ソ聯)ソ聯邦、亡命チェッコ政權間相互 援助同盟條約締結(十四日發表) (米)國務長官ハル、フルカリア、ルーマ ニア、ハンガリー等に對する恫喝聲明 發表

ラ記者會見、

(土)國民議會開會、
サラジヨグル首相
演説

二十日	<p>(日)大本營マキン、タラワ兩島守備海軍陸隊十一月二十五日王碎と發表 (日)フエノスアイレス丸不法撃沈に關し米國に嚴重抗議せる旨發表 (マライ)マライ全土に勳勞奉仕隊を結成</p>	<p>(米)スターク歐洲水域米國艦隊司令長官軍務局より發表 (米)戰時生産局長官下ナルド・ネルソン一九四四年度印刷紙割當百二十五萬</p>	<p>(西)フアラシ(黨とスベイン軍とを統合)スベイン民軍解散 (歐)獨逸ドニエブル</p>
十九日	<p>(伊)憲法議會召集を戰闘参加後迄延期</p>	<p>(米)ルーズヴェルト、鐵道會社代表並に鐵道友愛會々長等を招致、會議開催に鐵道運輸相レザース軍需品輸送の爲と聲明 (英)在印米英空軍を統合、東南アジア反糧輸空軍司令官を任命、英中將リチャード・ベイヤスを司令官に任命</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十八日	<p>(日)軍需會社徵用規則公布、即日實施 (日)軍需會社法實施(昭和十九年一月一日より實施) (比)炭田法案上程、總額一億一千七百萬ベソ</p>	<p>(米)現行食料助成金政策を一九四四年二月十七日迄續行を許可する法案を通過(上下兩院委員合同會議) (米)上院日米米人一部法連法案上程 (米)補助艦艇建造法案成立(五十五億七千萬弗) (米)ルーズヴェルト、公報漏洩事件に關し今後の發表方針を指示 (米)感傷による死者、週四日—十一日、千四百四十八名と發表</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十七日	<p>(日)軍需會社徵用規則公布、即日實施 (日)軍需會社法實施(昭和十九年一月一日より實施) (比)炭田法案上程、總額一億一千七百萬ベソ</p>	<p>(米)ルーズヴェルト、公報漏洩事件に關し今後の發表方針を指示 (米)感傷による死者、週四日—十一日、千四百四十八名と發表</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十六日	<p>(日)軍需會社法施行令及び施行規則公布(十七日實施) (自由インド)佛國パリーに自由インド假政府支部を開設 (佛印)聯邦會議再開、ドク、總督府政演</p>	<p>(米)ルーズヴェルト、アノルド、ソマ、ヒューエル等ワシントン論議、ソマ再びハル國務長官を攻撃 (米)チャーチル肺病により臥床中の旨正</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>

十六日	<p>(日)軍需會社法施行令及び施行規則公布(十七日實施) (自由インド)佛國パリーに自由インド假政府支部を開設 (佛印)聯邦會議再開、ドク、總督府政演</p>	<p>(米)ルーズヴェルト、アノルド、ソマ、ヒューエル等ワシントン論議、ソマ再びハル國務長官を攻撃 (米)チャーチル肺病により臥床中の旨正</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十五日	<p>(日)クロアチア首都ザグレブに帝國外交代表事務所を開設</p>	<p>(米)鐵道乘務員五友愛會、十二月三十一日を期し總罷業決行と發表 (ソ)聯モロトフ外務人民委員、ベネツシ歐洲諸國委員第一回會議開催(英ウイリナム、ソ、フランス、米、ジョン・ウイナ、表出席)和議上の問題を討議 (イ)タリヤ諸國委員、第三回會議開催(於アルジェー)</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十四日	<p>(芬)一九四三年度分對米戰債二十四萬弗支辨 (自由インド)ボリス首相、ジャワ、ボルネオ、スマトラ訪問より歸還</p>	<p>(米)デアマット在豪港スベイン領事ツラレック日本人收容所觀察の爲現地に到着 (英)外相イーデン、下院に於てカイロ、テヘラン、第二次カイロ三會議の經過並にテクト、政權問題に關し報告 (芬)勞働大會開催、前後協力に要する決議案採擇 (ソ)聯モロトフ政權に對し軍使節團派遣を決定 (イ)ランソ、ヘイリ内閣總辭職(十五日再組閣)</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十三日	<p>(ジャワ)ジャワ在住華僑の移住並に旅行の許可撤廢決定(十五日より實施) (獨)フオン・パーベン駐土大使、メネメン、ジョグジャカルト外相と會談</p>	<p>(米)鐵道乘務員五友愛會、十二月三十一日を期し總罷業決行と發表 (ソ)聯モロトフ外務人民委員、ベネツシ歐洲諸國委員第一回會議開催(英ウイリナム、ソ、フランス、米、ジョン・ウイナ、表出席)和議上の問題を討議 (イ)タリヤ諸國委員、第三回會議開催(於アルジェー)</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十三日	<p>(米)北部英礦務協定成立 (英)工業用石炭一割の削減決定並に實施 (伯)參謀本部代表マスカレニヤス等一行、北阿反糧輸軍司令部に到着</p>	<p>(米)鐵道乘務員五友愛會、十二月三十一日を期し總罷業決行と發表 (ソ)聯モロトフ外務人民委員、ベネツシ歐洲諸國委員第一回會議開催(英ウイリナム、ソ、フランス、米、ジョン・ウイナ、表出席)和議上の問題を討議 (イ)タリヤ諸國委員、第三回會議開催(於アルジェー)</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十四日	<p>(米)北部英礦務協定成立 (英)工業用石炭一割の削減決定並に實施 (伯)參謀本部代表マスカレニヤス等一行、北阿反糧輸軍司令部に到着</p>	<p>(米)鐵道乘務員五友愛會、十二月三十一日を期し總罷業決行と發表 (ソ)聯モロトフ外務人民委員、ベネツシ歐洲諸國委員第一回會議開催(英ウイリナム、ソ、フランス、米、ジョン・ウイナ、表出席)和議上の問題を討議 (イ)タリヤ諸國委員、第三回會議開催(於アルジェー)</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十五日	<p>(日)軍需會社法施行令及び施行規則公布(十七日實施) (自由インド)佛國パリーに自由インド假政府支部を開設 (佛印)聯邦會議再開、ドク、總督府政演</p>	<p>(米)鐵道乘務員五友愛會、十二月三十一日を期し總罷業決行と發表 (ソ)聯モロトフ外務人民委員、ベネツシ歐洲諸國委員第一回會議開催(英ウイリナム、ソ、フランス、米、ジョン・ウイナ、表出席)和議上の問題を討議 (イ)タリヤ諸國委員、第三回會議開催(於アルジェー)</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>
十六日	<p>(日)軍需會社法施行令及び施行規則公布(十七日實施) (自由インド)佛國パリーに自由インド假政府支部を開設 (佛印)聯邦會議再開、ドク、總督府政演</p>	<p>(米)鐵道乘務員五友愛會、十二月三十一日を期し總罷業決行と發表 (ソ)聯モロトフ外務人民委員、ベネツシ歐洲諸國委員第一回會議開催(英ウイリナム、ソ、フランス、米、ジョン・ウイナ、表出席)和議上の問題を討議 (イ)タリヤ諸國委員、第三回會議開催(於アルジェー)</p>	<p>(英)陸軍大臣ヘンダーソン獨逸鐵道線警察許可方を交渉中と發表(於下院) (重慶)蔣介石、A.P.通信社のクリスマスメッセージを拒絶</p>

二十八日	(日)食糧自給態勢強化對策要綱決定發 表、農業委員の指定、徴用免除、轉職 の許可制等諸措置を決定 (佛)國家主席ベタン元帥、アベツツ獨大 使と會見	(戰)獨軍南部戰線オ ルトーナ撤收
二十九日	(日)井口情報局第三部長「戰時外交一年 の回顧と展望」と題し放送 (アルバニア)攝政府獨立を宣言	(戰)獨軍コロステン 撤收公表
三十日	(佛)内務行政刷新を斷行、内務省内に國 務長官、治安維持總監を新設、警視總 監更迭	(亞)全政黨に解散令 撤收
三十一日		

各國動向

米 國

【軍 事】

「幾多の苦難と犠牲とを覺悟せよ」

——ルーズヴェルト前線將兵に放送——

ルーズヴェルト大統領は、十二月二十四日午後、降誕祭前日に當り、世界各地前線の米軍將兵に對し放送を行ひ、左の如く戦局の前途の多難を説述した。

「余は現在の軍事上の諸問題特に出来るだけ速かに且つあらゆる方向からの樞軸軍に對する攻勢を促進す

る對策について英ソ兩國ならびに重慶代表と協議を遂げた。現在米國だけで武装兵力は一千萬以上に達してゐる。一年前には國外戦線に出征してゐる米軍の兵力は百七十萬に過ぎなかつたが、現在では右數字は二倍以上即ち三百八十萬に達し、一九四四年七月までには更に五百萬に増加するであらう。

過去數ヶ年間にわたり、降誕祭と新年のお祝を述べるに當つても全世界に低迷する暗雲に妨げられて心の底から祝辭を述べることが出来なかつた。今年においても更に幾多の苦難と犠牲と個人的な悲劇とを覺悟しなければならぬ。或はソロモン水域において、或はギルバート諸島において乃至はまたチユニジャ戰

線、イタリア戦線において激戦を経た米軍將兵は近代戦の體驗と知識とにより、一層大きく且つ高價な幾多の戦ひを戦はねばならないことを充分に承知してゐるのである。

今回の會談の結果、主要目標については意見が一致してゐることが保證された。カイロにおいては英國首相チャーチルと余とは蒋介石と會見したその結果、はつきりした戦略を決定出来たばかりでなく東亞に關し討議することが出来た。カイロ會談の後、チャーチルと余とテヘランでスターリン元帥と會見し、政戦兩略に互り飽くまで隔意なき意見を交換した結果三國代表は、ドイツ軍に對し攻勢を開始することに關しあらゆる點で意見が一致した。赤軍は東部戦線において熾烈な攻勢を繼續するであらうし、イタリア本土ならびにアフリカ北部における反樞軸軍は南方からドイツ軍に對し不斷の壓迫を加へ、更に米軍ならびに英軍の大部

隊は他の諸點から攻撃するであらう。

國の大小を問はず各國の權利は合衆國內における個人個人の權利と同様飽くまで尊重擁護されなければならない。強者が弱者を支配するといふ原則には反對である。

しかし、自由に對する各國民の權利は各國がどの程度まで自由のために戦ふ用意があるかによつて測定されなければならない。

學術の進歩により世界は非常に小さくなり、今や過去の地理的尺度を放棄するの止むなきに至つた。一例を挙げれば、米國史の初めに當つては大西洋と太平洋とは合衆國にとつての安全防壁と解されてゐた。

最近に至るまで軍事専門家ですら米國が日本軍の進撃に對し太平洋岸を防衛しなければならぬなどとは夢にも考へなかつたのである。しかるに米國內には依然として玄關の戸締りをしつかりして置きさへすれば

最早戦争はないと考へてゐる期かな徒輩が少くない。米國民は今度の戦争がなか／＼容易でない戦争であることを百も承知してゐなければならぬ苦である。今回の旅行で自ら前戦に立つて樞軸軍と對戦した幾多の軍人と會見したが、これらの現實主義者は樞軸軍の戦力と作戦の妙と智謀湧くが如き事實は口を揃へて強調した。

戦争は今や米軍が戦死戦傷ならびに行方不明の大きな數字を覺悟しなければならぬ段階に到達した。勝利への容易な途は存せず、戦の終局は未だ眼前に展開するに至らない。ワシントンに歸つて僅か一週間に過ぎないが、率直な印象を述べるならば米國民の間に戦争が間もなく片付くとか、既に勝利を収めたのだといふ意向が強いやうに思ふ、恐らく以上の謬つた推論の結果であらうが、派閥的な考へ方と派閥的な論議が横行するに到つた。歐洲と東亞とにわたる來るべき大量

反攻には前線においては勿論、國內における各工場においても米國民ならびに反樞軸國民は最後の一オンスに到るまであらゆる精力と忍耐とを傾注しなければならない。月曜日に大攻勢を注文して土曜日に注文品を受取るといふ譯にはいかない。

「困難はむしろ今後に在り」

——スチムソン陸軍長官警告——

スチムソン陸軍長官は、十二月九日、新聞記者團に對し、世界戦局最近の情勢に關し説明を行つた。要旨は左の通りである。

「開戦後二年を経て米國は今漸く戦争の影響が國家の全機構に最も深刻に響いて來る時期に入らんとしてゐる。あらゆる戦争には緒戦、中期、決戦の三期あり、この中期こそ國民の一番辛い時期で、前線では將兵の損害が莫大に上り、一方國內戦線では戦争の影響が國民生活の上に重くのしかかり、國民の戦意が最も危機

にさらされる時期である。

しかるに米國では前線、銃後を通じ漸くこの中期に歩をふみ入れんとしてゐるのであつて、困難は寧ろ今後にあるといはねばなるまい。最も決定的な試験の時期は前線の將兵にとつても、銃後國民にとつても今後に来ることを覚悟する必要がある。反樞軸軍のうち敵の主力と接觸してゐるのは東部戦線における赤軍のみに過ぎず、その他の戦線ではいづれも敵の前衛線にとりついに過ぎない。」

次いでスチムソン陸軍長官はテヘランにおける米英ソ三國首脳會談の結果に言及し、スターリン首相の理解ある態度によつて「長らくの懸案だつた數個の問題」が解決されたと言明した。

ノックス海軍長官空母増強を語る

ノックス海軍長官は、十二月三日、再び海軍擴充計畫の進捗を誇り次の如く豪語したといはれる。

「米國海軍は十一月中にあらゆる型の空母十二隻を完成した。又海軍用飛行機の生産高も二千機に達し、十一月中の海軍擴充計畫は艦艇建造においても飛行機生産においても新記録を示した。」

尚、ブーゲンビル島並にギルバート諸島方面海空戦により米國空母勢力が甚大な損失を蒙る以前の陣容は左の通りと傳へられる。

大型空母 十一隻

エンタープライズ、レンヂャー、サラトガ、(以下は眞珠灣後就役或は再建の分) エセックス、レキシントン、バンカーヒル、ヨークタウン、イントレピッド、ワスプ、ホーネット、フランクリン

一萬噸巡洋艦より空母に變更したもの 九隻

インデペンデンス、プリンストン、ペローウッド、カウペンス、モンテリー、カボット、ラングレイ、バタン、サンジャシント

商船を改造したもの 十二隻

尚、海軍省は、十二月三日、小型制式空母アキナルが進水した旨發表してゐる。

新歐洲進攻反樞軸軍總司令官

アイゼンハワー戦局を語る

十二月二十四日、歐洲進攻反樞軸軍總司令官に任命されたアイゼンハワーは、同二十七日、任命後最初の新聞記者團會見を行ひ、左の如く戦局を語つた。(歐洲進攻反樞軸軍首脳部陣容は國際月報本號國際時報中「テヘラン會談の實情とその後の歐洲情勢」参照)

「反樞軸軍は一九四四年には戦勝を収め得るであらう。但し戦勝を収めるためには米英兩國國民が舉國一致男女を問はずその義務を完全に果たすことが必要である。」

ローマに對する反樞軸軍の進撃速度は失望に値する程度に遅々たるものであるが、然し同方面の戦線がこ

のまま膠着状態に陥るとは思はない。南伊戦線今後の進展如何は結局ドイツ軍がどの程度新鋭部隊をこの方面に派遣し、如何に強力な抵抗を試みるか否かによつて決定されるであらうが、西歐から第二戦線を展開するためにも、南伊戦線で反樞軸軍が活潑な作戦を行ひ、ドイツ軍をこの戦線に牽制することが必要である。余は西歐侵入作戦準備のため最近のうちに英本國に赴くが、實際に侵入作戦を開始する前には多大の準備を必要とすべく、先づ人的に反樞軸軍司令部の構成を完了しなければならぬ。即ち反樞軸軍の弱點はその陣營内部にともすれば相剋の起ることであるが、北阿反樞軸軍司令部ではこの缺陷は今までに克服された。

西歐侵入軍司令部においても反樞軸軍の内訌發生の可能性を除去するやうその陣營を打固めなければならぬであらう。一方余は空壕のみでドイツを屈服せし

め得るとは考へないが、然し西歐侵入作戦の補助的戦法としてはその効果を軽視することは出来ない。今次大戦に新武器と稱すべきものがあるならば、大規模な爆撃こそこれであり、反樞軸側はこの爆撃戦の効果を最高度に發揮する必要がある。」

マーシャル陸軍参謀總長歸國

陸軍参謀總長ジョージ・マーシャルは、テヘラン會談に出席した歸途、空路濠洲に立寄り、ニューギニア島嶼にソロモン諸島の前線を観察し、西南太平洋反樞軸軍司令官マックアーサー及びその他同方面における各司令官等と協議を遂げた後、空路ホノルルに向ひ、同地において太平洋艦隊司令官ニミッツと會談し、十二月二十三日ワシントンに歸還したが、直に白聖館に出頭し、ルーズヴェルト大統領、スチムソン陸軍長官及びブリーイ大統領付参謀長等と會談した。

陸海軍人事異動

第十三海軍區司令官中將 フランク・フレッチャー
任北太平洋水域海軍司令官 (十二月二十一日附)
陸軍中將 ジェイコブ・デイヴァース
補地中海方面米軍司令官
陸軍少將 ジェームス・ドウリットル
補英國駐屯米軍第八航空隊司令官 (十二月二十八日附)
海軍少將 ジョージ・マレー
任海軍練習航空部隊司令官(前空母エンタープライズ艦長) (十二月三十一日附)
開戦以來の兵力損害拾三萬三千餘
戦時情報局は、十二月二十九日、開戦以來の兵力損害を發表したが、次いで同三十一日、海軍省も海軍關係兵力損害を發表した。いまそれを一括表示すれば左の通りである。(括弧内は海軍關係兵力損害を示す)

戦 死 三〇、一〇七 (一四、三九〇)
戦 傷 四二、三四五 (六、二六五)

行方不明 三二、一三八 (八、三五〇)
俘虜 二八、九九一 (四、二九八)
合計 一三三、五八一 (三三、三〇三)

陸軍航空部隊組織強化

——全附屬部隊本部隊に編入——

陸軍航空本部長ヘンリー・アーノルドは十二月十三日附命令を以て通信部隊、補給部隊、信號部隊等の附屬部隊を盡く航空部隊に正式に編入した。従来これ等部隊は臨時的に航空部隊附屬となつてゐたものであるが、今回の命令により直接アーノルド陸軍航空部隊司令官の指揮下に置かれ、航空部隊の組織は一段と強化されるに至つた。尚、今回の措置は陸軍の最高長官である参謀總長マーシャルの許可を経たものである。

總兵力を一千三十萬に擴充

——父親百萬を新規徵集——

徵兵局は、一九四四年の陸海軍の徵兵計畫を十二月二

十日、次の如く發表した。

「徵兵局は明年六月までに陸海總兵力を一千三百三十萬にまで擴大する計畫の下に明年上半期六ヶ月間に二百萬の新規徵兵を行ふ豫定である。二百萬のうち百萬までは一九四一年十二月以前に出生した子供を持つた父親となるであらう。」

尚、徵兵局は父親召集令に基き、十月及び十一月の二ヶ月間に、父親五萬を軍隊に徵集した旨發表した。

海軍婦人部隊員四萬七千名

海軍省は十二月下旬海軍婦人部隊の状況を次の通り發表した。

「米海軍における婦人部隊の努力により戦艦十二隻以上の乗組員數に當る男子が解放されて軍務に服させることが出來た。海軍の婦人部隊員は一九四二年十二月三十一日に僅か五千名であつたが、一九四三年末には四萬七千六百名になり、一九四四年末には少くも九

萬二千名となる見込みである。海軍の婦人部隊員の約四分の一は海軍航空部隊に勤務、飛行機修繕、飛行場の雑務に當つてゐる。五千名以上は醫療隊に屬してゐる。

對潜水艦戦成功

——米英共同聲明發表——

ルーズヴェルト大統領、チャーチル英國首相は十二月九日、對潜水艦戦に關する左の如き共同聲明を發表した。

「反極軸側は船團護送方法の改善、飛行機の使用特にポルトガルからアゾレス群島の使用權を獲得したることによつて著しい成功を収め、十一月中のドイツ潜水艦による商船喪失数は、一九四〇年五月以來の最低記録を示した。」

東亞戰線補給に米印間定期空輸開始

陸軍省は、十二月九日、オハイオ州のバクソン飛行

場とインド間に定期貨物輸送空路を開始した旨發表した。右空路には重爆撃機コンソリデーテッドB24型を改装した輸送機八十七臺を使用、軍當局は世界最長の輸送空路と豪語してゐる。

大西洋空輸施設の擴大整備

陸軍省は十二月、大西洋横斷空輸施設の擴大整備に努めてゐるが、十二月二十二日、米國、ニューファウンドランド、ラブラドル、グリーンランド、英國の六個所に長波無線電信局を建設した旨發表した。これは短波放送が極北地方においては屢々空気が及び磁力により妨害されるので長波にしたもので、同長波無線電信局の建設には非常な困難を伴ひ、風速百六十哩の暴風に堪へ得る無線臺を建設しなければならなかつたといはれる。

又陸軍省は、十二月二十九日、次の如く發表した。

「南大西洋の英領島嶼アセンション島は今や空軍基地として、殊に航空輸中繼地として重大役割を果して

をり、現在までに同島を通過してアフリカ大陸に飛んだ飛行機の数は五百機に達する。」

【外 交】

ルーズヴェルト大統領歸國

ルーズヴェルト大統領は、十二月一日、テヘランにおけるチャーチル及びスターリンとの會談を終へ、同六日、對獨戦遂行並に戦後協力に關する三國宣言並にイランに關する三國宣言を發表したが、更にチャーチル英首相とともに、米英ソ三國政府の名をもつて、イノニエー土大統領をカイロに招請し、十二月四日から同六日に互り米英土三國會談を開催した。

かくして第一次カイロ、テヘラン、第二次カイロ等數次の會談を終へたルーズヴェルトは、歸國の途次、十二月八日、マルタ島に立寄り、更に北阿各地を歴訪、引續きシチリア島に赴き、ジョージ・バットン麾下の米第七

軍を閲兵し、第五軍司令官マーク・クラーク中將等將校五名に對し、殊勳十字章を授與したといはれる。そしてルーズヴェルト大統領は十二月十六日、ワシントンに歸還したが、翌十七日、直ちに白雲館に政府關係を招致して會談、續いて議會方面の領袖とも會談した。尙、トルコ、重慶兩大使、エジプト公使、ソ聯、イラン兩國代表とも會見したのち、ハル國務長官と午餐を共にしつつ懇談を重ねた模様である。

スターリン及び蔣介石に満足

——ルーズヴェルト記者團に言明——

歸國したルーズヴェルト大統領は、十二月十六日、新聞記者團會見において次の如く述べた。

「テヘランにおいてはスターリン議長から吾等三名に對し隠謀、刺客があるといふ注意があり、その警告に従つてソ聯大使館に宿泊した。今回の旅行は戰爭指導上の見地からもまた戦後に對する期待等の點から見

ても成功であつた。會議は尠くとも吾等の時代において新な戦争を發生させない様努力することに終始一貫した。

スターリン議長は現實主義者である。スターリン議長もまた戦争はあつてはならない、これに賛成するものはこの見解を支持しなくてはならないとの自分の意見に同意であつた。

スターリン議長は自分の最高の期待に背かず、自己と良き會談を行つたが、蔣介石との會見も満足なものであつた。

尙スベインのフランコ將軍と會談した事實はない。

ハル國務長官伯軍の戦線参加言明

政府は十二月十三日ブラジル參謀本部代表マスカレーニヤス・ダ・コースタの軍事使節一行が北阿反樞軸軍司令部に到着した旨發表した。同軍事使節はブラジル軍地上部隊並びに空軍の北阿派遣につき打合せを行ふ筈である。

右に關しハル國務長官は、同日ブラジルの歐洲戦争参加に關し、満足の意を表明し左の如く言明した。

「現在北米にはコルデイロ・デ・フアリーヤ及びカンロベルト・ダ・コースタ兩將軍を含む六十名からなるブラジル陸軍使節が滞在してゐる。右使節團はその使命達成次第歸伯するが、更に同数の使節團が渡米するであらう。尙、第一回派遣軍司令官には五ヶ月前から滞在中であるダ・コースタ將軍が指名される筈で、遠征軍兵力は空軍、戦車隊を含み六個師十二萬人と算定されるが、その輸送には北米側が擔當することとなつた。」

米バ軍事協定締結

國務省は、十二月十日、ハル國務長官とワシントン駐劄ブラグアイ公使セルソ・ウエラスエズとの間に要旨左の如き軍事協定が締結された旨發表した。

一、米國陸海軍將校はブラグアイ政府の招請に應じ、

ブラグアイ軍に對し航空作戦以外の軍事訓練を施す

一、協定有効期間は協定調印の日より四ヶ年とし以後ブラグアイ政府の要請により延長する

因に米バ兩國は先きに航空訓練に關する軍事協定を締結してゐるが、今回の協定はその補充をなすものである。

新ボリヴィア政府不承認を示唆

國務省は、十二月二十七日、米洲防衛委員會が十二月二十四日モンテウイデオにおいて決議した内容を發表したが、それと同時にハル國務長官は、以上の決議を全面的に支持する旨確言したと傳へられる。右決議案によれば、米洲各國政府は政變に基く各國の新政府承認に際しては、飽くまで共同歩調をとり、且新政府成立の経緯、新政府首腦の経歴を調査することになつてをり、従つて米國政府は、飽迄ボリヴィア新政府不承認政策を固執するものとみられるに至つた。

對英武器貸與總額八十四億五千萬弗

海外經濟局長レオ・クロリーは、十二月十九日、開戦以來本年九月三十日までの武器貸與引渡高總計を百六十四億三千萬弗内英國向八十四億五千萬弗と發表した。

對ソ武器貸與總額三十五億弗餘

海外經濟局長レオ・クロリーは、十二月二十八日、對ソ援助状況を次の如く發表した。

「開戦以來ソ聯に對して總額三十五億弗強に上る軍需品その他物資を補給した。その主要内容は、飛行機七千機、戦車三千五百臺、貨物自動車十五萬臺、小型軍用自動車二萬五千臺、半自動車十三萬等である。」

反樞軸救濟復興會議東亞委員會開催

過般ニュージャージー州アトランチック・シティで開催された反樞軸救濟復興會議は、地域別委員會として重慶代表を委員長とする東亞補給委員會を設置したが、右

東亞委員会は十二月十日ワシントンにおいて十二月十一日から第一回の命令を開くこととなつた旨發表した。

【一 般】

大統領選挙前哨戦漸次高潮

——マックアーサー捲出し運動も進捗——

明年度大統領選挙を間近かに控へ、民主、共和兩黨其次第にその前哨戦に熱中して來た感があるが、共和黨は過般の州知事選挙において大勝した結果、勝利の希望を昂めたものの如く既にウイルキー、ブリツカー、スタツセン等が立候補してをり、更に最近、イリノイ州選出下院議員エベレット・ダークセン及びペンシルバニア州知事ジョン・デリツカーも立候補を聲明した。西南太平洋反極軸軍總司令官他マックアーサーの次期大統領選挙戦捲き出し運動に最も熱心なヴァンデンバーグは、共和黨上院議員陸海兩省に對してマックアーサーの大統領選挙

戦出馬に對する陸海當局の意向を問合せ中であつたが、十二月十三日に至りスチムソン陸軍長官は、陸海兩軍を代表してマックアーサーの立候補には何等差支なき旨次の如く回答した。

「マックアーサー司令官は明年一月二十六日をもつて

陸軍の退役年齢である六十四才となるが、退役年齢に達した陸海軍將校は大統領候補の指名を受け得る資格がある。従つてマックアーサーが立候補することに對しては法制的に何等差支へないが、たゞ大統領は陸海軍の最高統帥者として退役年齢に達した陸海將校の退役を許可するか否かの権限を握つてゐる關係上、この問題は大統領の意向次第で決定されよう。」

尙ヴァンデンバーグは、十二月三十一日、正式にマックアーサー推挙を聲明し、次の如く發表した。

「我々は共和黨の次期大統領候補として正式にマックアーサーを推薦する。マックアーサーにはまだ右に

つき相談はしてないが、彼は共和黨の候補指名を拒否する如きことはないであらう。」

十一月二十三日、ニューヨーク・タイムズ紙所報ギヤラツプ輿論投票による共和黨大統領候補豫想を表示すれば左の通りである。

	十一月調査	十月調査
デューイ	三二%	二五%
ウイルキー	二八%	二九%
マックアーサー	一九%	一五%
ブリツカー	八%	八%
スタツセン	六%	四%
ワフ	五%	六%
ワレン	一%	一%
サルトンスター	一%	二%

上陸用舟艇建造法案成立

下院は、十二月九日、總額五十五億七千萬弗の海軍補

助艦艇建造豫算案を可決、上院に廻附した。この豫算案は上陸用舟艇百萬噸及び攻撃作戦用輸送船、護衛用航空母艦、貨物船、連絡用船、各種母艦等を含む補助艦艇二百五十萬噸を建造せんとするものである。

そして上院は、本法案を五十三億に削減可決したといはれるが、十二月十八日、ルーズヴェルト大統領は、右法案を裁可した。

父親召集案成立

——徴兵局の軍隊召集権限復活——

政府は、十二月十日、ルーズヴェルト大統領が問題の父親召集法案に署名を了し、同法案が成立した旨發表した。父親召集案は戦前に生れた子供を持つ父親に現在まで召集延期の特典が與へられてゐたのを取消すもので、議會の大問題となつたが、結局戦時不要不急職業に従事してゐる獨身男子が全部召集されてから父親の召集を開始するとの原案を殆んど骨抜きにした修正案付きて議會

を通過した。

この法案の附帯條項として軍隊召集に關する全權限を徵兵局に復活する案も正式に成立した。軍隊召集に關する權限は、昨年末の戰時人的資源委員會の機構擴充によつて同委員會に與へられ、同時に徵兵局も人的資源委員會の指揮下に屬することとなつたが、今年一年振りで徵兵局の獨立が復活したわけである。この復活案に對しては戰時人的資源委員會長官ポール・マクナットは勿論強硬な反對を行つたが、ルーズヴェルト大統領は彼の要求を無視して今回これに署名したものである。

上院財政委員會新增稅案修正可決

下院歳入委員會は、十一月十一日總額百五億弗に上る本年度増稅案を二十一億四千二百萬弗の小額に削減して可決上院に廻附したが、上院財政委員會は、十二月十六日夜、審議中の同法案を可決した。

百五億弗の政府原案が下院で二十一億弗臺に削減され

るや、政府は望みを上院に囁し猛烈な復活運動を開始したが、その效なく下院案より僅か一億四千四百萬弗を増加して二十二億八千四百萬弗の増稅にうちとめた。財政委員會における最大の修正點は勤勞所得稅に對する十%の控除を廢止したことであり、下院案に對する稅額の増大は主としてこれから生じたものである。

支那移民禁止法案撤廢成立

支那移民禁止法案撤廢は、十一月二十六日上、下兩院を通過、白堊館に廻附されてゐるが、ルーズヴェルト大統領は、十二月十七日、ワシントンに歸還するとともに直ちに同法案に署名、ここに正式に成立した。但し實質的には年百五名の支那移民の入國を認めるに過ぎない。

眞珠灣軍法會議延期法案成立

議會は、さきにキンメル前太平洋艦隊司令長官及びハワイ駐屯陸軍司令官ジョー・ト以下眞珠灣空襲責任者に對する正式軍法會議を戰爭終了後六箇月後まで延期する旨の

法案を可決したが、ルーズヴェルト大統領は、十二月二十二日、この法案に署名を了した。この問題はさきにキンメルが責任の所在を明らかにするため即時軍法會議の開始を要求して議會でも問題となつたが、政府當局は軍上層部に責任の波及することを恐れてキンメルの要求を拒否、議會も政府の要請を入れて右法案を可決したものである。

議會休會

上下兩院は、十二月二十一日午後をもつて夫々降誕祭休會に入つた。これで第七十八議會第一會期は幕を閉ぢたが、第二會期は明年一月十日から開會される筈である。

新人的資源委員會成立

ルーズヴェルト大統領は、十二月二十三日、大統領令をもつて緊急監理局内に新たに戰時人的資源委員會を設立した。委員長はまだ決定してゐないが、委員は左の政府各機關代表によつて構成される。

陸軍省、海軍省、農務省、勞働省、戰時生産局、國家住宅局、國防運輸局、選擇徵兵局、海事委員會、戰時海運局、聯邦保障局、官公吏委員會

そしてルーズヴェルト大統領は更に他の大統領令をもつて新人的資源委員會と徵兵局との關係を次の如く規定した。

一、徵兵局は徵兵法の實施に關聯して生ずるあらゆる問題につき人的資源委員長と協議するを要す

一、徵兵法の實施にあつては人的資源委員會の政策ならびに計畫を充分考慮し、これとの調整を行ふ

今回のこの大統領の措置は過般議會が徵兵法の改正を行ひ、舊人的資源委員會から徵兵に關する權限を取り去つた結果、これに對應するための人的動員機構の改組と見られる。

十一月中造船高百六十四隻

海事委員會副委員長ハワード・ヴィカリーは、十二月四

日、十一月中の造船高百六十四隻、百六十九萬三千重量噸と發表したが、その内譯次の通り
高速型C船十六隻、高速油槽船十九隻、リバテイ型船八十九隻、リバテイ船改装の油槽船十七隻、軍用その他特殊船二十三隻

ランド海軍委員長造船海運計畫闡明

ランド海軍委員長は、十二月二十日、ラジオ放送を行ひ、造船海運計畫につき次の如く演説した。

「ルーズヴェルト大統領は、かつて一九四三年末に二千四百萬重量噸の商船計畫目標を掲げたが、建造実績は遙かにこの目標を突破し、開戦後二年間の建造高は二千六百萬噸にも達しよう。かくの如く米國の戦時造船計畫は實に巨大なる商船隊を建設、これは目下海外に派遣され、米國軍隊の補給その他に従事してゐるが、將來かかる巨大な商船隊を如何に利用するかは、けだし重大な問題であらう。

その處分法として考へられる所は

- 一、他國にそのまゝ譲渡するか
- 一、他國に賣却するか
- 一、他國に貸與するか

一、非常時を目標に豫備商船隊として留保するか
一、解體して屑鐵とするか

の五つの方法がある。その處分方法は結局米國民の意向によつて決定されるであらうが、余の意見では米國は將來の非常時に對應して相當量の豫備商船隊を持つことが必要であらう。而して米國の海運は目下その殆んど全部が政府の手によつて運営されてゐるが、戦争が終了次第戦前平時の海運政策に復歸すべく商船隊はいづれも民間企業家に拂下げられることとならう。

而してランドが今回特にかゝる演説を行つたことは戦時造船計畫が量的増大のみを目標とした結果、極端な粗

製造に陥り殊に戦時標準型船たるリバテイ船の如きは全く平時の使用には堪えないとの非難があり、一方では戦時海運政策に對して最近相當の攻撃が加へられるに至つたので、これに答へたものと見られる。

炭坑労働賃金基準協定成立

永らく揉みに揉んだ東部炭坑罷業も政府對炭坑労働組合委員長ジョン・ルイスとの間に、十二月三日、暫定的新賃銀契約が成立し、一方炭坑労働組合委員長對炭坑經營者代表との間に恒久的賃金契約が締結されたが、十二月十二日、炭坑労働組合は、全國右炭生産の六七%を占める北部アラバマ州炭坑主との間に戦時労働局の認可した労働時間一日八時間四十五分、賃金率八弗五〇仙の基準協定を成立させた。

右協定は、南部諸炭田を除くイリノイ、ペンシルヴァニア、北部オハイオ、ウエスト・ヴァージニア各炭田並に製鋼會社所屬の所謂緊留炭礦をも含んでゐる。

鐵鋼罷業解決

産業別労働組合系の鐵鋼労働組合は、鐵鋼會社との賃金契約満期を機に一時間十七仙増給の新賃金契約を要求したのに對し、十二月二十二日戦時労働局が「小鐵鋼様式」を楯にこれを拒否した結果、大規模な鐵鋼労働者の罷業が勃發し、十二月二十四日、契約満了と共に續々罷業を開始、既にオハイオ州だけでも四鐵鋼工場、四萬の労働者が同二十五日早晩から罷業に入り、組合所屬労働者は、二十七日一齊に罷業に入るとみられ、全米鐵鋼會社五百を包含する労働者二十五萬の總罷業が實現する氣配を示すに至り、米國軍需産業の中樞である鐵鋼工業が全的に麻痺状態に陥らんとする危機に直面した。

ルーズヴェルト大統領は、十二月二十六日、勞資兩者に呼びかけ、罷業の即時中止を要請、労働者側と政府との交渉は戦時労働局が労働者側の要求に屈し、賃金契約の趣及を認め妥協が成立、政府側の譲歩によつて十二月二

十七日、解決をみるに至つた。

鐵道罷業解決

漸次不穩の形勢を示してゐた全米鐵道従業員乗員友愛會は、投票により十二月三十一日を期し罷業取行を決定、政府當局も狼狽し、ルーズヴェルト大統領は調停に乗り出し十二月十九日、鐵道労資各代表を招致、長時間に互り會議を開催、協議を重ねたが遂に最終的妥協點に達し得ず、更に引續き二十一日會議を再會同會議においてルーズヴェルト大統領は

「委員會の勸告した一時間四仙賃金引上げに加へて鐵道従業員にも他の産業と同様一倍半の時間制労働賃金を認める」といふ妥協案を提出したが、従業員側は断乎これを拒否、飽迄無條件一時間八仙増給を要求した。一方非乗員組合も乗員友愛會に呼應して、同日、十二月三十日午前六時を期し總罷業開始に決定した旨發表、鐵道従業員側

は乗員非乗員共完全に足並を揃へ總罷業に對して強固な共同戦線を展開、極度に險惡な雲行を示した。そして十二月二十三日も賃金交渉は續行されたが、遂に妥協成立せず、同日ルーズヴェルト大統領は勞資双方に對し、強制調停に出たため、乗員従業員の二友愛會並に鐵道會社側は右強制調停を受諾するに至つたが、残る三友愛會及び非乗員従業員の態度が不明であつたのに鑑み、遂にルーズヴェルト大統領は、同二十六日、罷業彈壓のため全米鐵道の政府による接收を命令した。その結果、強硬態度を續けてゐた非乗員従業員友愛會も政府彈壓に屈し、労働時間外の増給問題については労働者側の主張を認めるといふ條件附で同二十七日總罷業指令を撤回するに至つた。尚、全米鐵道の接收命令により、十二月二十七日を期し全米鐵道の管理、經營は完全に陸軍の管理下に入つてゐたが、陸軍當局者との協議にもとづき全面中止決定をみるに至つた。

「開關以來の燃料危機」

——イツキーズ燃料局長官言明——

戰爭開始以來第三回目の冬を迎へたが、今年は相次ぐ石炭罷業で燃料不足は殊に甚しくイツキーズ燃料局長官は、十二月六日、上院の追加豫算分科委員會に臨み次の如く言明した。

「今年は炭坑夫の罷業によつて出炭計畫が意外な支障にあつたためそれだけでなく燃料不足の折柄、今年の冬は米國開關以來最大の燃料危機に見舞はれることとならう。本年初頭以來炭坑争議で失はれた出炭高は九月末までに三千萬噸、十月、十一月の罷業で一千萬噸、合計四千萬噸にも達した。」

而して分科委員會は全米六十五の主要都市に冬季緊急石炭配給所を設置する費用として三百五十萬弗の追加豫算を承認した。

一方大西洋岸一帯の近來稀な寒氣にともなふ燃料不足

對策のため、戦時燃料局長官ハロルド・イツキーズは、十二月三十日緊急命令をもつて東部諸州に對する暖房用石炭の供給を確保するため、オハイオ州及びペンシルヴァニア州以西に對する民需用石炭の移出を一部禁止した。右は即日實施され、明年四月一日まで續行される筈である。

印刷用紙不足深刻

最近國內の紙不足は極めて深刻であるが、右につき、ネルソン戦時生産局長官は、十二月二十日、明年の印刷用紙制限を強化して次の如く發表した。

「米國では印刷用紙不足のため明年度の配給量は更に百二十五萬噸制限されるであらう。即ち各出版會社の割當量は二十五%減少される。又雜誌類はその型が小さくなりその數も制限されよう。書物印刷用紙だけでも約十萬八千噸を節約する必要がある。」

又最近のニュース・ウィーク紙も

「米國々内戦線における刻下の大問題は木材並びにパルプの不足であり、紙、印刷用紙の不足もさることながら更にこれ以上問題となるのは前線に送るべき弾薬軍需品の包装用紙が拂底してゐることである。而して戦時生産局の見積りによれば、この包装用紙不足を緩和するため更にパルプ供出に二萬人、木材供出に六萬人の勞務を必要とするといはれる。」

と報道して居る。

そして同二十二日附サンフランシスコ・ニュース紙は用紙不足の對策として二十三、二十四の兩日クリスマスを當てこんだ大袈裟な廣告は受けつけないこととし又クリスマス當日は休刊することに決した旨發表した。

流行性感冒蔓延

寒波來襲とともに全米に感冒が蔓延し、十二月十三日には南部を除き全國の罹患者總数は、百萬を突破したといはれる。

病名は呼吸器病といふ以外尙判明せず、インフルエンザ、グリップス或は單純な風邪と區々な診斷を下されてゐる状態で、病状はインフルエンザより高熱を發し且つ關節痛、骨痛を伴ひ、死亡率は比較的低いといはれる。

原因は寒氣、榮養不良、燃料不足であるといはれるが、多數の學校は生徒の缺席のため休校を餘儀なくされ、軍需工場も閉鎖しないが缺勤者續出のため生産計畫に支障を來たしてゐるといはれる。

尙、上下兩院議員百餘名が罹患して居り、ハリファツクス駐米英國大使も十二月十七日から引籠つた模様である。

ウイルキー對ソ危機の論說發表

ウイルキー共和黨立候補は、十二月三十一日附ニューヨーク・タイムズ紙上に「對ソ不信を煽る勿れ」と題する論文を掲載したが、右論文の要點は左の通りである。

「ソ聯邦がフィンランド、ポーランド、バルト三國及びバルカン等隣接諸小國の政治的保全に關し何を爲さ

んとしてゐるかといふ問題は我々を不安にさせる。

我々は常に歐洲小國將來の地位の問題が最もデリケートなもの一つであると思惟してゐたが、今日、この問題は我々の目前に差迫つて來た。赤軍のポーランド國境への接近と共に聯合國國民の危機は迫つてゐる。」

英 國

【軍 事】

國王ジョージ六世戦局の多難を説く

國王ジョージ六世は、十二月二十五日、降誕祭に當りバッキンガム宮殿から、前線の英軍將兵に對し十分間メッセージを送つたが、右メッセージで、國王は、

「英軍は今後更に困難な働きと困難な戦ひとを覺悟しなければならぬ。間近に迫つた新たな戦局につい

ては決して安易な夢を抱いてはならない。」

と述べ、更に米軍の協力と赤軍の健闘と重慶の抗戦ぶりにお世辭を述べた。

地中海竝にイタリア方面反樞軸軍

總司令官任命

十二月二十四日、アイゼンハウアー米陸軍大將の歐洲進攻反樞軸軍總司令官の任命が首相官邸より發表されたが、右に伴ひ、地中海方面反樞軸軍總司令官にマイトランド・ウイルソンが、イタリア方面反樞軸總司令官にハロルド・アレキサンダーが夫々任命された。(詳細は國際月報本號國際時報中「テヘラン會談の實情とその後の歐洲情勢」参照)

東部戦線の觀察希望

陸軍政務次官アーサー・ヘンダーソンは、十二月十六日、下院において、次の通り言明した。

「最近ソ聯の使節團はイタリア戦線における英軍の

一、英國政府はソヴェト政府と協議した後、ユーゴスラヴィヤ國內のチトー政権に對し軍事使節を派遣した。バルチザン部隊とミハイロヴィッチ政権との合流も必ずしも不可能ではない。

二、カイロ會談においてはチャーチル、蒋介石、宋美齡並にマウントバツテンが地圖を前にして東亞反攻作戰を練つた。

一、英國政府は、歐洲戦線に人的物的資源の大半を傾けてゐるが、依然として東亞戦において、英國は主人公の一人であり如何に犠牲が大きくとも如何に戦争が長引かうとも英國人は最後まで日本軍と戦ふであらう。

尙、テヘラン會議については、比較的簡單に言及するに止め、米英ソ三國政府が戦時並に平時に互り協力する基礎が据えられたと手前味噌を並べ、その實例としてイタリア諮問委員會並にロンドンに於ける歐洲委員會を挙げ、後者は米國代表ジョン・ワイナントの参加を以て十

四日第一回の會議を開催する旨を述べた。

イーデン外相ソ波關係に奔走

イーデン外相は、テヘラン會談を終へてロンドンに歸還したのちしきりに亡命ポーランド政権代表と交渉を重ねてゐるが、サンデイ・デスバツチ紙の報道によれば、ソヴェト政府がソ波兩國間の復交について相當重大な要求を提出してゐるため交渉は行き悩み状態に陥つたとつたへられる。

歐洲諮問委員會開催

モスクワ會談の結果、ロンドンに設置された歐洲諮問委員會は、十二月十五日、第一回會議をランカスター・ハウスにおいて開催、英國代表外務次官補ウイリアム・ストラング、米國代表大使ジョン・ワイナント、ソヴェト代表フヨドル・ダウセフ大使等が出席、秘密會で協議を遂げた。會談後、米國代表ワイナント大使は新聞記者團に對し、「今回の會議では組織上の諸問題を討議したに過ぎ

ない。第一回の正式會議は近く開催される豫定で、日取も既に決定してゐる。」と述べた。

【一】 般

悪性インフルエンザに蔓延

——國王ジョージ六世も罹患——

今回の流行は一九三七年以來の猖獗で、本年十一月二十日頃より激化、英本國全土に蔓延、スペイン風邪流行以來の恐慌を呈して居る模様で、その爲軍需工場、各商社、官廳等の事務は停屯してゐる状態である。その内でも軍需工場の被害は最も甚しく、一部工場では作業能率二割五分の低下である。又政府は青年醫師五百名の徴集を延期、軍醫を狩出す等醫師の不足を來し尙藥屋、藥劑師等の徴集延期をも實施して居ると傳へられる。高等法院九ヶ所の内八ヶ所は判事缺勤のため開廷不能である。

尙主なる罹患者は國王ジョージ六世(十二月七日、新聞報道)チャーチル首相(十六日政府発表)等である。

感冒で鐵道輸送等停頓

——ペーカー運輸省次官言明——

戰時運輸省次官ノエル・ペーカーは、十二月十七日、下院において次の通り言明した。

「感冒と貨車不足のため石炭の輸送が少なからず停頓するに至つた。鐵道従業員の一割以上が數週間感冒で缺勤してをり、従つて多數の列車を中止するの止むなきに至つた。ある線では貨物列車に乗員をふりむけるため旅客列車七十一を取り止めた位である。更にある幹線の一部では乗員がどうしても間にあはないので、貨物列車を打ち切るの止むなきに至つた。戰時運輸省は全く流行性感冒に敗北したわけで、事態改善のために當局としては徹底的な對策を講じてゐるが、今後數ヶ月現在の異狀が續くことと思ふ。石炭貨車が動

かないため、炭坑の仕事も手違ひを生じてゐるが、當局においては色々対策を講じてゐる。

一週間に一千百四十八名死亡

保健省発表

保健省は、国内の流行性感冒による死亡者数につき、十二月十八日次の如く発表した。

「ロンドン始め国内百二十六都市に於て四日から十一日に至る一週間に感冒によつて死亡せるもの一千百四十八名、前週の死亡者に比し四百三十九名増加である。右数字は一九三七年一月末の一週間に於ける死亡者数に次ぐ高率である。然し各地からの情報によれば、感冒の勢力は漸次衰へてゐる。」

空襲被害者増

ロンドン來電によれば、内務省は、十二月十四日、獨逸空軍の英本土空襲による十一月中の一般住民の被害を死者百十九名、負傷者二百卅八名と発表したといはれる。

十月中における被害は死者百十八名、負傷者二百八十三名で九月の死者五名、負傷者十一名に比し十月、十一月は著増してゐる。

軍需輸送輻輳

十二月二十日附デイリーメール紙は、次の如く報じてゐる。

「英國内の鐵道は、目下歐洲第二戰線の大規模な作戰に必要な軍隊、兵器その他軍需品の輸送のために未曾有の大運轉を行つてゐる。國民は、この鐵道の運轉計畫を容易ならしめるために全面的に、協力せねばならない。戰時交通省フレデリック・レザーは、十九日、例年のクリスマス休暇における特別運轉など思ふよらぬ旨、言明した。」

炭坑業の危機迫る

炭坑労働組合は、十二月十六日、炭坑主代表と會見、全體の炭坑夫に關し、次の最低賃銀要求を提出したと傳

へられる。

坑内労働に關しては週約六磅

地上勤務に關しては五磅十志

アフトレ・ブラデッド紙のロンドン特派員は、

「炭坑組合、今回の要求は殆ど最後通牒に等しく、クリスマス前に開戦以來、最も重大な賃銀闘争に當面するであらう」

と報道してゐるが、更にデイリー・ヘラルド紙は、十二月十八日の紙上において、

「燃料相ロイド・ジョージの對案は、絶対に不十分である。炭坑夫達は今度は本氣である。」

と事態の重大性を指摘してゐる。

ケーシーをベンゴール州知事に任命

ロンドン來電によれば、政府は、十二月二十四日、西亞常駐相リチャード・ケーシーをベンゴール州知事に任命した旨発表したといはれる。

ドイツ

敵側の企圖悉く失敗

外相三國軍事協定締結記念放送

十二月十一日、三國軍事協定締結記念日に際し、リツベントロップ外相は要旨左の如き放送演説を行つた。

「敵は過去一年間に於て日獨伊の堅陣を抜こうと試み、部分的成功を収めたが、三國の牙城は依然として不拔であつて東亞に於て日本はその既得地盤を確保し、蜿蜒數千裡に亘る戰線を固めることが出来たのみならず最近に至つて米英聯合艦隊に對し赫々の勝利を占め、又歐洲に於てもドイツ軍は力戰奮闘し、攻め寄る敵を悉く後退させたのである。即ち東部戰線に於てドイツ軍を潰滅しようとする敵側意圖はドイツ軍の計畫的戰線短縮により水泡に歸すのみならず、赤軍は却つてその

莫大な人的物的損害のため次第に只管萎縮に向つてゆく現状である。又南伊戦線に於ての米英軍の進撃の遅延たることは蝸牛の歩みにも比べられ、その間にフォアシトイタリアはドウチエを戴き着々再建への途上に在るのである。又これに加へて大西洋及び地中海方面におけるドイツ軍の守備堅固のため、大陸進攻を呼號してゐる敵も如何ともすることが出来ず、遂に最後の手段として卑劣にもテロ爆撃及び宣傳戦を選んだが、何れも完全な失敗に歸したことは敵側も認めざるを得ず、ドイツ國民の士氣は空襲によつて却つて昂揚してゐる。一方矢繼早のコンミューネ発表による會議攻勢も何等效力を現はさず、又敵は戦争犯罪者の處罰を公言することにより戦争責任を轉嫁しようとして居るが、本大戦の責任が今回のテヘランに會合したチャーチル、ルトズヴェルト及びスターリンの三名に在るとは衆目の見る所である。更に大西洋憲章が羊頭狗肉

に過ぎないのは明白な事實で米英ソ聯は今や世界分割を公言して憚らず、東亞に於てはマライ、中華民國、ビルマ及び比島等を再び帝國主義の桎梏下に置こうとし、又歐洲においてはソ聯及び英國が各分け前を切取り、米國は米國でアフリカの資源を懐に收めんとする魂膽は火を見るよりは明かである。即ち彼等は専ら低劣極る征服慾に驅られ、他民族の搾取利用のみを常套手段としてゐるのである。これに反しドイツ、イタリアは歐洲新秩序の建設を旨としてゐるものであつて東亞が將來アジア民族によつてのみ形成統治且つ防禦されると同様に歐洲も共產主義勢力乃至全權主義勢力の介入を排除し歐洲民族のための歐洲となすべきである。

三國同盟國の正義の爲の戦が必らず勝利の榮冠を以て報ひられるべきことを確信するものであるが、就中日獨兩國は單に利害關係を共通にし同盟條約により統合して居るのみならず相互の信頼並に戰場に於て流され

た兵士の血により不可分の一體を成して居るもので、敵が既に蒙つてゐる莫大な損害にもかゝららず今後猶ほ反撃に出ることがあるとしても我が鐵壁の堅陣に於て崩壊するであらう。」

ゲツベルス宣傳相テヘラン宣言を駁す

宣傳相ゲツベルス博士は、十二月七日、ベルリンにおいて開催された鐵道従業員大會においてテヘラン宣言に對するドイツ國民の決意を披瀝して次の如く演説した。

「恐怖や威嚇乃至は空約束等を以てドイツ國民の士氣と抗戦意思を破損することは不可能である。敵が神經戦をやるといふことは彼等が軍事的に脆弱であることを物語つてゐるにすぎない。彼等の威嚇に依つてドイツ國民は何等驚くものではない。ドイツの國內戦線は如何なる事態においても演説や宣言などに依つて分裂するものではない。

テヘラン會談に對して我々が言ふべきこととは以上

で充分だ。我々の敵はドイツ國民に懇へるといふ形の發表をしなかつたがこれはさういふことが全く無益であることを悟つたよめであらう。ドイツの鐵道従業員が困難なる時代において義務以上のことをなしてゐることに對し余は賞讃を禁じ得ない。現在程余はドイツの勝利を不動に確信した時はない。我々の敵はその選ぶところの如何なる手段をも遂行するだらうが、決してドイツ國民を征服することは出来ないであらう。」

國民の意氣益々軒昂

——宣傳相降誕祭に際しメツセーヂ發表——

宣傳相ゲツベルス博士は、十二月二十四日午後九時、ナチス黨ベルリン地區指導者の資格において降誕祭のメツセーヂを市民に贈り、次の通り述べた。

「過去數週間に互り反輻軸軍はベルリン市に對して幾多甚大な打撃を與へ、ベルリン市は今や實質上相貌を一變するに至つた。これ等の威嚇爆撃に依る被害を

る。ドイツが戦時國際法に準據して占領地問題の處理に當つてゐるのに對し、敵國宣傳機關は故意に事實を歪曲し、虚偽の報道を世界中にバラ撒いてゐる。最初彼等はドイツ國民に働きかけてゐたが、最近は全世界を對象とするに至つた。

現在敵國謀略の特徴はハツタリ作戰である。彼等は熾烈な戦争の眞只中において彼等の和平案なるものゝ宣傳に大規模な運動を展開し、信じ易い世界並に中立諸國を瞞着し、恰かも殆んど戦争が反極軸國の勝利に終りつゝあるかの如き印象を植え付けやうとしてゐる。これによつて敵は一石三鳥を狙つてゐる。即ち自國民の信念と士氣を強めると共にドイツ國民を威嚇してその戦意の弱體化を計り、併せて中立諸國に對し今こそ反極軸陣營に参加する最後の機會であると誘ひをかけてゐるのだ。敵ハツタリの代表的なものは大西洋憲章とルースヴェルトの「四つの自由」である。敵國が

提唱する戦後問題も所詮は空虚であり、何等の思想も何等の打開策も含まれてはゐない。敵國が武器に據らずして言葉でドイツを崩壊させやうとしてゐる事實こそは明らかに敵側が弱り始めた最初の兆候と見られる。戦争が何時終了するかといふ問題に對する解答は「我々が戦争に勝つた時」である。ドイツ國民の熱意と頑張り次第で戦争は長短何れともなるのだ。」

シニット情報部長職局回顧

外務省情報部長シニット博士は、十二月三十一日、外國記者國會見において過去一ケ年間の戦局及び政局の回顧と今後の見透しに關し次の如き見解を發表した。

「一九四三年に於ける戦局の進展は同時に政局の進行を決定するものであつた。軍事上においてはドイツは戦線を確保し、それによつてヨーロッパの解放に對する堡壘を堅持することを喫緊事として外交領域におゝてドイツはヨーロッパ内外の政治的情勢を一九四三

年の年頭の情勢と同様に維持すると云ふ事に主眼を置いたのであつた。しかもドイツは軍事的領域においても外交的領域においても、この課題を遺憾なく遂行した。スターリングラードとチュニスの戦闘は敵側の計畫では、それによつてヨーロッパの心臓部たるドイツ本國への進撃路を獲得すべき戦闘であつた。

この二つの戦闘は一種の政治的戦争の面を有してゐたのであるが、結局敵にとつてこの戦闘の結果は單に政治的敗北に歸した事が證明された。東部戦線のドイツ軍は比類なき撃破力と伸縮性とに富んだ戦術により戦局の過渡的變動を巧みに制すると共に政治面においては、かへつて敵に反撃を加へることに成功した。即ちスターリングラードの陥落はヨーロッパ諸民族の反共戦線を強化した。又北阿の戦果も敵の企圖した影響をフランス本國に與へ得なかつた。フランスから脱走した將軍連相互間の反目、アルジェに於ける共産黨勢力

の増大、或ひはレバノン事件等は凡ゆるフランス人の目を開かせた。イタリアについては、敵はイタリアに對し半箇年に亙る軍事的、政治的豫備工作を行ひ、ムッソリーニ首相の失脚、バドリオ政権の裏切を利用して、刃に切らずしてイタリアを手中に收め、對獨戦の跳躍臺たらしめようと企圖したが、ドイツはバドリオ一味の裏切に欺かれず事態を完全に收拾した。敵は三國同盟の一角を崩しその精神的動搖を來すべく企圖したが結局失敗した。ムッソリーニ統帥の救出、共和ファシスト黨の出現によつてイタリアの三分の二が無政府状態から救はれた。かくして極軸の概念は新しく成立した。イタリアにおける以上の事件に鑑み、三國同盟條約は特に有效な政治的協定であることが證明された。日獨間の同盟はこれに懸けられてゐた一切の軍事的、政治的期待を完全に満した。日獨兩國間の同盟破壊並に軍事的協力の破挫こそは、敵側が一九四三年に行つたす

すべての會談、すべての討議の出発点をなすものであつた。そして反樞軸諸國は地理的には互につながつてゐるにも拘らず相手國に對し共同の打撃を加へることが出来なかつたのに反し、ドイツと日本は相互に分離されてゐるにも拘らず、敵米英に對して幾多の打撃を與へることが出来た。

一方中立國との關係についていへば、ドイツの對外政策は何等本質的な變化を見なかつた。中立諸國は多くの場合現實主義的な考へから中立國としての状態を保つことをもつて満足としてゐた。尤も一九四三年度においても、例へばチリ、ポルトガル等の中立國がその中立政策にある程度の修正を加へたと云ふ事實が存在してゐる。これは敵側の強壓政策に基くものであつて、弱少國としてはかゝる壓迫に耐へる力が無かつたのである。」

バーベン大使ブルガリア外相等訪問

ソフィア滞在中であつたフォン・バーベン駐土大使は、十二月二日、ブルガリア國のシシュマノフ外相を訪問會見した後、同六日、サラジヨグル土首相を訪問、前後一時間に互り會見を遂げた。次いで十三日、メネメンジヨグル土外相と重ねて重要會議を行つた。

對ブルガリア經濟協定締結

ドイツ、ブルガリア兩國政府は、十二月十八日、ソフィアにおいて經濟協定を締結した旨發表した。右協定は一九四四年九月三十日まで有効である。

オスロー大學生事件公報發表

ノールウェー駐屯の獨軍當局がオスロー大學生を妨害行為の廉で逮捕したことに對し、スエーデン政府はドイツ政府に對し抗議を提出、その後スエーデン外相とストックホルム駐劄ドイツ公使との間に論議が重ねられてゐたが、リッペンントロップ外相は、十二月四日、駐獨スエーデン代理公使を招致、ドイツとノールウェー間の問題に

對し他國から干渉を受くべき筋合はないとして同國の抗議を一蹴した。右に關しドイツ政府は四日次の公報を發表した。

「外相リッペンントロップは、四日スエーデン代理公使の來訪を求め、妨害行為の廉で逮捕したオスロー大學生の問題につきスエーデン外相と同國駐劄ドイツ使臣との間で行はれてゐる論議に關し、ドイツ政府はかゝる問題をスエーデン政府と討議するを得ず、ドイツ政府は更にスエーデンが今後ドイツとノールウェーとの間の問題に干渉することを差控へるやう要請する旨通告した。外相は次でスエーデン政府が妨害行為者並にその使職者を無力化するといふ獨軍のノールウェー駐屯權により論理的に認められ、且つノールウェー自身の利益のためにも必要であるところの措置を外交問題となしたことは獨政府の全く意外とするところであることとを披瀝すると共に、これまで同國政府がスカンヂナヴ

ニアの權益にとり眞に危険極まる妨害となる如き英米ソの行為に對しては何等抗議しなかつたものであるが故にその驚きは一層大である旨通告した。」

ハリコフ事件に對する政府當局見解

報復として米英捕虜處置

ドイツ軍將兵三名及びロシア人一名が殘虐行為を働いたといふ廉でハリコフ市の法廷における長期間の公判の後十二月十九日遂に死刑に處せられたといはれる事件に關し、ドイツ政府當局筋では、十二月二十日次の如き見解を表明した。

「ソ聯側では全被告が罪狀を告白したと宣傳してゐるが、之はソ聯政府の常套的宣傳政策である。ジノヴィエフ、カーメネフの合同本部事件の時にも、トハチエフスキ元帥の反ソ陰謀事件の際にも、ソ聯政府は彼等が罪狀を認めたと發表したのである。今回の事件においても證據と稱せられるものはモスクワの宣傳局で捏

造されたことが明らかである。」

尙、外務省情報部長シュミット博士は、十二月二十二日、國際記者團との會見において、ハリコフ公判を取りあげ、報復手段として國際法を侵犯した米人乃至英人捕虜に對し機宜の處置を講ずる旨言明したが、軍當局は既に「具體策」を決定してゐると傳へられる。

ライン第一公使駐伊獨大使任命さる

ヒトラー總統は、十二月十日、第一公使ラインをリッペントロップ外相の推薦に基きフランス共和政府に對するドイツ大使に任命した。

チヘラン會談に關する新聞論調

「英國はドイツ打倒のため米ソを利用しようとして却つて彼等に引摺られてゐる状態であつて、しかも今次戦争による人的消耗はそれでも豊富でない英國の人的資源を益々枯渇させ、大英帝國の頽勢を最早蔽ふことが出来なくなつたのである。これに加へて英國はその類

みの綱とする船と金とを奪はれ、氣息奄々として米ソに縋り露命を繋いでゐる状態である。チヘラン會談の約束の手前もあり、近々西歐方面に第二戦線を開設しなくてはならない立場にあるが、ルーズヴェルトは大統領選挙を控へて人氣取りの必要上自國兵士の流血を忌避することは明かであつて、右作戦は結局英國の犠牲において行はれることになるであらう。歐洲戰場においての敗北が英帝國の世界政策からの全面的敗退を意味することは明白な事實である。」(十二月十九日附ライヒ紙ゲツベルス執筆)

「英國はその金科玉條とする勢力均衡政策のため今次の大戦を惹起したが、最初英國が利用しようとして戦争に引入れた米ソは今や英國の膝下を離れ、勝手氣儘に振舞ふのみならず、反樞軸陣營は全面的に硬挺を示し、チヤールが會議にお茶を濁してゐる間に、スターリンは次第に辣腕を示し、ポーランド、チエツコスロヴァキア、ユーゴスラビア及びギリシヤ等の亡命政府を自家藥籠中

のものと變化させ、更に南伊及び北阿にも魔手を延ばし始めた。然し英國がソ聯に對し、モスコ、チヘラン兩會議を通して完全に讓歩し、歐洲におけるフリートハンドを認め、その傳統的政策を放棄してまでもソ聯に媚態を示して居る理由は、一つには英帝國の衰退にあると云はれ、戦後の世界政策の見地からみても、英國が第三流國に墮すべきことは火を見るよりも明かである。」(十二月十九日附ベルリナー・ベルゼン・ツァイトング紙カール・メダレル執筆)

「チヤールは今こそスターリンの意の儘に操られる傀儡と化し、全く自己の政策を失ひ、嘗ての同盟國であるチエツコスロヴァキアその他をソ聯に賣渡し、本來の戦争目的とは全く反對の事を行つてゐるのである。海千山千のチヤールが袋小路に入り込み、進むにも進まねず、出るにも出られず、全く行詰つてしまつたその末路こそ誠に憐れと云ふべきであらう。」(十二月二十二日附フ

エルキツシャー・ベオバハター紙論説)

「日本の大戦果は敵側會議への明答」

——ブーゲンビル海戦に關する各紙論調——

十二月六日附各紙は、第六次ブーゲンビル海戦を大々的に取扱ひ、カイロ及びチヘラン會議に對する樞軸側の回答であるとして注目を惹いてゐるが、その論調の主要は左の如くである。

「今次の戦果は、カイロ及びチヘラン會議に對する盟邦日本の明答で、敵側の宣傳戰と神經戰とを完膚なく破壊し、樞軸側の實力を如實に示したものであるが、歐洲においてもドイツ及びその與國の戰團精神はチヘラン會議に對し必らず報復するであらう。敵はウエルソンの故智に倣ひ、又血腥いテロによつて、吾々の士氣を破壊しようとするが、謀略、口約束又は脅迫等を以て吾々の必勝の信念を破壊しようとすることは兎論に類するもので、敵側のこの種の陰謀に對しては吾々は太

平洋においても歐洲においても唯武器を以て回答を與へるのみである。(アルゲマイネ・ツァイトング紙)

「執拗な米軍も、今回はその戦術が日本軍よりも寧ろ自國軍を傷付けることに過ぎないことを悟つたであらう。日本軍の武器は敵側の空軍に對する沈黙の回答であるが、この様な軍事情勢にも拘らず敵側が日本及びドイツの打倒を呼號してゐるのは笑止の至りである。彼等は樞軸側の戦争指導が時間的にも空間的にも不可分の一體をなしてゐるのに氣附かない様であるが、日獨同盟こそ米英の世界征服を防止するものである。又今次のテヘラン會議は歐洲諸國脅迫の爲に開かれたものであるが、敵側の希望は既に畫餅に歸し、米英が歐洲をソ聯に賣つた事實を改めて世界に表示したに過ぎないのである。カイロ會議が日本に取つては笑止千萬にすぎなかつたと同様に、テヘラン會議もまた吾々の必勝の信念には微動すら與へないのである。本来今次會談の主な目

的は敵側の軍事的劣勢を糊塗することにあつた。しかも米英が遙々ソ聯勢力下の地域迄出向かなくてはならなかつた事實から見ても、スターリンがこれを牛耳つたことは明かである。(フェルキツシャー・ペオバハター紙)

「東亞の盟主日本に滿腔の信頼」

——大東亞戦争二周年新聞論調——

大東亞戦争二周年に際し、フェルキツシャー・ペオバハター紙は十二月七日、要旨左の如き論説を掲げた。

「ケベック會談直後、ルーズヴェルト大統領は對日大攻勢を呼號したが、その後攻勢開始の氣配は一向なく、マックアーサー西南太平洋反樞軸軍總司令官が西南太平洋において島傳ひ戦術を墨守したのみであつた。最近に至つて米軍が日本防禦線突破の意圖を以て大規模な兵力を用ひてラバウル及びマーシャル方面に同時に大攻撃を加へ、愈々本格的攻勢を開始したが、ブーゲンビル及びギルバート兩島附近に於て米海軍は連續痛撃

を蒙つた。この點から觀ても日本の戦力が大きなことは疑を容れる餘地はなく、陣地戦によつて日本の交戦力を磨滅出来たとの米國海軍首腦部の幻覺は今度見事に裏切られたと云へよう。日本は勝つて兜の緒を締める意氣込で、國防力の擴充に努力し、國民力を全體戰遂行の爲に總動員すると同時に、最近における外交大攻勢によつて東亞民族を解放し、その驟起を促し、之の結果東亞は今や自由意思に基き團結した一團として米英勢力の驅逐の爲に日本に協力してゐる。即ち日本は、開戦當初における様に孤軍奮闘してゐるものではなく、全東亞は今こそ日本を盟主と仰ぎ自由の爲に戦つてゐるもので、唯一の謀叛人である重慶の徒輩も早晩は大勢に抗し難いことを悟るに至るであらう。日本は参戦二周年を迎へ戦争の前途に對する困難を承知してゐるが、自己の力量を確信し、堅實に決戦の途を歩んでゐる。

カイロ會談等における敵側の威嚇に對し、黙々として實力を以て應酬してゐることは、この東亞の盟主に對し我々をして同じく滿腔の信頼を寄せしめるものであつて、日獨兩國は一蓮托生、相提携して存亡を決すべき戦に臨んでゐるのである。」

イタリア

「日獨友軍と共に再び戦はん」

——ムツソリーニ統帥三國同盟記念放送——

十二月十一日夜、ムツソリーニ統帥はラジオを通じて、左の趣旨のメッセーヂを發表した。

「王室及びその共謀者により犯された恥づべき降伏の結果として惹起された最近數ヶ月の重大事件は、三國條約の盟邦に對するイタリア・フアシスト共和國の政治的地位を何等變更するものではなく、本日の條約締結

の記念日に當り、イタリア社會共和國政府は茲にそのドイツ及び日本との思想的且具體的な協力關係を明白嚴肅に確認するものである。この協力關係は目下共和國が迅速に編成中の軍隊が近く三國同盟の友軍と共に再び戦ふことにより更に有力に表示されるであらう。余は共和國軍隊が再起の意氣に燃え、身心共に更新し、その闘争と血とを以て裏切りと降伏との恥辱を拭ふべきことを確信する。

余は彼等が、凡ゆる戦場においてその優位を證明してゐるドイツ友軍、及びユダヤ金權主義の米國に深刻な敗北を喫させこれに屈辱を與へてゐる勇武な皇軍と共に、戦ふのに値するものであることを深く信じてゐる。イタリアの大小都市に對する空爆、無辜の民衆の犠牲、イタリア國民の創造力の證左である記念建造物の破壊等はイタリアを屈伏させるのに何等役立たないのみならず、却つて憎惡と不屈との精神を鼓舞するだ

けである。

余は日獨兩國の元首、政府、國民がこのメツセーヂを、余の心情に同感して、受容れられんことを希望する。即ちその心情とは誠實と友情とそして長い犠牲の後には必らず勝利の榮冠を獲得出来るとの信念に歸着するものである。」

共同戦争遂行に關する外務省公表

十二月十一日、イタリアの共同戦争遂行に關する外務省公表が發表されたが、その大要は左の通りである。

「三國同盟國間の共同戦争遂行に關する協定調印の記念日に當りイタリア社會共和國政府は左の通り宣言す。

去る九月八日バドリオ政府が敵との休戦に依り犯したる背反行爲は伊國の同盟國たる日獨兩國に對する伊國の地位を些かも變更するものに非ず。イタリア社會共和國政府は三國道義の盟邦と共に共同の勝利獲得に

至る迄戦争を繼續するの決意を有するものなり。」

リツチ大將國防軍總司令官に任命さる

政府は、十二月二十四日、前フアシスト民軍司令官レナート・リツチ中將を大將に昇進せしめ、同時に新編イタリア國防軍總司令官に任命した。

特別裁判所開設

政府は、曩にバドリオの叛逆に共謀した裏切者を處断する特別裁判所を開設する旨發表したが、十二月二十三日の閣議開催後、同日付布告を以てムツソリーニ主班並に政府首脳部を特別裁判所の構成員に任命した。

大東亞戦争二周年記念論調

イタリア各紙は、十二月八日、朝刊紙上に一齊に社説を掲げ盟邦日本の健闘を祈つてゐるが、特にビッコロ紙は次の通り述べてゐる。

「日本軍は大東亞戦の開始以來今日まで數々の戦果を擧げてゐるが、ブーゲンビル、ギルバート、マーシ

ヤルにおける勝利は何れも第二次、第三次真珠灣の勝利といへよう。米國は地域奪還を試みてゐるが、莫大な兵員と軍艦の喪失を受ける以外事實上何等の効果も收めてゐない。

日本軍が占據してゐる廣大な散在地域を米軍が奪取することは至難である。米軍がこれらの地域の中心部に近づくには多大の努力と年月を必要とし事實上不可能である。大東亞戦の開始記念日に當りイタリア國民は良き友盟邦日本の勝利と平和とを心から祈念する。」

三國同盟二周年記念日論調

十二月十二日乃至十三日附各紙は、三國條約調印二周年記念日に關聯し、外務省公表にかかるムツソリーニ統帥のメツセーヂ及びムツソリーニ統帥の

天皇陛下、東條首相以下各大臣宛電報並に獨伊元首間交換電報、ベルリンにおける儀式、日獨伊代表者の演説、

東京の午餐會における重光外相及びスターリン獨大使の挨拶等を掲載し、又十一日に日高大使とラーン獨大使とがムツソリーニ統帥と長時間に互り會談した事實等を報道してゐるが、十二日附メツサジエロ紙は「日本」と題し、

「日本は物心兩方面に於て樞軸と最も緊密な關係に在り、米英に對する皇軍の戰爭目的及びその戦果は總てのイタリア人の知悉してゐるところで、日本は自己の利益の爲にこの戰爭を行つてゐるのではなく共同の敵に對し共同の戰爭を行つてゐるものである。日本は共同の敵米英に深刻な打撃を與へその結果歐洲の戦場から、敵兵力を牽制し、又一方ドイツの歐洲に於ける戦果は敵の海空軍の印度洋、太平洋への進出を不可能にさせ、三國同盟の當然の結果である共同戰爭遂行の成果は將來益、發揮されるであらう」

と論じてゐる。尙右に關聯し十三日附ジョルナル・ドイツ紙は上海にイタリア委員會が結成され、外交

官、領事官を含む在上海イタリア居留民は三ヶ月の抑留生活の後、解放された旨を報じた。

ソ 聯 邦

スターリン議長歸國

スターリン議長は、十二月一日、テヘラン會談を終へ、同日、モスクワに歸還した。

ソ・チ條約成立

政府はチエツコスロヴァキアとの間に友好、相互援助及び戦後協力に關する條約締結に關する交渉を進めてゐるが、十二月十二日、クレムリン宮においてソ聯側全權モロトフ外相とチエツコスロヴァキア全權フイリッゲル駐ソ大使との間に同條約の調印が行はれた。

政府は十三日、右調印にはスターリン議長、カリーニ

ン最高會議幹部會議長始め政府首脳部及びチエツコスロヴァキア側からベネシユ大統領始め要人多數が列席した旨發表した。

尙、十二日調印後、ベネシユ大統領は、政府の觀劇招待に應じたが、カリーニン最高會議幹部會議長、モロトフ外務人民委員も同席したといはれる。

チトー共産政權に軍事使節派遣

外務人民委員部は、十二月十四日、ユーゴスラヴィアのチトー共産政權に對し、軍事使節團を派遣することにまつた旨次の如く發表した。

「政府はユーゴスラヴィアにおいて起つてゐる事態竝に同地の遊撃隊の状況に關し詳細な情報の入手を希望してゐる。ユーゴスラヴィアの反樞軸團體が一種の政權形態になつたことに對し英國竝に米國は歓迎の態度を示してゐるが、ソ聯政府としてはこれこそ對獨戰に對するユーゴスラヴィア國民の積極的貢獻と考へ

てゐる。

以上の理由から政府は軍事使節團を同政權に派遣することとなつた。」

ノヴィコフ駐埃公使信任狀捧呈

エヂプト駐劄初代公使ニコラス・ノヴィコフは、十二月二十五日、エヂプト首相兼外相ナス・パシヤ侍立の下にエヂプト國王ファルーク一世に信任狀を捧呈、更にカイロに亡命中のユーゴスラヴィア國王ピーター二世に對しても信任狀を捧呈した。

最高會議議員選舉延期

最高會議幹部會は、十二月十六日、最高會議議員の選舉を更に明年十二月迄延期する旨發表した。かくて一九三七年の第一回總選舉で選出された同議員の任期は開戦以來二度延期されたが、今回更に一年間延期された譯である。

新國歌制定

人民委員會議は、十二月二十日、國歌インターナショナルがソヴェト體制の勝利によつて發生したソ聯國家生活の根本的變化を表現してゐないことを理由として、これに代るべき新國歌を制定した旨、及び新國歌は三月十五日以降實施する旨併せて發表した。右はコミンテルンの解體とともに本年度における二大事件として各方面の深甚な關心を集めてゐる。

十二月二十一日附イズヴエスチヤ紙は「大ソ聯國歌」と題する社説を掲載、國歌インターナショナルを廢止した理由を次の通り敷衍説明してゐる。

「國歌インターナショナルは一八七一年につくられ、ソヴェト政權樹立以來ソ聯の國歌として國民に親しまれてきた。しかしこの間種々の生活は根本的に變化し、われわれは社會主義社會の建設を完了した。何人といへどもスターリン憲法によつて達成された幾多の功業を理解しないものはない。しかるに數十年前に書

かれた國歌は最早以上の功業を表現出来なくなつたため、國家生活の根柢からの變革を表現し、國民の愛國心を歌ふ新しい國歌を必要とするに至つたのである。」

尙、新國歌の歌詞は、セルゲイ・ミハルコフ及びエリ・レギスタンの合作で、六節より成り、第一節は大ロシアは永久に自由な共和國の聯邦に團結したと述べ、人民の意思により建設された單一強力なソ聯邦萬歳とソ聯邦を禮讃し、第二節は、我が自由な祖國に光榮あれ、國民の親和は力強い防壁であり、ソヴェトの旗、國民の旗をもつて祖國を勝利から勝利へと導けよと國民の愛國心を謳ひ、第三節は雷雨を通じ自由の太陽が輝き、レーニン是我等の道を照し、スターリンは我等を國に忠なるものに又我等を勞働と動功とに奮起させたと述べ、國民が指導者を中心に團結してゐることを示し、第四節及び第六節は第二節の繰返しで、第五節は、我等は戰闘の中に我が軍隊を育成したが、我等は掠奪者を擊滅すべく、戰闘にお

いて幾世代の運命を決し祖國に光榮を齎らすと赤軍を誇り、國民の祖國防衛の決意を謳つたものである。

更に、人民委員會議は、十二月三十一日紙上に、今般新國歌の一般齊唱用、合唱用、管絃樂用及び吹奏樂用樂譜を確定した旨並に新國歌は同日夜半ラジオにより放送され、又樂譜は一月一日の紙上に發表される旨發表した。

因に新國歌の作曲者はアー・ウエイ・アレクサンドロフである。

マグニトブルスク煉鐵爐操業開始

十二月二十八日附各紙は、豫て建設中であつたマグニトブルスク第六高爐の操業開始に關し、大々的に報道してゐるが、右によれば、同爐はモスクワにおいて獨ソ開戦後建設された第二の煉鐵爐で、最新式裝備を有し、國內最大鉄鐵生産能力を有すといはれ、五千人の技師労働者が八ヶ月の記録的短期間に建設を完了し、十二月二十

五日午後三時、第一回鉄鐵流出に成功した。

尙、右の技師労働者の三分の二即ち約三千人が青年労働者であるため、特に同煉鐵爐はコムソモールと名付けられたといはれる。

フランス

ベタン國家主席國民の自肅要望

國家主席ベタン元帥は、降誕祭前日の二十四日、長い間の沈黙を破りラジオ放送を行ひ、フランス國民の政府支持と自肅とを要望した。

ベタン國家主席獨大使等引見

ベタン元帥は十二月二十八日午後アベツツ駐佛獨大使及びフィンク前在デンマーク獨大使と會見した。

人事異動

フランソワ・シャセーニユ

任労働動員局長官

(以上十二月二十八日附)

無任所大臣 ルシアン・ロミエ
警察局長 ブスケ

依願免本官

(以上十二月三十日附)

マルセーユ地方知事 マルセル・ルモアヌ
任内務長官

民兵團長 ジョセフ・ダルナン

任治安維持局長(舊警察局長官を改稱)

ルーサン地方知事 アンドレ・カルマンチエ

任内務省國家警察部長

(以上十二月三十一日附)

情報省國內治安維持の強化宣明

情報省は、内務行政の刷新に當り、十二月三十日、次の通り發表した。

「現下フランス政府當面の最も重大な問題の一つは治安の維持である。フランス人の安全即ち生命並に財産の保護は、國內の治安を維持して祖國の將來を保全するのと同様に絶対に必要である。

國內都市並に村落に互り嫌悪すべき形において不安と脅威とを惹起してゐる匪團とその暴行に對しては政府において一段と取締を強化する決心である。以上の見地から、政府においては、國內の治安維持に任ずる内務省を強化改組するに決定した。従來ラヴァル政府主席は同時に内相を兼擧してゐたが、今回の改組と強化とにより、政府主席は一層有効適切な對策を講ずる權限を附與されることとならう。」

一九四三年度豫算實績

十二月末日ジュルナル紙に掲げられたジェヌーの記事によれば一九四三年度の豫算實績は次の通りである。經常豫算は均衡を保つてゐるが、豫算外支出である休

戦に基く臨時支出(主として獨軍占領費)は北阿方面の情勢變化の結果極めて増大し、支出總額は四千二百億法に達した。

右臨時支出の財源は専ら公債に仰いでゐるが、その應募狀況は比較的好成績で長期及び中期公債さへ應募年額約六百億法に及んでゐる(公債總額千八百五十億法)。

歐洲反攻作戰に叛軍參加

フランス國民解放委員會は、十二月二十八日午後、次の通り發表した。

「國防委員會は反樞軸軍代表と協議した結果、歐洲反攻作戰にフランス叛軍を參加させるに決定したが、解放委員會は右決定を確認した。」

シリア・レバノン委任統治權の一部放棄

十二月二十二日、ダマスにおいて行はれたカトルー及びシリア、レバノン兩政府間の話合の結果左の如きコム

ミニケが發表された。

「北阿政權代表カトルーは従來シリア、レバノン兩國政府の名に於てフランス官憲に依り行使されてゐる職權のあるものを右兩政府に返還することに關し右政府代表との間に協定を結んだ。右協定により共同利益事務は現在の職員及び右に關する法令制定權と共に一九四四年一月一日よりシリア、レバノン兩政府の手に移管せられるべく、右權限移讓の實施項目は追つて協定せられると傳へられる。」

その結果シリア、レバノン兩國政府は所謂共同利益事務に含まれる事務(右は關稅、土木その他の行政事務でシリア、レバノン兩國政府の豫算を以てフランス人及びシリア、レバノン兩國人官吏の共同管理に委ねられてゐるものである)を接受する外、警察内に佛英兩國側の警察とは別個に土人職員のみから成る一部を創設し、専ら國內治安維持に當らせることとなつたが、右に關し北阿政權

當局は、十二月二十五日「右協定は米英情報が傳へる様に佛國のシリア、レバノン兩國に對する委任統治の終了を意味するものでなく、佛國の委任統治國であるところの地位は法律的に何等の變更を受けてゐない」旨を説明した。

滿洲國

國軍武官令改正

軍事部發令

軍事部ではさきに日本の豫備兵制度に相當する劃期的な待命役の制定を行つたが、今回更に武官においてもこれに即應して待命役を設けることとなり、現行の武官令に所要の改正を加へ明年一月五日以降實施するに決定、十二月二十一日、軍事部より發表された。

第三次増稅斷行

——平年度二億四千萬圓——

政府は、決戦下北邊鎮護の重責に任じ、戦力増強並に戦時國民生活の安定に必要な財政需要の増大に應ずると共に、現下喫緊の經濟政策たる購買力の吸收及び消費の規正を推進するため、消費税を中心に戦時増税を行ふこととなつた。

増産推進本部設置

政府は官民各機關首腦者を動員して戦力増強の推進力たらしめ、特に農地造成計畫並に石炭増産の圓滑遂行を期することとなり、十二月三十日總務廳に増産推進本部を設置した。

中華民國

汪主席日滿華共同宣言の意義強調

國民政府汪主席は、日滿華共同宣言調印三周年に當

り、過般の日華同盟條約締結と大東亞共同宣言發出による新局面の展開と日滿華の不可分關係を言及、中國の努むべき本分を力説するとともに、三國共同宣言とその擴大宣言ともいふべき大東亞共同宣言の意義を強調する姿の如き要旨の談話を十二月一日發表した。

「日華同盟條約締結後、余は日華基本關係條約より日華同盟條約に至る經過について談話を發表これを説明し、同時に今後吾人の努力すべき點につき反復指示を行つた。又一般上海青年に對し講演を行ひこの點に關し再三意を盡した。

要するに吾人は劃期的日華同盟條約に對し責任觀念を喚起し負擔力を増大してその實踐を期すべきである。日華同盟條約の規定するところは兩國が相互に獨立自主を尊重し、共存共榮を冀求するところの最高原則である。これが正に東方道義精神の結晶であり、西洋功利主義が單に利害關係に基き權利義務を秤量する

觀念とは異なる。あたかも一家の中に父子兄弟姉妹夫婦各々その力を盡し家業の興隆を圖り、相互に親敬の精神を以て各々その本分に應じて事を行ひ、知識の優劣才能の長短等に拘泥せず、いささかも報酬を期待してゐない。大東亞は恰も一つの家庭で、日華兩國がこの家庭の中にあつて同甘共苦、同生共死をなすことは極めて自然であり且つ當然である。

憶ふに相親しみ、相信することが出来る道義精神は空言に非ずして、實行してその意を深く味ひ力行してこそ始めて日華同盟條約の眞諦を收めることができる。日滿華共同宣言に至つてはそれは即ち三國國交の基點であり東亞樞軸建設の礎石であり、また大東亞各國團結の基本であるが、今やさらに進んで大東亞共同宣言發表され、兩者の精神と意思は自然に一致して東亞各國が相互に扶助する共存共榮の基本原則は益々明らかとなり、共榮圈の範圍もさらに擴大された。今後の

日華關係は大東亞宣言を基礎として東亞樞軸の團結を愈々鞏固ならしめ、大東亞戰爭完遂及び大東亞共榮圈建設の實現を圖るべきである。これ又吾人が今日日滿華共同宣言の意義に對し一層認識を深からしめ力行せんとする所以である。

汪主席の流彈捕出成功

—國府宣傳部發表—

汪主席は、十二月十九日、わが陸軍病院において手術を受けた結果、見事彈丸摘出が成功し、手術後の経過も極めて良好であるが、十二月二十二日國府宣傳部は右に關し次の如く發表した。

國民政府宣傳部公報(十二月二十二日午後五時)

汪主席は民國二十四年十一月中國國民黨六中全會開會式後の記念撮影に際し突然拳銃彈を受け負傷せられたり。當時汪主席は行政院長兼外交部長として國事に奔走し特に日華關係をして好轉せしめずんば止まずの氣魄

のもとに共產黨の覆面的活動を破砕するとともに、米英の甘言を斥けたり。しかも汪主席は當時行政院長兼外交部長たりしたためリースロス幣制改革は主席の調印なき場合成立し得ざる状況にあり。一方抗戰派は該協定成立によつて中國財政の不安は解消するものとして主席の苦心遠謀を無視したるのみならず、主席を敵視して陰謀百出、遂に主席は毒手に遭ひ辭職の已むなきに至り、ために動亂を收拾する能はず。その後一年にして西安事變起り、續いて七月蘆溝橋の戰火勃發せり。主席は當時身に三彈を受け、一は左肩より貫通、一は額頭に入り、負傷七日目に摘出を行ひたるも、その一彈は背骨の第五、第六節に入りたるため八年間しばしば背部に疼痛を覺へたり。しかるに主席は國事多端にしてこれが摘出の暇なく、かくして本年八月背部、胸部及び兩腋同時に疼痛を覺へ、日を追つて加重したるため、國民政府首腦部及び盟邦當局は憂慮のあまり盟邦陸軍病院

に依頼、診斷の結果流彈によるものと判明ここに手術を斷行するに決したり。陸軍病院後藤部隊長執刀の下に行はれたる手術は綿密周到裡に實施され、僅か二十分にして摘出を完了、爾後主席の経過は極めて順調なり。尙外交部長は卓抜なる盟邦醫術に感謝、直ちに政府を代表して謝意を表したり。

行政院會議で八議案可決

國民政府は十二月二十八日の行政院會議で
一、棉花統制委員會暫行章程及び棉花統配實施要綱案に關する件

二、陸軍部再編豫算に關する件

三、外交官、領事官資格審査委員會暫行規則に關する件等八議案を可決した。

人事異動

十二月中に於ける主要人事異動は左の如くである。

任華北治安總署長 陳 達 君

(以上十二月四日附)

任全國經濟委員會委員 孫 雲 章

(以上十二月十六日附)

任二十四集團軍副總司令 孫 魁 元(殿英)

(以上十二月二十八日附)

任安徽省長 高 冠 吾

任江西省長兼九江綏靖主任

任安徽省長 羅 若 強

任安徽省長

任司法行政部長 張 一 鵬

任江西省長 鄧 祖 禹

依願免本職

(以上十二月三十日附)

華北の米英敵産移管完了

帝國政府では米英敵産第二次國府移管の準備を進めてきたが、この程第三種關係分五十八件の準備が完了したので十二月二十一日附を以て國府側に移管することとし、同日午前十一時外交大會において北京日本大使館土田總務部長より王克敏委員長に傳達した。これで第三種敵産中米英關係のものは全部移管を完了した譯で、残るものはベルギーその他國府が宣戰布告してゐない各國の敵産のみである。なほ今回移管完了の敵産は主として北京附近のもので、内譯は教會四十一、學校十五、病院二となつてゐるが、實際上は從來より中國側で使用中的のものである。また第二次通告による第一種一件(天津フイツシャー住宅)第二種四件(天津美豐洋行、北京裕豫公司、六國飯店、ユニオン・チャーチ)も近く移管實施の豫定である。

重慶政權

蔣介石カイロ會談に失望

— ニューヨーク・タイムス紙指摘 —

蔣介石は宋美齡を帶同カイロに赴いたが、カイロ會談では米英側宣傳の道具に使はれたに過ぎず、十二月一日、手を空しくして重慶に歸還した。右に關し十二月八日附ニューヨーク・タイムス紙カイロ特電は蔣介石が今回の會談で失望した事實を確認し、次の通り述べてゐる。

「テヘラン會談で米英ソ三國の諸懸案が全部片付いたわけではないが、尠くとも軍事上外交上の分野において今回の會談により米英ソ三國政府間によりよい諒解が達成されたことは間違ひない。

米英ソ三國政府がイラン國の獨立と領土完整を保障

したのはそれだけでは大して重要性はないが、しかし西亞各國においてソ聯政府が侵略政策をとらないといふ保障を與へた結果にはならぬ。尤もソ聯政府がイラン國の獨立を保障したとしても同政府が所謂戰略國境線を放棄した様子は少しも見えない。テヘラン會談では今後の作戦の關係もあり、バルカン半島並びにユーゴスラヴィア問題が十分検討されたと思はれるが、今回の會談で一番大事な問題は各戦線の優先順位である。しかし反樞軸陣營は依然として歐洲第一方式を維持してをり、重慶政權は優先順位の末尾に置かれたため蔣介石は更めて重大な幻滅を體驗したのである。」

重慶代辯者、テヘラン會談に不満表明

蔣介石がテヘラン會談に招請されなかつたこと並びにテヘラン會談の決議に關する發表が東亞の戦局には一言も觸れてゐないことは重慶側をいたく失望させた模様で、

同政權の代辯者は十二月八日「東亞と歐洲の兩戦局に對する反樞軸側の關心は平等でなければならぬ」と左の如き不満と泣言とをのべた。

「對獨戰は重要な仕事ではあるが、東亞の戦局にも同様の關心が拂はれなければならない。反樞軸國はより一層對日戰に頭を傾けるべきである。

これについて重慶側は更に大量の血を流すことを惜むものではないが、然しもし反樞軸側の援助が速かに與へられるなら流血の犠牲も僅かですむことを知つてゐる。然るに日本は、今回の米英ソ將會談の結果、軍需生産の増強に、國內態勢整備に、將又占領地資源の開發に、萬全の準備を進めて最後の一大決戰に臨む態勢を整へる餘裕を與へられたのである。」

蔣介石ガンヂーに協力要請

十月二十二日附デリー・ヘラルド紙ニュー・デリー特電は次の通り報道してゐる。

「蔣介石は最近ガンヂー翁並に國民會議派の領袖に對しインドの政治的行き詰りを打開し反樞軸軍の戰爭努力に全面的に協力するやう要請した。或るインド人が最近重慶に赴き、蔣介石と會見したが、右インド人がガンヂー翁に對する蔣介石の要請を持つて歸つたもの様である。蔣介石は大規模な東亞反攻作戰を開始するには、先づインド國內の政情をかたづけ、更にベンゴール州の飢饉その他の内政問題を處理しなければならぬといふ意見である。」

マツチ九片、靴一足一千五百弗

—物價急、暴騰—

事變勃發以來七年目の冬を迎へた重慶の市民生活は極めて慘憺としてゐる模様で、デリー・テレグラフ紙重慶特派員は、十二月十三日、重慶の近況につき次の通り報じてゐる。

「重慶には三つのもがつた人種が住んでゐる。即ち

原住民と政府官吏と外國人であるが、原住民の数は田舎から重慶市内に流込む者が多いため、非常に増加してゐる。彼等は全體父祖傳來の商業に従事してゐる。また政府官吏は家族を含めて約二十萬の多數に上つてゐるが、その大部分は南京、上海、漢口などの揚子江下流から重慶に來た人々である。

また外國人の数は、重慶派遣の反樞軸軍將兵を除いても一千名を少し越してゐる。その内英國人は英國大使館やカナダ、濠洲兩公使館員及び新聞、傳道、商業關係を合せて約二百名に達し、在留外國人の中で最大の團體をつくつてゐる。一方、米國人の数は最近急に増大し、將來恐らく英國人の數を凌駕するであらう。それは米國外交官の數が漸次増加してゐるほか、武器貸與實施監督のため多數の代表や専門家が米國から重慶に到來してゐるからである。重慶に住んでゐるものは支那人も外國人も共通に次の四つの點で苦勞してゐる。

即ち住宅難、生活費の高いこと、交通運輸の不便なこと、文化的に孤立してゐること等である。重慶の住宅難のひどいことは想像以上である。政府の高官とか極く少數の富裕支那人、高級外交官また外國商社主人などは別としてその他の人々で各人一室以上の部屋を持つてゐるものは極めて少い。民衆の大部分は竹で天井のつくられた土製の家に住んでゐる。政府の官吏は一番ひどい目に逢つてゐる。彼等の俸給は戦前に比して十倍乃至二十倍になつてゐるが、食糧の平均價格は現在では戦前の百五十倍に達してゐる。また製品價格や勞銀も非常に高い。それ故官吏達がどういふ風にやりくりしてゐるかは全く謎である。外國人は一切の食糧とかその他の物品を自由に手に入れ得るが、生活條件は次第に悪くなつてゐる。英國人は磅を法定比率で法幣と交換しなければならぬが、一磅の實際の購買力は二志以下である。外國人が適當な部屋を借りるには一月最

低七十五磅乃至百六十磅を支拂はねばならない。なほ開物價の代表的なものを掲げれば次の通りである。

- 一、ストーヴ用石炭一噸 三十磅
- 一、紙巻煙草拾本 六乃至八志
- 一、マツチ 九片
- 一、安全剃刀の刃一枚 五志乃至七志
- 一、インクの小瓶 二磅十志

又、タイム誌重慶特派員は次の通り報じてゐる。

「重慶の生計費は開戦當時の百六十四倍に達した。(二年前は八十倍であつた。)法幣の價の低落はある程度抑止されてゐるが、全面的に阻止されてゐる譯ではない。重慶のインフレーションの原因としては一般的原因のほかに支那に特有な原因がある。重慶政權の豫算は戦前のそれに比して四十五倍に達してゐるが、歳入は歳出の五分の一以下といふ甚しく釣合のとれない豫算である。また市場に現はれる僅かな商品を買溜

するものがあるが、この買溜めの禁止がうまく行はれてゐない。

重慶政権は豫算の平衡を計るため米國から紙幣を輸入してゐるが、これ等の紙幣の購買力はぐんぐん低下してゐる。現在、物價は天文的數字に上つてをり、かつては六弗で買へた靴一足が一千五百弗、二仙であつた米一椀が六弗五十仙になつた。

タイ

日タイ同盟締結二周年記念式典舉行

十二月二十一日午前十時から日タイ同盟締結二周年記念式典が行はれ、日タイの固い締盟を新にした。タイ側よりビョン首相、ピナット国防相等、日本側から坪上大使等出席、先づビョン首相起つて香及び聖火をそなへた後、日タイ同盟に依つて敵米攻撃滅に邁進せんとの決意

に溢れた式辭を朗讀、坪上大使はこれに答辭を述べた。

特別議會閉會

人民議會は、十一月一日、特別議會を開會、以來毎週木曜日毎に審議を重ね、その間三億三千九百萬バーツに上るタイ國未會有の決戦豫算を初め、獨身稅法、關稅法中改正法、その他多數の重要案件を審議通過し、タイ國の決戦態勢確立に資したが、十二月三十一日も午後二時より開會、残る二、三件案の審議を行つた後、議長より今次特別議會の閉會を宣し、引續いて、閉會に際しビョン首相より議員に宛てたメツセージを朗讀、散會した。他方、印紙稅率引上法案、飲食店、旅館稅新設法案、教育法改正案等は二十三日の議會において政府原案通り可決された。

金輸出禁止令公布

政府は、金塊相場の異常な昂騰とその影響の少くないのに鑑み、十二月十五日附勅令をもつて左の如き金輸出

禁止令を公布、即日實施した。

「兩今金の輸出はその形状の如何に拘らず、また合金たると裝飾品たるを問はずこれを禁止す。但し大藏大臣の許可ありたる場合はこの限りに非ず。右法令違反者には二十年以下の體刑或は二萬バーツ以下の罰金の何れか又は兩者を科し、該密輸物件はこれを沒收す。」

新年度豫算内容

十二月十六日の議會において滿場一致可決された新年度豫算は左の通り。(單位千バーツ)

歳出總額 三三九、七四一

内 譯

一般歳出 一八八、三〇〇

投資會計歳出 一五一、四四一

歳入 一八八、三〇〇

これを本年度豫算歳出總額二億八千萬バーツ(追加豫算を含む)、歳入一億四千八百萬バーツに比すれば著しい

増加で、殊に一般歳出は本年の一億五千萬バーツに比し三千萬バーツの増加を示してゐる。右歳出増加に伴ふ赤字補填には
一、歳入の自然増加
一、公債發行
等の手段が考へられてゐる。

主要人事異動

十二月中に於ける主要人事異動は左の如くである。

國務次官陸軍中將

ピナット・クリアンサクピチット

任國防大臣兼國土防衛顧問

陸軍司令官補陸軍中將

サワット・サワット・コロナン

任陸軍副司令官兼防空義勇隊長

陸軍中將 チラ・ウイチット・ソングラム

陸軍中將 イン・テイパノン

任陸軍司令官補

前駐日大使官参事官

タヴィ・クヱエイクン

任外務省西方政務局長兼商務省外國貿易局長

(以上十二月十四日附)

農務副大臣 ウタイセン・マニイ

任内務副大臣

海軍大佐 サンウオン・スワーン・チープ

任無任所大臣兼内務代理大臣

(以上十二月二十六日附)

フィリピン

「政府と國民の親和期待」

——ラウレル大統領放送——

フィリピン共和国は、十二月十四日をもつて獨立ニケ

月を迎へたが、同夜八時半よりラウレル大統領はマニラ放送局から國民に對し次の如く放送した。

「わが共和国は誕生後二ヶ月を経た。この二ヶ月は吾人の生活としては極めて短いにしても、國家にとつては極めて有意義のものであつた。しかし吾人の精神は昔に較べて健全且つ充實されたものとなつた。又政府はその機構の凡ゆる分野に互り、それを完全に國民の福祉のためにやるやうに再建すべく努力してゐる。しかしこの努力は國民の政府に對する忠誠と眞剣な協力とを得て始めて實を結ぶのである。政府と國民とは今後益々相親しみ且協力し、相互に信頼を深めなければならぬ。個人主義と遊惰とが幅をきかせた時代は今や過去のものとなつた。個人主義は新秩序の下では存在を許されないのである。今日の社會は國民がお互に兄弟であることを念頭におき、苦難を克服して幸福を獲得するために努力し、國家の成長を爲し遂げなければ

ならない。新共和国はかうした政府と國民の親和によつてのみ形造られるであらう。」

議會諸法案可決

- 一、共和国大統領に一九四四年度豫算の範圍内で政府行政機構の改廢統合を行ひ得る權限を與へる法案
 - 二、共和国國璽決定に關する法案
 - 三、水源地附近の森林伐採禁止に關する法案
 - 四、自動車登録法の修正に關する法案
 - 五、共和国國祭日決定に關する法案
 - 六、タルラニツク市ウオードネルを國立墓地とする法案
 - 七、郵便檢閲に關する法案
 - 八、共和国公債發行に關する法案
- ついで翌二十一日、左の通り新年度豫算案他二件を可決した。

(イ) 豫算案

曩に大統領が送付した豫算教書に附屬してゐるものを更に豫算委員會において法案として提出、今回可決されたものであつて、原案との比較は次の如くである。

(單位ペソ)

歳出合計

- 一、二一、八四三、四〇七(七、〇〇一、七九七増)
- 經常費 六〇、〇〇三、四一〇(五、七七五、九四〇増)
- 臨時費 五六、三七五、八八五(四、一八八、二五五減)
- 特別費 五、四六四、一一二(新規)

(ロ) 所得税法改正案

所得税の累進税率變更及び最高税率の四割五分を五割に引上げること並びに若干の他の税率引上げにより約六〇萬ペソの歳入増加を見込むものである。

(ハ) 水牛又は家畜に對する不當酷使禁止法案。

ビルマ

シヤン地方軍政撤廢

—ビルマ方面最高指揮官布告—

シヤン諸州、カレンニ諸州及びワー地方のビルマ領編入に關して、帝國政府は、去る九月二十五日日緬兩國間に締結された「シヤン地方等におけるビルマ國の領土に關する條約」により三ヶ月以内にシヤン地方の軍政を撤廢する旨確約したが、ビルマ方面陸軍最高指揮官は、十二月三日、右條約に基き、同二十三日以後軍政を撤廢する旨、次の如き布告を發した。

「昭和十八年十二月二十三日を以てシヤン州政廳の施行地域に於ける軍政を撤廢す」

「シヤン・カレンニとの結合再現」

—バー・モウ國家代表聲明—

バー・モウ國家代表は、十二月二十四日、シヤン地方の士侯、住民等に對し要旨次の如き聲明を送り、同地方に對し、ビルマ國行政が實施されるに當りビルマ國永遠の獨立及び隆盛のため固い結合と協力とを要望した。

「シヤン、カレンニの人民とビルマ國民とは皆て血によつて繋がる兄弟でありながら、英國の魔手によつて分離されてゐた。然しこの血の繋がりは、今再びわれわれを堅く結びつけたのである。われわれが歴史を緝くとき、そこにはこの歴史を通じてビルマとシヤン、カレンニが同一の名によつて共存し、一人の指導者によつて統治されてゐた事實がはつきりと證明されてゐる。往時のビルマ王國はシヤン地方をも包含してゐたし、又バガン共の他の王朝時代王位に就いた主權者は、單にビルマ人のみではなく、アテインカヤラザテインシヤン及びエイハットウの如き王たちは、實にシヤン出身であつた。われわれの種族的結合と相互愛とが憎むべき英

ウイン内相シヤン總督を兼任

國の手によつて分離されるまでは、ビルマとシヤン、カレンニは永年に互つて一つの血、一つの聲、一つの指導者の下に兄弟の如く結ばれ續けて來たのである。ビルマが光榮ある獨立を獲得した直後、われわれの結合は遂に再現されたのである。それは歴史を通じてのわれらの必然的運命である。今この喜ぶべき佳日に際して、再び獲得したこの貴重な土地を隆盛ならしめるため全力を盡して活動されんことを切望する。われわれは兄弟なのである。強力に結合した國家は進歩し得る。進歩によりビルマ國は永遠に光榮ある獨立と繁榮とを確保し得るであらう。今日以後シヤン、カレンニの人達は完全にビルマ國民となつたのである。余は統一ビルマ國の國家代表となつた今日、こゝに正義に立脚し、ビルマ人たるシヤン、カレンニ在來の人民たるとの差別なく、公平に統治することを宣言する。」

政府は、日本の軍政廢止に伴ひ、ビルマ領土に併合されたシヤン地方に對する最高行政長官として、現内相ウ・バ・ウインを現職のままシヤン地方總督に起用することと決定、十二月二十三日附を以て正式發令した。

インド

アイル獨立黨の激勵に感謝

—ポース首班聲明—

全アイルランドを英國の羈絆から脱せしめるべく英領北アイルランド六州をアイルに併合することを目的とする反英團體「綠色戦線」が、去る十一月五日、ポース自由インド假政府首班に對し激勵電報を送つた（國際月報第三十六號各國動向中アイルの部参照）のに對し、ポース首班は、十二月二日、新聞記者團と會見、アイル獨立團體から寄せられた同情に感謝の意を表する聲明を發す

ると共に、インド獨立への決意を再度強調した。聲明の旨は左の通りである。

「アイル獨立黨から寄せられた深甚な同情に對して予は眞に感激に堪へない。吾々は國家の自由獲得につき從來行はれて來た運動を詳細に互に研究したが、獨立獲得の方法として吾々の最も大きい參考となつたものはアイルにおける獨立運動の方法であつた。アイルはインド民衆と同様に英帝國の重壓と擄取とに多年苦惱の日を續けて來たのである。英國の政策はインドにおけると同様アイルの民衆を暴虐と偽善との犠牲とするにあつた。かく見る時インド民衆とアイル民衆とが共通の友情の絆をもつて相結ばれてゐることが分るのであらう。英國の暴虐に對し決然戦ひを挑んだアイル愛國者の火と燃える熱意はインド獨立に邁進する吾々の模範であり大きな感銘でもあると言はなければならぬ。この地に在つて祖國の解放に日夜努力してゐる予の心情を強く

動かすものはアイルに在る友人からの祝辭であり、予はこの祝辭を受けて、會で遊んだ美しいアイルの山河に接し不斷の交情を新たにする思ひがある。吾々の正義の旗の征くところ、吾々は如何なる犠牲をも顧みず、一歩邁進するのみである。その時にこそ勝利は把握され、インドの自由は獲得されるであらう。」

「國境進發の日近し」

——ボース首班民衆大會演説——

自由インド假政府首班スバス・ボース氏は、十二月二日、昭南市廳舎前廣場において開催されたインド民衆大會において大要次の如き烈々たる演説を試み、インド國軍の印緬國境への進撃と相俟つて、假政府も近くビルマ國內に進駐し自由獨立獲得に全力を集中する旨を闡明した。演説要旨左の通り。

「現在我々の部隊のあるものは印緬國境に進出してゐるが、近く更に多數の部隊が國境へ向つて進軍する

であらう。今やインド獨立獲得闘争の豫備的段階は完全に達成され勝利に必要な凡ゆる條件は完成された。

現在インド本國からはなれてゐるインド人、特に中立國並に友好國に在住するインド人は單一な指導のもとに組織され、本國にある同胞に最大の援助を與へる決意を固めてゐる。史上はじめてインドの東方國境は解放されインド人が好むまゝに出入し得るやうになつた。また自由インド假政府が設立され、インドの獨立抗争に對する政治、經濟的前提條件は成熟し、英印軍の大部分も自由のための闘争を支持するに至つた。要するにインドの内外においては、最後の闘争を開始し、之を勝利に終らせる準備が完全に整つたのである。予は近くビルマに向つて出發する豫定だが、いつの日にか諸子と再會し得るか判らない。然し予が何處にあらうとも、諸子はあたかも予が諸子の間にあつた時よりも以上の情熱をもつて行動されたい。インド國民軍は、國

境において闘争を開始する時、全東亞のインド人がその背後にあることを感ずるであらう。」

ベンゴール州飢饉並に惡疫の慘狀

インド事務相エイメリーは、十二月十六日、英國下院において、次の通り發表した。

「ベンゴール州全體での餓死者の数は判らないが、一九四三年八月十六日から十二月十一日迄の期間内にカルカッタ市で、

- 一、飢饉に憫み、病院にかつぎこまれた数は、一萬六千二百八十五人

一、病院での餓死者は、六千三百三十六人である。さらに八月一日から十二月十一日迄の間に、カルカッタ市の警察、その他救濟團體が處分した死體の数は九千二百十六人である。又六月二十七日から十一月十三日迄にベンゴール州全體でコレラによつて死亡した者は、七萬七千九百三十八人である。」

ケーシーのベンゴール州知事任命不評

英國政府は、十二月二十四日、インド政局の行き詰りにベンゴール州の食糧危機に直面し、窮餘の一策として、西亞常駐相リチャード・ケーシーをベンゴール州知事に任命したが、各方面の報道を綜合するに、全インドは右任命に少なからず不満の様子で、英字紙ステーツマン紙すら、

「従來の經歷に徴すれば、ケーシーの材幹は一流で、經驗も廣いと思はれるが、果してそれだけでベンゴール州知事の重職に適任かどうかは疑問である。」と述べてゐるし、またボンベイ・クロニクル紙も、

「インド人に平等な待遇を與へない濠洲人がインドの州知事に任命されたのは、インド人の國民的體面に對する冒瀆である」と非難してゐる。

ジンナー完全獨立を要求

首相ジョン・カーチンは、十二月三日、西南太平洋反樞軸

濠洲

全インド回教徒聯盟總裁ジンナーは、十二月二十五日、同黨の大會席上、重ねてインドの完全獨立を要求、次の通り述べた。
「我々は、インドに對してのみでなく、全世界に對してインドが一國家であることを證明した。我々は我々に屬する全領土の主權を把握し、その領土全部を統治するまで満足しないであらう。英國が、今次大戰に勝つには少くともインド一部の支援を得てのみ可能である。然しインド各派は英國より遠ざけられて不満と失望との状態を續けてゐる。英國はインド回教徒聯盟の協力を拒絶した。」

カーチン首相戦局を語る

エヴァット外相は、十二月二十七日、次の通り言明した。
「ニュージールランドと共同の政策協議
濠洲ならびにニュージールランド兩國代表は、來る一月會議を開催し、西南太平洋における兩國共同の政策について協議を遂げること決定した。」

飛行士海外に派遣の状況

空軍司令部は、飛行士の海外派遣状況に關し、十二月十四日、次の通り發表した。
「現在飛行士一千名以上がインドに在り、その大多數は英空軍に編入されてゐるが、空軍として獨立してゐる爆撃機、戦闘機、偵察機の各部隊もある。濠洲飛行士の中には既に二年に亘つて印度方面對日戰爭に参加してゐる者もある。北阿、地中海方面では一萬八千名以上に及ぶ濠洲飛行士が對獨戰爭に参加して居る。」

軍總司令官マックアーサーと重大會談を遂げた旨發表した。會談の行はれた場所はマックアーサーの司令部と見られ、カイロ會談と併行して西南太平洋反樞軸軍及び濠洲の戰爭遂行方針に關する種の重大決定が行はれた模様である。カーチン首相の言明要旨は左の通りである。

「濠洲は従來の防禦作戰から攻勢作戰に入ったのである。そして今回の會談においては、余はマックアーサーに對して政府の諸施策の概要を説明し、彼の全幅的支持を得た。更に余はマックアーサーとカイロ會談の結果についても談合した。對日戰爭の前途は「長期作戰」であり、太平洋戰爭には何等勝利への近路は存在しないことを覺悟しなければならぬ。更に對日戰爭の歸趨は歐洲戰爭の如何によつて決定されるのであり、歐洲における戦局の推移を見極めた上でなければ、太平洋作戰に最後の勝利を望むことは出来ないであらう。」

南阿聯邦

スマツツ首相戦局の困難を強調

スマツツ首相は、十二月六日、ロンドンからの歸途カイロに立寄り、米國大統領ルーズヴェルト並に英國首相チャーチルと會談し、新聞記者團に對し、左の如く戦局の前途が困難であることを強調した。

「我々の前途に横たはる道は未だ遙に遠く、困難な事業が眼前に控え、勝利を得るためには苛烈な戦闘を経なければならぬであらう。我々は今後百年にも互つて、その重大性を失はないやうな重要會談の續開されるのを見た。一九四四年こそは多分世界歴史上最も決定的な年となるであらう。」

尙、十二月十四日、ブレトリアに歸還後記者團を引見し戦局の前途に對する樂觀論を戒め次の通り述べた。

「反樞軸陣營の戰略的外交的態勢は、著しく好轉するに至つたが、一九四四年の春までに戦争が終るだらうなどといふ樂觀論には同意出来ない。ドイツ軍は依然として善戦を續けてをり、更に一九一八年當時のやうにドイツ國內には對立的な黨派が存在しない。」

尙、第二戦線に關しては、

「第二戦線は展開されるであらう」と述べただけで、時期については一切言及を避けた。

カナダ

空軍の死傷者數

ラ・フレイシユ國防相は、十二月五日、戦闘機乗員よりも爆撃機乗員養成に主力を注いでゐる旨言明したが、更に開戦以來現在迄のカナダ空軍の死傷者數は、一萬二千五人に上ると發表した。

軍艦建造高

政府は、同國の造船所が、十一月中旬に十一隻の海軍艦艇を建造し、新記録をつくつた旨十二月十三日發表した。

アルゼンチン

全政黨解散

政府は、十二月三十一日、全政黨に解散を命じたが、その理由に關し同日次の當局談を發表した。

「アルゼンチンの各政黨は國民の政治觀を代表してをらず、選挙詐欺、賄賂等を政治運動の具に供する墮落振りであつた。政府はアルゼンチンの政治生活を祖國の傳統に恥ぢない常道に引戻すべく確乎たる決意を固めた。」

佛國解放委員會事務所閉鎖

政府は、十二月初旬ブエノスアイレスに在るフランス國民解放委員會事務所の閉鎖を命じた。閉鎖の理由については何も公表されてゐないが、政府は同委員會に共產分子が入つてゐるかどうかを調査するために一時閉鎖命令を出したもので、若し調査の結果嫌疑が晴れば事務所を再開させるものとみられてゐる。なほ去る六月四日の革命後、多數の團體が共產主義の色彩があるといふ理由から閉鎖された。

對米輸出超過に金塊引上

米から金塊引出し

政府は米國への輸出超過の結果、過般來米國から多量の金塊を引あげてゐるが、最近合計百二十萬弗の金塊が米國からブエノスアイレスに到着した。これにより現在までに米國から引出した金塊は總計一億六千萬弗となつた。

パゴ公共相辭職

公共事業相リカルド・パゴは豫て辭表を提出中であったが、ラミレス大統領は、十二月二十二日、これを受理した。パゴ公共事業相の後任は海相ベニト・スエイロが臨時に兼任することに決定した。

チリー

國內擾亂分子に嚴罰警告

内務省は、十二月二十八日、左の如き聲明を發表した。

「政府は民主主義思想を有する著名分子が國內在任の外國分子と結託して積極的に公衆の安寧を擾亂し、國家の安定を毀損するが如き叛逆的宣傳を敢て行つてゐることを發見した。これら分子は、事實無根の噂にもとづいて右の如き宣傳を行ひ、且つ彼等の非愛國的企圖を支援する一部軍人のために輿論を獲得しようとする。」

してあらゆる手段を講じてゐる。政府はかうした叛逆行為を斷乎排撃する。そして即時その責任者の徹底的處罰に必要な措置を執るため準備中であることを國民の前に聲明する。即ち在任外國人で、チリーの歡待を受ける資格のない者は、國外に追放し、又事件の責任者である内國人に對しては普通裁判に附する所存である。」

今回の事件に連累した者の氏名は發表されてゐないが、諸新聞の報道によれば、外國人だけでも四十名を超えてゐるといはれる。

尙、在サンチャゴ、アルゼンチン大使館は本事件に關聯し、左の如き聲明を發表した。

「權威ある席上及び新聞紙上においてアルゼンチンが今回の陰謀に關係あるとの説をなす者があるので、當大使館はアルゼンチン政府の名をもつて、右風説は全く事實無根の情報にもとづき行はれたものであること。」

とを斷言する。」

リオウエラ上院議長辭職

上院議長グスタヴォ・リオウエラは十二月二十七日、政争問題により辭職した。

ブラジル

軍事使節團北阿到着

十二月十二日アルジェー發及び翌十三日ワシントン、發U・P電報によれば、十二月十三日、ブラジル參謀本部代表マスカレーニヤス・ダ・コスタリ軍事使節團一行は北阿反樞軸軍總司令部に到着したと傳へられる。右使節團は北阿戦線を視察、ブラジル軍地上部隊並に空軍の北阿派遣につき協議を行ふといはれる。

ボリヴィア

軍部革命勃發

十二月二十日、ボリヴィア國においてヴィクトール・パス・エステンソローを首班とする國家革命黨及陸軍少壯士官の一群に依り軍事的クーデターが行はれた。

革命軍はラ・パスにおいて四時間に互り政府軍と小競合ひの後、ベニヤランダ大統領を初め大臣の大多數その他の要人の逮捕に成功し、次いで間もなく全国的に互り勝利を獲得した。エステンソローはベニヤランダ大統領に對し大統領辭職聲明に署名させ、政廳を占據した。

革命の原因として一般に擧げられてゐるものには、

- 一、高壓的な米國の所謂「善隣政策」に對する反感の表れであること
- 一、國家主義者及び少壯軍人は大統領ベニヤランダの政治的、經濟的施策に反感をいだき、そしてルーズヴェルトの傀儡に墮した現状を打破し、自主獨往の

政權樹立を求めて止まなかつたこと等がある。尤も、最近に至つてベニヤラシヤ政權は、米國政府の高壓政策に堪へ切れず、錫の全生産を獨占する米國政府の舊契約の改訂にも難色を示し米國のポリヴィア國有キニーネ工場乗出しに就てもこれを拒否してゐたが、兎に角國民生活の安定は事毎に脅かされ、これ以上現政權に放置しておけば何時如何なる國家的屈辱を負はされるかも知れないといふ國家的不安が少壯軍人を主體とする直接行動を勃發させたものとみられる。

新内閣成立

新内閣は、十二月二十日正午成立したが、その顔觸は左の通りである。

- 大統領 グワルベルト・ヴィリヤロエル少佐
- 大藏大臣 ヴイクトル・パス・エステンソーロ
- 外務大臣 ホセ・タマヨ

- 國防大臣 ホセ・セレスチノ・ピント少佐
- 内務大臣 アルツィロ・タボルガ少佐
- 公共事業大臣 アントニオ・ボンセ少佐
- 教育大臣 ボルエ・カレロ少佐
- 經濟大臣 グスターヴォ・チャコン
- 農業大臣 カルロス・モンテネグロ
- 労働大臣 ヴイクトル・アンドラーデ
- 書記官長 アウグスト・セスベードス

「國際的立場に變更を加へず」

——ヴィリヤロエル大統領聲明——

ヴィリヤロエル大統領は、十二月二十日、左の如く聲明した。

「吾人は國民をして其の權利の自由行使を再び可能ならしめんとするものである。ポリヴィアの國際的立場には何等變更を加へず既存の國際約束は一切尊重する。國內政策面においては眞のデモクラシーの確立を

期し、労働階級に對し能ふる限り大なる福祉を齎すことを企圖してゐるものである。」

「祖國を愛する以外餘念なし」

——エステンソーロ新藏相聲明——

エステンソーロ新藏相は、十二月二十日、ラジオを通じて國民に呼び掛け左の如く述べた。

「公正を缺く時代は終焉を告げ税政は打倒され、政治家が國事に専念しないで自己の利益の爲に取引をなす時代は終つた、國家はベニヤラシヤ一族及其の一味の封建的權力より解放せられた。ベニヤラシヤ政權は表面明らかにデモクラシーを標榜してゐたが、それは四ヶ年餘の永きに互り政權を掌握する爲の一段に過ぎなかつたものである。陸軍少壯士官によつて實現された今回の革命運動は、鑛山企業改革の爲に新しい途を選んだ。吾人は全體が吾々を支持すること確信するものである。何となれば吾々は只管ポリヴィアを

愛する以外何等餘念がないからである。」

尙、エステンソーロ新藏相は新聞記者團に對し次の如く述べた。

「革命政府は聯合國に對する全面的協力政策を執ると共に國際約束を遵守し、大西洋憲章にも参加するものである。即ち聯合國側に立ち何等國際的立場を變更するものでなく。」

「民主主義と對米協調に基底」

——タマヨ新外相聲明——

尙、タマヨ新外務大臣は新聞記者團に對し、
「ポリヴィアの對外政策は民主主義と對米協調に基底を置くものである。そして吾人の義務はデモクラシーの勝利を招來させるに在る。従つて對米協力は嚴密に之を持続する。右は今次革命の目的の一つを爲すものである。」
と聲明した。

パラグアイ

對亞通商條約其他諸協定締結

モリニゴ大統領は、十二月中旬、外務、土木兩大臣を同伴アルゼンチンを訪問し、亞巴兩國通商條約及び支拂協定の批准交換を行った外、關稅同盟協定その他兩國との間の特殊利益に關する諸協定等に署名した。

五ヶ年建設計畫發表

モリニゴ大統領は十二月二十四日夜、ラジオ放送を行ひ、パラグアイの五ヶ年建設計畫を發表した。モリニゴ大統領はその演説で五ヶ年計畫は全國民に繁榮を招來することを目標とするものであり、全國民は政府に協力して直ちに建設工作を開始するやう要請した。

パナマ

フアブレールハ外相對米抗議

—米國兵の暴行沙汰頻發—

フアブレールハ外相は、十二月二十日、パナマ駐米國大使に對して同國駐屯の米國兵の行爲に關し嚴重なる抗議を行った。開戦以來、米國はパナマ運河防衛を口實に運河地帯外のパナマ領内にも續々米兵を送りこんだが、これ等米國兵の不遜なる態度は最近目に餘るものあり、各種の暴行沙汰頻發し、パナマ大統領が公用車で通行中米國兵に停止され、車内を搜索された事件まで發生した。フアブレールハ外相はその對米抗議において今後米國兵の行爲が改善されぬ場合はパナマとしても何等かの措置をとらなければならぬであらうと警告してゐるといはれる。

スペイン

フランコ統領國內戰線の強化を強調

スペイン黨領フランコ將軍は、十二月十日、フアランへ黨支部長會議最終日に當り國內戰線の強化を強調して次の通り演説した。

「スペイン政府の政策は確乎且つ冷靜以て誤解を避け、また極く少數の者が事を構へやうとする企圖を未然に防止しなければならない。我等の敵が好むが如き態度は避けるべきである。失業問題對策は特に急を要する。過去七年間に各地方において多くのことがなされたが、公共事業の利用によつて失業者を一掃すべきである。」

フアランへ黨各地區指導者大會開催

フアランへ黨各地區指導者大會は、十二月十三日、アレージェ書記長が議長となり、陸相アセンシオ將軍、その他國、黨の首腦列席の下に開かれた。アレージェ書記長は開會に當りフアランへ黨の使命を強調し、スペインは共産主義の驅逐を第一の目標とする旨言明した。

フランコ統領民軍解散を發表

フランコ統領は、十二月二十日、フアランへ黨各州指導者會議の閉會式に當り次の通り言明した。

「フアランへ黨とスペイン軍とが統合された結果、民軍は最早必要がなくなつたので今回會議の提案に基き民軍を解散するに決定した。更にフアランへ黨各機關に付いてもスペイン國民生活の正常的發展に必要な否かを考慮適宜改廢する方針である。」

フアランへ黨員對米英不滿爆發

米國政府の遣り口に不滿を抱くスペインのフアランへ黨員二名は、十二月十八日、ヴァレンシア駐米國領事館に殴り込みを行ったが政府は右に關し、米國政府に遺憾の意を表明するとともにフアランへ黨員たる犯人二名を同黨から除名した。犯人は十九歳と二十二歳のスペイン青色師團員だが、スペイン政府を反樞軸陣營に引ずり込まうとする米國の惡毒な宣傳工作に憤激したあまりと

云はれる。

又フアランへ黨員數名がサラゴサ駐劄英國領事館に闖入、副領事に對し侮辱を加へた問題に關しフランコ統領は英國政府に陳謝の意を表明したが、英國政府はこれを受諾しなかつたと傳へられてゐる。

政府、政治犯一千三百名釋放

政府は、十二月二十七日、官報をもつてスペイン内亂の政治犯一千三百名を宣誓釋放した旨發表した。

右に關し法相ブラス・ベレス將軍はフランコ統領は廣義における大赦を宣言しないで犯人の處刑期間を縮減し、既に宣誓釋放制度により一九四〇年に一萬一千名、一九四一年に四萬七千名、一九四二年に三萬名、一九四三年に七萬名の政治犯人を釋放してゐると述べた。

ホルタナ外相イベリア・プロツク謹啟

外相ホルタナ伯は、十二月二日、ポルトガル首相サラザール博士に對し通電を發し、サラザール首相が過般の

演説において「イベリア・プロツクの強化」を強調したことにつき、感謝の意を表明した。右電報においてホルタナ伯はスペインとポルトガルとの間の統一と友情が愈々強化されつゝある旨を強調し、更に「イベリア・プロツクは將に平和の島と化しつゝあり。スペイン、ポルトガルの兩國が人道のために今後も協力を続けることが出来ることを欲する」と述べた。

スエーデン

ハンソン首相中立堅持を強調

首相P.A.ハンソンは、降誕祭のラジオ演説においてスエーデンの中立堅持を強調して次の通り述べた。

「スエーデン國民はスエーデン中立が言葉だけのものではないことをよく理解すべきだ。他國との友好關係を無意味に詮議しないでスエーデン國民は中立維持の

ため常に一致團結しなければならぬ。現在スエーデンの地位には非常な不安はないが、將來においてもスエーデンが危険域外に留まり得るとの保證は出來ない。

外交官異動

政府は外交官の異動を次の通り發表した。

ソフィヤ駐劄代理公使、スヴェン・アラード
任重慶政權公使
(以上十二月十五日附)

ブラジル駐劄公使、グスタフ・ワイデル
任ポルトガル駐劄公使

外務次官、R・クムリン
任ブラジル駐劄公使

外務省總務局長、テイベルグ
任ブルガリア代理公使兼公使館參事官

フィンランド公使館參事官、R・R・バーゲ

任外務省總務局長

(以上十二月十八日附)

オスロ大學生逮捕問題に關し對獨抗議

ノルウエー駐屯獨軍當局のオスロ大學生逮捕問題に關しスエーデン政府はさきにドイツ政府に對し抗議を申込、これに對しドイツ政府は、十二月四日、スエーデン政府の抗議を一蹴した回答を發したが、スエーデン政府は十六日に至り再びドイツ政府に對し重ねて抗議を申込んだ。抗議内容はまだ發表されないが大體次の如く相當強硬なものといはれる。

「ドイツ政府はドイツとノルウエーとの問題については他國の干渉を許さないといつてゐるが、スエーデン、ノルウエー兩國關係は極めて密接であり、スエーデン政府はノルウエー國內事件に無關心たり得ない。従つて今回の如き事件は獨瑞兩國關係に惡影響を及ぼすであらう。而してスエーデン國內ではスウェーデン

政府は右事件につき何等かの對獨報復措置に出るだらうとの噂が行はれてゐたが、スエーデンはかかる措置は考慮してゐない模様である。」

フィンランド

リチ大統領抗戦決意強調

フィンランド獨立の二十六周年記念日に當りリスト・リチ大統領は、十二月六日、ツルクでフィンランド國民の不屈な抗戦決意並びに小國の獨立を強調して次の通り演説した。

「我々は困難と危険を通過して來た。今や我々は無條件降伏の勧告を受けてゐる。然し我々は既に無條件降伏の一例を目撃し、先例に倣ひたくはない、又フィンランド國民にはソ聯に無條件降伏が可能であると思つてゐるものは一人もゐないと余は確信する。何となれば

無條件降伏が我々にとつて何を意味するかを理解してゐるからである。フィンランド人はスポーツにおいて根氣のある選手であるといふことは世界に知られてゐる。これと同様に國家の大闘争に於ても決勝點テーパーの前最後の苦しい一杆に入る時、意志力と持久力を發揮する國民が勝利を得るのである。我々は戦争を繼續する。小國は自由と獨立の擁護者であるといふことは世界の到る處で證明されるだらう。小國の滅亡は不正行爲ばかりでなく全人類にとつて一大不幸である。後二三年で今次大戰は前の世界大戰と同じ時期を繼續することとなる。前大戰には主要交戦國は疲勞困憊して戦争は自然終結したが今日では事態はそれほど悪化してゐない。参戦して敗北しその領土を占領された國家があることは事實であるが、然し主要交戦國はまだ強力であり、その或るものは勢力の資源が増大しつつさへある。今次大戰の終結をまだ見ることは出來な

5.1

豫備將校團大會を開催

——抗戦の決意闡明——

豫備將校團は、國防相ワルテン將軍臨席の下に十二月四日、ヘルシンキで大會を開催、リチ大統領ならびにフィンランド軍總司令官マンネルハイム元帥に對し「戦争の最後の決定のみが祖國を獨立と幸福とに導くものである」旨の電報を發し、不屈の抗戦決意を闡明した。

對米戰債辨濟

政府は、十二月十四日、本年度分の對米戰債二十四萬弗を支辨した旨發表した。

ハンガリア

政府女子登録實施を發表

政府は、十二月十四日、十六歳より五十歳までの女子

の登録を實施する旨發表した。

スキス

議會開會

去る十月の總選舉後初のスキス議會が十二月六日開會された。

シュテムプリ大統領に當選

スキス聯邦議會は、十二月十五日、一九四四年の大統領選挙を行つたが、結果次の通り

大統領に當選、ヴァルター・シュテムプリ、百九十七

票、現副大統領(急進民主黨)

副大統領に當選、ビレ・ゴラズ、百四十七票、現外相

(急進民主黨)

これと共に藏相エルヴスト・ヴェツターは辭職、聯邦参事官に轉出、その後任に社會民主黨選出のエルンスト。

ノブが任命され、カトリック保守黨選出の現聯邦参事會副議長ライングルーベル博士が聯邦参事會議長に任命された。

ヴァチカン

ローマ法王降誕祭放送要旨

十二月二十四日、ローマ法王ピオ十二世は、ヴァチカン宮に於て約四十分に亙り恒例のクリスマス放送を行ったが、その要旨は左の通りである。

「殺戮と破壊の大戦亂が益々激化するに伴ひ道義は全く地に墮ちた感がある。此の悲惨事から人類を救ふ手段は即ち人類を神の道に歸らしめるのみである。人類の幸福を單に經濟的世界制覇にあると信じた爲に神を認めない科學萬能主義者はその錯覺により當然の失望を受けるものである。此の悲しむべき現狀に於て

我々のなし得ることは戦禍を出来るだけ軽減するため努力すると同時に精神的物質的に苦しんでゐるものを慰めることに外ならないのである。然し決して成行に委せ傍觀せよと云ふのではない。カトリック信徒は須らく、廢墟の中から起上り、互に協力し公私共に他の模範となつて混亂してゐる社會を積極的に指導しなくてはならない。又未だに戦争の惨禍を直接に受けず或は戦争の渦中に在るが尙他を顧みる餘裕を持つてゐる諸國民は戦争の苦中に喘いでゐる國民に對し人道的援助と支持を與へ、戦争の惨害から生じる各種の問題に共同の責任を取り、精神的物質的再建設に協力すべきである。その再建設のプランは從來の失敗を繰返すことなくあくまで正義と光榮と友愛と慎重を基礎とし、武器に依つて強制せられず、人間の尊嚴とキリスト教的良心によつて眞の平和を希はなくてはならない。又世界の指導者達はその偏狹な自己獨善の武力に

對し徒らな自信的權利と正義に關する一方的解釋から脱却し、今こそ眞理に對し目を開かなくてはならない。眞の平和とは力の計數的結果に依るものでなく、その根底は道義と法に存在するのである。右の實現には武力に訴へなくてはならないことがあるとしても飽迄節度を有し、權利を擁護する力であることが必要である。これを壓迫するものに對しては充分に注意の要がある。余は和平の企圖が道義に基づき各國民の協同を確保する高い理想から生じるものであつて、新たな憎惡と復仇の原因とならないことを強調するものである。」

ブルガリア

シスマノフ外相外交方針闡明

シスマノフ外相は、十二月三日國會においてブルガリ

アの外交方針を闡明、樞軸並に中立國との協力を強調した。要旨は左の通りである。

「反樞軸空軍は最近二回に亙りソフィアに盲爆を加へたが、これは反樞軸軍がブルガリア國民の生存權に對し何等の顧慮を拂つてゐない證據である。前大戦終了後の一九一九年締結されたニユイイ條約によつてブルガリアは極めて不當な待遇を受けたが爾來ブルガリアは自國の生存權擁護に専念し來つた。しかしブルガリアが現在の地位を獲得するに至るまでドイツが示した數々の好意に對し無限の感謝を捧げてゐる。イタリアに關してはムツソリーニ主班の現政府のみを承認し外交關係を繼續して行きたい。」

ブルガリア國民は從來日本國民に心からなる讃辭を送つて來たが、殊に太平洋水域における最近の相次ぐ大戦果に對しては等しく喜びを頒つた。一方ブルガリアとハンガリー、ルーマニア、クロアチア、スロヴァ

キア等の隣邦諸國との協調は勿論だが、同時にトルコを始めその他の中立諸國とも緊密に提携して行かねばならない。」

ウアツソフ貿易相國民の一致團結を要請

貿易相ウアツソフ博士は、反樞軸諸國による恫喝を敢然排撃同國の政策は將來も不變の旨、十二月十七日、次の通り演説した。

「最近反樞軸諸國は不逞にもブルガリア占領地域の讓渡を要求し來つたが、これに對し憤激を感じない者は眞のブルガリア人ではない。ブルガリア政府は國民の團結にあらゆる努力を傾注し來り、現在は増産を標語に一踏生産戦に邁進してゐる。余はブルガリア國民の幸福と輝やかなしい將來とを信じて疑はない。」

クロアチア

對日親善關係益々増大
帝國政府は樞軸陣營の一翼たるクロアチア共和國に對し三浦書記官を外交代表として派遣することになり、同書記官一行は十二月十五日ザグレブに着任したが、十二月十六日から二日間に亙り各紙は右外交代表の到着及びその後の行動を大きく報道した。
そして翌十七日、主要紙は社説を掲げクロアチア獨立の基礎を固めた三國條約によつて結ばれた日本からの最初の外交代表者の派遣は兩國親善關係を益々増大する一方クロアチア國も亦新秩序の爲總力を擧げて戦ふものである旨を論じ、尙又最近の我國戦果に言及し多大の讚辭を呈した。

エジプト

バシヤ法相サウデイ・アラビア訪問

法相サラリ・アブドウル・バシヤは十二月二十日、サウデイ・アラビア國を訪問、國王イブン・サウドと會談したが、右會談で同法相はサウデイ・アラビアを回教國の新秩序運動アラブ聯盟案に加盟させるため極力勸説したと傳へられる。

トルコ

イノニユー大統領米英兩國首腦と會見

イノニユー大統領は、サラジヨグル首相ほか十五名の高官を帶同してカイロに赴き、チャーチル、ルーズヴェルトと三日間に亙る會談を終へて、十二月七日夜、アンカラに歸還した。

外相不參戰政策堅持聲明

メネメンジヨグル外相は、十二月九日、アンカラにおいて反樞軸並に中立國記者團と會見、トルコ政府從來の

政策には何ら變更がない旨特に確言するとともに、カイロ會談の重要性を指摘し、左の通り述べた。

「トルコ代表はカイロ會談に非常に満足して歸任した。會談においては何らの留保なしにあらゆる問題について意見を交換し國際政局のすべての様相、戦争のあらゆる部面について検討を加へた。」

今回の會談に際しては米英ソ三國政府はトルコ代表を招請した譯でソヴェート外務人民委員次長ヴィンスキーが出席する豫定であつたが、會談當時同次長はカイロから遠く離れてゐて九日漸くカイロに到着した。しかしヴィンスキー次長が出席しなかつたけれども會談にはソヴェート代表が出席してゐたことをこゝに指摘したい。會談の公報に明示されてゐた通り、英土兩國間の同盟條約は今回の會談で著しく強化されたが、同時に米ソ兩國とトルコ政府との關係も又殆ど英土兩國の關係と同様強化されるに至つた。會談中時に

應じては四國代表は假借ない率直さを以て問題のあらゆる様相を検討した。
記者團の間から會談の結果トルコ政府が一步參戰に近付いたかとの質問が出たところメネメンジヨグル外相は「トルコ政府の外交政策に何ら變更がない」と言明、更に次の通りつけ加へた。

「今度のカイロ會談は前回の英國外相イーデンとの會見乃至前年末におけるアグナ會談と同様トルコ政府と反樞軸各國との合作を目指してゐる。

尤もトルコ政府の合作は必ずしも非常に効果的とはいふことが出来ないが、今度のカイロ會談でも明かな通り右合作は相當貴重と思ふ。カイロ會談では非常に率直に三國代表と意見を交換し完全な了解に到達したが、トルコ政府においては、十一月十七日、共和人民黨議員團が決定した方針を遵守しトルコ政府の政策には何ら變更がない。カイロ會談ではトルコ代表は今ま

で知らなかつた色々のことを聞いたが、三國代表も又彼らが知らなかつたことを澤山トルコ代表から聞いたことと思ふ。三國代表はトルコ政府の利害關係に可能性を了解したが、トルコ代表とて三國の立場を了解することが出来た。」

共和人民黨政府政策維持

共和人民黨は、十二月十四日夜、アンカラのハルケヴィ(人民黨會館)において大會を開催し、前後三時間に互つてイノニユー大統領にメネメンジヨグル外相からカイロ會談の経過を聴取した。會議の席上黨員の間から種々質問が出たが、結局政府側の報告を全面的に承認して會議は散會した。

政府アナトリア震災被害發表

政府は、十二月七日、アナトリア地方を襲つた地震の被害に關し、十三日次の通り發表した。
死者 四千十六名

負傷者 四千七百七十一名
家屋倒壊 七百八十五戸

イラン

スヘイリ首相辭表提出

テヘラン來電によれば、スヘイリ首相は十二月十三日正午、國王と長時間の會談を行つた後、國王に辭表を提出した。右に關しテヘランからのロイター電報は、「テヘラン會談の結果反樞軸陣營からイランの地位が確認され、内閣の地位が強化されたので議會開會迄に、内閣を強化する見地から今回技術的に總辭職したに過ぎない」と報道してゐる。

新内閣成立

スヘイリ首相は國王レザ・シャー・パレヴィイより再組閣

の命を受けて十二月十五日組閣を完了した。イラン新内閣の顔ぶれ次の通り。

- 首相 アリー・スヘイリ(留任)
- 外相 モハメド・サイド(留任)
- 法相 サドル(留任)
- 蔵相 アルダラ(前保健相)
- 内相 アブゾール・フジール(前交通相)
- 交通相 ナローラ・エテンザム(前選信相)
- 商相 鑛山相 チヤフアイ將軍
- 陸相 サンド
- 農相 ノウシ・エスファンデアリ
- 文相 サテグ・サチ
- 逓相 サヤ
- 保健相 ガーニー博士

イ
ラ
ク

新内閣成立

十二月二十六日ロンドン發タス電によれば、ヌリ・サイ
ド首相は、十二月二十一日一旦、辭表を出した後イラク
攝政より再組織を委囑され、首相ヌリは、二十五日組閣
を完了した。閣僚の預備れ左の通り

- 首相兼國防相ヌリ・サイド
- 外 相 スプヒ・アルドウフタリ
- 内 相 オアマル・ナドミ
- 藏 相 アリ・ムムダス
- 法 相 サデイク・バツサン
- 公共事業相兼交通相
- アーマツド・ムクタール・ババン
- 文 相 アブドウラ・ハフイツド

經 濟 相 サルマン・ハルラツク
[尚、右の外、前首相テフフィク・スベリジー及び前外
相マジド・ムスタファアが夫々無任所相として入閣し、
前者は副總理に就任すると傳へられる。



昭和十九年一月二十日編輯
昭和十九年二月十日發行

(非賣品)

發 行 所 情 報 局

印刷者 印刷局